

SASUKE復興伝（ただし 中身は転生者）

メロンペン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

サスケに憑依転生した男が一族復興の名の元に一夫多妻を目指すお話になる予定。

*注意*この作品は基本的にR-15レベルの性的描写が有ります。

目次

転生者サスケと日向ヒナタ	1
アカデミー卒業試験	9
夢の班構成	17
第八班結成前	23
いのとサスケ	32
打倒紅	40
紅の誤算	48
写輪眼対紅	57
第八班と第十班	66
波の国へ	74
サスケと白（性別は女性化）	83
波の国活動記録	90

木の葉へ帰還の寄り道道中	100
中忍試験編その1	109
中忍試験編その2	115
中忍試験編その3	124
中忍試験編。塔での幕間	133
中忍試験編その4	143
中忍選抜試験編。本戦準備期間	153
中忍選抜試験編。準備期間折り返し	162
中忍選抜試験編。サスケの木の葉崩し対策	171
中忍選抜試験編。サスケと綱手	181
中忍選抜試験編。本戦開始	190

中忍選抜試験編。サスケ対ネジ

—

199

転生者サスケと日向ヒナタ

その日、目覚めた場所はいつもの自室では無くどこかの病院のベッドの上であった。何故こんな所にと疑問を覚えたが、それより更に驚くべき事が自分の身に起きてしまっていた。

「あ、ようやく目覚めたのね。先生、うちはサスケ君が意識を取り戻しました。」

「うちは……サスケ？それって俺の事？」

俺がうちはサスケに憑依転生して数日が経過した。

どうやら今はイタチによるうちは一族の殲滅任務が終わった後であり、俺事うちはサスケは三代目直轄の暗部に保護されて病院に搬送されたとの事だった。

入院中に三代目からイタチによる虐殺事件の事や事後処理に関して色々説明を受けたが、原作を読んでイタチの真実を知っている以上、イタチに対して復讐なんて感情は起きて来ない。むしろ木の葉の上層部、特にダンゾウや相談役二人に対してのヘイトが

溜まってしまおう。

「と言つても俺が真相を叫んでも証拠が無い以上誰も信じないだろうし、それどころかダンゾウに口封じされる可能性が高くなるだけだろうなあ」

明日からはまたアカデミーに通う事になるのだが、転生したとはいえあくまでも漫画の知識が有るだけの自分では授業内容を理解出来るかどうか今から不安で一杯だ。いつその事アカデミーを辞めてしまおうかとも考えたが、自分の立场上それをする事も出来ず溜息しか出てこない。

「下手したらナルト以下の落ちこぼれになったりして……つて噂すればなんとやらか」

土地勘を養う為に里を散歩していると川辺に一人座り、水面を見つめる原作主人公うずまきナルトの姿が目に入った。里でのナルトの立場を考えると声をかけて仲良くするべきなのだろうが、そうすると今後の原作の流れにも影響が出てしまいかねない。どうするべきかと考えていると、ナルトに近寄る複数の人物が目に入った。

「おいナルト、そんな所で何やってるんだよ。明日手裏剣術のテスト有るの忘れたのか？」

「暇なら僕達と明日のテストに備えて手裏剣の練習しない？ね、シカマルも良いでしょ？」

「俺は本当は面倒くせえからやりたくないけど、チョウジやキバがやる気満々だから仕方ねえか」

「お前ら……そんなに言うなら付き合っつてやるつてばよ!!さ、皆俺について来い!!」

「お前が仕切るんじゃねえ」と掴みかかるキバと喧嘩しながら去って行くナルト達を見つめ、俺はその場で只立ち尽くしていた。

「何だアレ?普通にナルトに友達いるじゃねえかよ。もしかして本当の意味でポツチだったのはサスケの方だったのか?」

まあ、原作やアニメでもナルトはシカマル達と一緒に居た描写は確かにあったがと思いつつナルト達の去っていった方向を見つめていたが、ふと視線をずらすと物陰からもう一人ナルト達の姿を見つめる人物の姿が目に入った。

「次々と原作キャラに出会う日だな……おい、日向ヒナタ。そんな所で何やってるんだ?」

「ひゃ!!さ、サスケ君?こんな所で何を……入院してるつて聞いてたけど……」

「昨日退院して明日からまたアカデミーにも通う予定。で、俺の質問には答えてくれないう訳?」

質問に質問で返されたので再度訊ねると、言いにくいのかモジモジしてハッキリと答えてはくれない。まあ、ナルトが好きで影から見つめてたなんて、人によってはストー

カーと言われてもおかしくは無い為言える筈もないだろう。

「なあ、ところでさつきアイツ等が話してたんだが明日手裏剣術のテストが有るって本当か？」

「え？う、うん。私も自信ないから練習しないといけないんだけど……あ、サスケ君は手裏剣術得意なんだよね？先生も流石だつて褒めてたしやっぱり凄いよね」

残念ながら手裏剣が得意なのは転生前のサスケであり、今の俺は投げ方はおろか持ち方も知らない素人同然の忍たまである。

「ま、まあな……な、なあ日向は今暇か？もし暇なら少し手裏剣の投げ方を教えて……やるけど付き合ってくれないか？」

「わ、私が？で、でも……あ、あれ？ナルト君達何処に行っちゃったんだろ？」

そう言つてナルトを探す為に辺りを見回すヒナタであったが既にナルト達の姿は影も形も無なった。

「ほら、早くしないと時間が勿体ないだろ。なるべく人目に付かない所で練習しようぜ」

多少強引だがヒナタと手裏剣術の修業をする事になった俺は、人目に付かない場所として南賀ノ神社の境内までやって来た。

「さ、まずは日向の腕を見たいから早速何枚か的に向かって投げてくれ。」

「う、うん……えくと、まずは基本の十字手裏剣から」

手裏剣を構えて的の前に立つヒナタの後ろで、俺はチャクラを練って目に集中させる。すると黒い瞳が段々と赤く染まっていき両目が写輪眼へと変化を遂げた。

（よ、良し!!原作通り虐殺現場で写輪眼を開眼してみたみたいで本当に助かった!!これでヒナタの動きをコピーすれば何とか……）

手裏剣を持つ指から足先まで、ある意味舐め回す様な視線でヒナタの一挙一動を見てその姿を脳裏に焼き付けていると、ふとある考えが沸き起こった。

（そういや……サスケってイタチへの復讐と同時に一族の復興も野望の一つとして掲げてたんだよな。俺は復讐はする気はないけど一族復興くらいならやってもいいかもな）

一族復興の為には何をすればいいか？それは勿論、優秀な子孫を多く作る事である。

その為には……ナルトには申し訳ないがこのチャンスを逃す訳にはいかない。脇目も振らずに手裏剣を投げ続けるヒナタの背後に歩み寄るとその手を掴んでヒナタの背中に自らの体を押しつけた。

「さ、サスケ君!?!急に何するの?そ、そんなにくっ付いたら私投げられない……」

「いや、さつきから見てたけど中々に当たらなくて困ってる感じだったからさ。こうして手取足取り教えた方が上達すると思ってる……」

ゴルフ場で若い子にセクハラする教官の様にヒナタの指に自らの指を絡め、もう片方の腕で離れようとするヒナタの体を押さえつけつつ腰から腹の部分を撫で回していく。

もう少し年齢が高ければヒナタも危機感を覚えたのだあろうが、お互い7歳の子供であるという事が幸いして純粹に俺が手裏剣指導をしてくれていた勘違いしてくれた様で、顔を赤く染めながらもその身を委ねるのであった。

空が赤く染まり始めた頃。当初の目的であった手裏剣修業は完全に中断し、南賀ノ神社の本堂の中で俺は将来湯船に浮かぶほど大きくなる予定のヒナタの胸を撫で回しながら、首筋や耳たぶを舐めたり甘噛みをしてその反応を楽しんでいた。

「ああ……あ、ああ……んんう。だ、駄目……サスケ君こ、こんな事もう……」

「何言ってるんだ？修業の後にはちゃんとマッサージしなきゃ明日に差し支えるだろ？」

「で、でも……こんな……日なこと私……ひゃんっ!!」

どうやらようやく自分が性的な悪戯をされていると理解したヒナタであったが時すでに遅く、服の中に手を潜り込ませて直接胸の突起をやや強めに摘まんでやると刺激が

強かったのか、大きな声を上げると同時に体を震わせる。

「うっ……ううう……ど、どうしてこんな酷い事をするの？お願いだからもう止めて……」

日向一族特有のその白い目に涙を浮かべ、未だ胸への愛撫を止めようとしないうえへと弱弱しく懇願するヒナタであつたが、こんな中途半端な状態で止めてしまえば後で自称木の葉最強の一族の長に何をされるか考えただけでも恐ろしい。一旦胸への愛撫を止めてヒナタと向き合う様に座り直すと、その怯える体を優しく抱きしめながら耳元で謝罪の言葉を告げる。

「日向、悪かった……俺、兄さんに父さんや母さんを殺されてどうかしてたんだ……だから、もう少しだけこのまま抱きしめさせてくれないか？」

「えっ……そ、そうだったんだ。で、でもそれとこれとは話が……」

「日向……いや、ヒナタ。俺はうちは一族の生き残りとして一族を復興させるのが使命だと思ってる。その為にはどうしてもお前の力が必要なんだ。だから……ヒナタのこれからの人生を俺と共に歩んでくれないか？」

サスケの様なイケメンでなければ許されない背筋がムズ痒くなる台詞を耳元で囁くと、ヒナタは自分の事を必要だと言われた事に加え、告白にも聞こえる臭い台詞にこれまで以上に顔を赤くして動揺していた。

「で、でも……わ、私は……な、ナルト君の事が……す、好きなの。だからサスケ君とは……」

「そうか……でも忘れないでくれ。俺はヒナタの事をいつでも受け入れるって事を」

若干芝居が大根になって来たのでボロが出る前に打ち切ろうと思い、乱れたヒナタの服装を整えて日向の屋敷まで送って行く事にした。その際好感度を確認する意味を込めて手を差し出すと、一瞬戸惑ったものちゃんと手を取って貰い、うす暗くなった神社を後にして一路ヒナタの家まで歩みを進めた。

ちなみに、翌日行われた手裏剣のテストはお手本を見せてくれたイルカ先生の動きをコピーした事で何とかトップの成績を確保する事ができ、ナルト達居残り授業組入りをする事を回避する事が出来たのであった。

アカデミー卒業試験

月日は流れ、俺がうちはサスケに転生して5年の歳月が経過した。

不安だったアカデミーの授業も写輪眼を含めたサスケの元スペックと、俺の転生者知識のおかげでどうにか学年トップの成績を維持する事が出来た。

まあ、7割以上はサスケの肉体の能力値のおかげで俺の知識が役立ったのは精々3割程度だったのだが、俺の知識が生きるのはアカデミー卒業後からが本番である……筈だ。

尚、この5年の間でヒナタとの関係はかなり良好な物となった。

最初の1年くらいはやはり例のセクハラまがいのボディタッチが尾を引いたのかやや避けられ気味であったが、根っから気の弱い性格のヒナタには積極的に押した方が良くと判断し、アカデミーが休みの日には少々強引に連れて来る形で共に修業をすることにした結果、徐々にだが確実に俺とナルトとの好感度の差が縮まっていき遂にナルトと同等……いや、今では俺の方が上回っていると確信している。

「だってナルトにはこんな風に触らせたりしてないしな。そうだろヒナタ?」

「あつ……だ、駄目えサスケ君……今日は明後日の……んう……卒業試験の為のお……」

そう、明後日はいよいよ忍者アカデミーの卒業試験であり今日はその為の修業をする筈であったが、俺はヒナタとの専用修業場となった南賀ノ神社の本堂の中で、この5年の間でそれなりに成長したヒナタの胸をパーカーの上から揉みしだいて喘がせていた。

「大丈夫だって、ヒナタの実力なら一発合格できる。一緒に修業してきた俺が保証してやるよ」

「そ、そうかな?さ、サスケ君がそう言ってくれるなら……あんつ」

既に何度も奪ったヒナタの唇に己の唇を合わせようとしたが、少し意地の悪い事を思いついて胸から手を放して立ち上がった。

「でも……ヒナタの言う事も最もだし、そろそろ修業を再開するか」

「えっ?そ、そんな……サスケ君……あの、き、キスは……」

「ん?修業の方が大事って言ってるのはヒナタじゃなかったか?ま、ヒナタがどうしてもってお願いすれば話は別だがな」

転生する前では妄想でしか言えない様な台詞を言いながらヒナタの反応を楽しんでいると、暫くモジモジした後によくやく口を開いた。

「う、うう……さ、サスケ君……私に……き、キスをして……下さい」

「ヒナタのお願いなら仕方ないな。でも、キスだけで本当に満足なのか？」

「あうう……サスケ君の意地悪……んっ……あむっ……ふう……」

その日は結局修業を再開する事はなく、俺は明日……原作で言えば第一話が始まる事への不安と期待に胸を躍らせながらヒナタに覆い被さった。

翌日、イルカ先生から明日の試験についての説明が行われるが、教室内にナルトの姿はやはり見当たらず、俺は窓から大人達がざわついている姿を眺めていた。

「お前達、何度も言う様だが明日はいよいよアカデミーの卒業試験が行われる。この中には何度か卒業試験を受けた者もいる様だが……ん？ そう言えばナルトは何処に行っ
た？」

ようやくナルトが居ない事に気が付いたイルカ先生であったが、それと同時に教室のドアが開けられ、後にナルトに禁術の巻物を盗ませる最初の敵であるミズキが教室に駆けこんできた。

「イルカ先生大変です!!ナルト君が今度は火影岩にイタズラを!!」

「な、何い!?皆、暫く自習していてくれ!!」

そう俺達に言い残し、イルカ先生とミズキは教室を飛び出していった。

当然の事ながら残されたクラスメイト達の中で自習する者は誰一人おらず、先生が居ないのを良い事にそれぞれ仲の良いグループに分かれて雑談をし始めた。

「つたくナルトの野郎、この後なんか面倒くせえ事になりそうな予感がしてきたぜ。」

「どうして?イタズラして怒られるのはナルトだけでしょ?」

「馬鹿かよチョウジ。この前連帯責任とか言われてクラス全員で学校の掃除やらされたのもう忘れたのかよ」

「確かに。しかし連帯責任というならイルカ先生も責任を取らなければならない。何故ならイルカ先生には監督責任と言う物が有り……」

原作の主要メンバーであるシカマル、チョウジ、キバ、シノがそんな会話をしている中で、俺は誰一人として自分に話しかけてこない状況に若干だが焦りを感じていた。

(はあ、ヒナタ以外には原作のサスケっぽく振る舞ってた所為で卒業前にも関わらず男友達0かあ……ま、男友達のうちには復興には特に必要ないから別にいいんだけどな)

ボッチである事への言い訳ではないと自分自身に言い聞かせながら机に突っ伏していると、ようやくイルカ先生がナルトを連れて教室に戻り、原作通り変化の術のテスト

が行われることになるのだった。

そして卒業試験当日。原作通り試験内容は分身の術となり、一人、また一人と隣の教室に呼ばれて行き、今の所失格者は誰一人出ていない状況でナルトの順番が回ってきた。

「おいナルト、チョウジもキバも合格したんだ。お前も今回こそ落ちるんじゃないぞ」
「わ、分かっているってばよ!!見てろ、今度こそ必ず合格してみせるってばよ!!」

シカマルにそう啖呵を切って教室を出て行くナルトだったが、数分後に落ち込んだ表情で教室に戻ってきた姿を見てクラスメイト達はまた落ちたのかと大笑いを始めた。

「ぎやはは!!やつぱりナルトの野郎落ちやがったぜ!!」

「そりやそうだろう。ほら見ろ、卒業の証の額当てだぜ。どうだ羨ましいか?」

落ち込むナルトを煽る原作では名も無きモブクラスメイト達を尻目に、俺は自分の順番が回って来たので教室を出ようとする。その際、ナルトの方に視線を向けると丁度ナルトも俺の方を見た為、お互いの視線がぶつかった。

「な、何だつてばよサスケ!!お前も俺の事馬鹿にしやがるのか!」

「別に……ただ、今回も運が悪い奴だと思って見たただけだ。」

それだけ言って教室を後にし、俺はイルカ先生とミズキの前で合格者の平均である分身3体を作りだして無事合格を果たしたのであった。

試験はナルト以外の受験者26人は皆合格を果たし、俺は額当てを片手にアカデミーの屋上から試験に合格した事を報告するクラスメイト達とそれを喜ぶ家族達を眺めていた。

「アイツ等……ああやって喜んでるのは良いけど、原作だと七、八、十班メンバー以外の18人はアカデミーに戻される事になるんだよなあ」

その割にはアカデミー内で出戻りの人間を見かけた事は無いのだが、恐らく出戻り専用の教室でも用意してあるか、もしくはアレはカカシの方便であり、実際は原作で描写されなかっただけで普通に下忍として任務を行っていたのかもしれない。

「あ、そう言えば班分けって原作通りになるのか？もしナルトやサクラと違う班になったりしたら……でも、今後の展開を無視して良いなら個人的には紅先生の班に入りたいな。班員は俺以外はヒナタとサクラ、もしくははいの辺りで……」

絶対ありえないであろう夢の班構成を妄想しつつ、俺は今夜起きる事件に備える為に学校を後にした。

その日の深夜、ナルトはミズキに教えて貰った巻物を手に入れようと三代目火影の家に忍び込んでいた。

「見てろ、絶対に巻物の術を覚えて卒業してみせるつてばよ。そうすればあの野郎も俺の事……」

「ナルト、こんな夜中にワシの家で一体何をしておるんじや？」

「げえ!?お、お色気の術!!」

三代目火影を鼻血の海に沈めると、ナルトは目的の巻物を見つけ出して一目散に三代目の家を逃げ出し、一刻も早く術を習得しようとしてミズキに教えられた修業場所に駆け出した。

「くくく、予定通りナルトの奴巻物を盗んでくれたみたいだな。さ、お次はイルカや里の奴らにこの事を……」

自分の計画通りに事が進みほくそ笑むミズキであったが、三代目の家に忍び込むもう一人の影に気付くことは無くその場を立ち去るのだった。

「さくで、お目当ての物が見つかるかどうか……お、有った有った。さ、早い所内容を書き写さないと……」

姿はナルトであるが、その目は赤く染まっている侵入者は盗まれた禁術の書と同じ柵に安置されていた巻物を解き、そこに記されている術を可能な限り書き写すのであった。

夢の班構成

ナルトによる禁術の書持ち出し騒動から数日後、アカデミーの教室では卒業試験に合格して額当てを与えられたばかりの少年少女達が集まっていた。

当然ながら俺もその内の一人であり、最近ある術の習得の為に削っている睡眠時間を少しでも稼ごうと教室の机にうつ伏せになって時間を潰していた。

だが、貴重な睡眠時間を邪魔する騒がしい声が聞こえてきたので顔を起こして横に視線を向けると、ナルトが自らの額に指を差してイルカ先生に貰ったであろう額当てをシカマル達に見せつけていた。

「おいナルト、お前どうしてここに居るんだ？今日は試験合格者だけの説明会だぞ」

「ば〜か、お前からコレが見えないのかよ。俺も今日から忍者だつてばよ」

「けつ、たかが分身の術も出来なかつた癖に。どつかから盗んできたんじゃねえのか？」

「違うよキバ、ナルトが盗んだのは三代目の巻物だよ。この前父ちゃんがそんな事言うて……」

？
そう言えばあの夜、ナルトを殺す事に賛同した秋道一族はチョウザだったのだろうか？

折角転生したのだから真相を確かめれば良かったと悔やんでいた時、勢いよく教室のドアが開けられ二人の女子が競い合う様にして入って来た。

「ぐ、ゴール!!はあはあ……ま、また私の勝ちねサクラ」

「な、何言ってるの!!私の方が一歩先に教室に足が入ってたでしょ!!」

一人は金髪のポニーテールと紫のノースリーブ姿が特徴の山中の。

もう一人は桃色の長髪を額当てで纏め、赤いアオザイ風の服を着た春野サクラである。

この二人は原作通りサスケに好意を持っていたのだが、俺はアカデミー在学中はヒナタの方に構いっぱなしで二人の事は若干放置気味であった。だが、その事が逆に二人を本気にさせたのか、今ではお互いに競い合う様に俺に対して積極的にアプローチを仕掛けて続いていた。

「あつ!!サスケくうん!!隣空いてる!?!私座っちゃってもいいかな!?!」

「何言ってるのよ!!サスケ君の隣に座るのは私よ!!ね?いいでしょ?」

くノークラスでトップクラスの容姿である二人が自分に迫るこの状況は悪くないが、この後ある意味NARUTO最大の事件が待ち受けているのを思い出した。

その事件とはそう……ナルトとのキスである。

百歩譲ってお色気の術状態ならまだしも……いや、やっぱりどんな姿であってもナルトとキスをするなんて絶対御免だ。

「おいサスケ、折角サクラちゃんが話掛けてるのに無視するってどういう事だつてばよ」
「うるさい。俺に近寄るな。向こうに行つてろ」

このままナルトとの相手をしていたらキスは避けられないかもしれない。そう思つて席を変わろうと立ち上がろうとした俺の目に飛び込んだできたのは、サクラに突き飛ばされて俺の方に倒れかかつて来たいのの顔であつた。

「んぐつ?!んう……んんつ……」

「「きやあああつ!!さ、サスケ君といのがああああつ!!」」

「え……あ、あああああつ!!な、何やつてるのよこのイノブタあ!!」

突然目の前で起きた事が理解出来ていなかったサクラであつたが、周囲の他の女子の

悲鳴で我に返ったのか鬼気迫る勢いで未だ俺と唇を合わせたままのいのを引き剥がした。

「ふあ……さ、サクラ？……な、ナイスアシスト!! 流石は私の親友ね!!」

事故とはいえ初めてであるうキスを俺にする事が出来て、いのは赤くした満面の笑みでサクラに対して礼の言葉を投げかける。

「しゃんなるー!! 誰が親友よ!! いの!! サスケ君の唇を奪った罪は重いわよ!!」

だが、サクラにはそれは自分に対しての煽りにしか聞こえなかつたらしく、騒ぎを聞きつけた教師たちが駆け付けるまで教室では新米くノ一達による忍術合戦が行われるのであった。

山中いの以外の女子たちから険悪な空気が醸し出される中始まった説明会はようやく終わりに近づき、遂にイルカ先生から各班のメンバー構成が発表され始めた。

色々妄想はしたが、やはり転生した知識を活かすには原作通りの班構成がベストだと

思っていた俺は、発表された第七班の人員構成に耳を疑ってしまった。

「何だナルトと一緒にかよ。俺の足引っ張るんじゃないぞ」

「それはこっちの台詞だつてばよ。でも、俺らの班女の子一人も居ないつてばよ」

「問題ない。何故なら雌の蟲が俺の体の中に……二人共、俺の冗談を聞いてくれないのか」

ナルトが七班なのは原作通りなのでまだ良い。だが、どうしてキバとシノが七班のメンバーになっているんだ？班を考えた奴はちゃんとバランスを考えた上で決定したのかとイルカ先生に質問したくなった。

「えー次は第八班だな。まずは日向ヒナタ、それに春野サクラ。そして……うちはサスケ」

その瞬間先程まで不機嫌だったサクラは一転して満面の笑みを浮かべて歓声を上げ、同じく第八班のメンバーとなったヒナタも小さくガッツポーズをしてその喜びを噛み締めていた。

「しゃんなろー!!サスケ君と一緒に班ゲットよー!!」

「さ、サスケ君と一緒に班……良かった。」

(……俺が第八班?しかも他のメンバーはヒナタにサクラ。担当はあのくノ一先生なの

か?)

その後、前班の説明を終えたイルカ先生から担当の上忍がやって来る午後まで解散となり、俺は原作から逸脱してしまったこの状況を整理する為、一人教室を後にするのだった。

「嘘……どうして私がサスケ君と一緒にじゃないの？キスまでした間柄の男女を引き裂くなんて……この世に神様は居ないの？」

「ねえシカマル、さっきからのがブツブツ独り言言ってるけど大丈夫かな？」

「ほっとけ。下手な事言つて八つ当たりされちやたまんねえからな」

第八班結成前

アカデミーの一室に設けられた上忍控え室で、新米上忍のくノ一である夕日紅は自分が担当する事になる第八班の下忍達のプロフィールに目を通しながら溜息を吐いていた。

「どうした紅、溜息なんて吐いて悩み事か？」

そんな紅の様子が気になったのか三代目火影の息子であり、第十班の担当上忍となる猿飛アスマは煙草を片手に紅の側に座って、その手に持つ資料を覗き見しようとする。

「ちよつとアスマ。アカデミーの校舎は禁煙だつて言われてたでしょ。それに、これは私の担当する子達の個人情報なんだから勝手に覗き見しないで」

「ん？そうだったか？まあ固い事言わずにちよつとそれ見せて見ろ。どれどれ……」

紅の手から資料を抜き取り、啞え煙草でそれを読むアスマだったが一通り目を通した所でニヤリと笑みを浮かべる。

「成程、これは新米上忍のお前には少し荷が重いかもな」

その態度が気に障ったのか、紅はアスマの手から資料を奪い取ってキツと睨み付けた。

「どういう意味よ。事と次第によつてはアナタでも許さないわよ」

「ははっ悪い悪い。しかし、まさかあのうちは一族の生き残りをお前が担当する事になるとはな。俺はてつきりカカシの奴に押し付け……預けられるかと思つてたんだがな」

謝罪の言葉とは裏腹に、悪びれる様子も無く笑つているアスマに対して憤りを感じた紅であつたが、これも彼なりの不器用な気遣いなのだろうと思う事にし、再び手にした資料をもう一度一人ずつ確認し始めた。

登録番号 012601 春野サクラ。忍術○ 体術△ 幻術○ 協調性○ 積極性○
 授業態度◎

アカデミー在学時は筆記テスト等の座学は常に満点の優等生ではあるが、それ以外は特筆すべき長所は無く、平均的な卒業生レベルと評価されていた。

（彼女は特に問題なさそうね。教師からの評価は平凡だけど頭も良さそうだし、もしかしたら私と同じで幻術の才能が有るかもしれないわね。次は……日向の宗家の子ね）

登録番号 012612 日向ヒナタ。忍術○ 体術◎ 幻術○ 協調性◎ 積極性△

授業態度◎

木の葉の名門である日向一族の宗家の長女である彼女は、アカデミー入学当初は気弱で引つ込み思案の性格と、当主であり父親である日向ヒアシから「この子には才能が無い」と評された通りでやや落ちこぼれ気味であった。

だが、数年前から徐々に自信と実力を付けていき、今期の卒業生の中で上位に入る実力であると評価されていた。

(日向宗家は色々厄介事が有るって噂だし、彼女は彼女で問題ありね。そしてこの子が……)

登録番号012606うちはサスケ。忍術◎ 体術◎ 幻術○ 協調性△ 積極性

△ 授業態度○

実の兄であるうちはイタチによる一族虐殺事件の唯一の生き残りであり、複数の教師の証言から既に写輪眼を開眼している今期の首席卒業者である。しかし他の生徒と比べて特別抜きん出ているという訳では無く、次席である油女一族の生徒と甲乙つけがたい差であると評価であったが……。

(実力云々は別として、兄であるイタチに対して復讐心を持っていない訳が無い……か。

本当にそうだったとしたら面倒な子を預かる事になるわね)

「ま、そうやって教え子の事に悩むのも上忍としての務めだな。それよりまだ時間が有る事だしこれから一緒に飯でも……」

「猿飛アスマさん、校内は禁煙だつて私説明しましたよね？その手に持つてる物は何ですか？」

背中越しに聞こえてきた声に固まり、恐る恐るアスマが振り返るとそこに立っていたのは、清く正しく美しくを教育方針に掲げているくノークラスの女教師のスズメであった。

「す、スズメ先生。こ、これはですね。その……お、おい紅何とか言ってくれ」

「自業自得でしょ。スズメ先生、ルールの守れない上忍にたっぷり説教してあげて下さい」

悪さをしたアカデミーの生徒の様に廊下に立たされて説教を受けているアスマを尻目に、紅は復讐に囚われたサスケを正しく導く事が出来るのだろうかとまた深く溜息を吐いた。

一方その頃、本音では嬉しい夢の班について頭を悩ませていたサスケは、空き教室に一人で居た所を何者かに襲われて縛られ、現在縄抜け術の真つ最中であった。

「あくようやく抜けられた。ナルトの野郎、こういう所だけ原作通りにしやがって」

襲ってきた相手の正体は勿論うずまきナルトであり、言い訳にはなるが別々の班となった事で襲ってくる訳ないだろうという思い込みで油断していた所に、影分身の術を使った人海戦術の奇襲の前ではいくら俺が写輪眼を使えるとしてもナルトを返り討ちにするのは難しかった。

ナルトは俺を縛りつけた後、原作通り俺の姿に変化して「ざまあみろ」と捨て台詞を吐いて教室を去って行き、今頃サクラの元に居るか、腹を壊してトイレに籠っているかのどちらかであろう。

「でもま、おかげで影分身の術をコピーする事が出来たんだからそこだけは感謝しないとな」

もつともナルト程チャクラが多く無い俺は千人の影分身は当然の事ながら不可能で、その百分の一である十人前後作り出すのが精一杯ではあるのだが、それでもこの術が使えると使えないではあらゆる面でその難易度が変わってくる。

それに原作でナルトだけの修行法と言われた影分身を使った修業時間短縮法も、兵糧丸を摂取してチャクラを回復・増幅をすれば恐らく自分にも使用できるかもしれない。

「兵糧丸代で財布がかなり厳しくなるだろうけど早速今夜から試して……あ、そろそろサクラの所に行った方が良いか？」

俺に化けたナルトに騙されて、今頃待ちわびているであろうサクラの元に向かた方が良い思い廊下に出ると、偶然そこには、先程事故でその唇を奪った相手である山巾いがブツブツと独り言を言いながら廊下の窓にもたれかかっていた。

「サスケ君……どうしてサクラにあんな風に……。私とのキスは只の事故だったって言うの?」

どうやらいのは俺に変化したナルトがサクラに迫る例の場面を目撃したらしく、俺と別々の班になったシヨックとのダブルパンチで普段の気が強く堂々とした姿は見る影も無く落ち込んでいた。

「はあくサクラだけには負けたくなかつただけどなあ……サスケ君……」

「それ、俺じゃなくてナルトだぞ」

「きやあ!!さ、サスケ君!?!ど、どうしてここに!?!それよりさっきのがナルトって一体どういう事なの?」

気付かれない様にこっそり近づき後ろからそう告げると、驚きのあまり俺が相手なのも忘れて事情を聞こうと詰め寄ってきた。

「そのままの意味だ。俺は今までナルトの所為でこの教室の中にずっと居たんだ。で、それにも関わらずお前が俺の姿を見たって事は……」

縛られていた事はぼかしつつ事の詳細をいのに説明すると、先程まで落ち込んでいたのが嘘の様に明るくなり、ナルトに騙されたサクラを小馬鹿にする程に元気を取り戻していた。

「な、なくんだ。私も本当はおかしいなって思ってたのよ。それにしてもやっぱりサクラは大した事無いわね。ナルト程度の変化の術も見破れないなんて。もう一回アカデミーを通い直したらいいんじゃないかしら」

「という事はさつきまで誤解していた誰かも同じ様に通い直すってなるんじゃないか？」

いのの発したブーメラン発言にツツコミを入れると効果は抜群だったらしく、誤魔化そうと必死に取り繕い始めるその姿を見ると、今まで手を出さず放置していた事を段々と後悔し始めてきた。

（まだ集合まで時間ももあるし、今からサクラの所に行くより……）

「そ、そう言えばこんなにサスケ君と話したの私初めてかも。と、ところでさっきの教室での事なんだけど……アレ、私のファーストキスだから」

「さっきの事故の事か？悪かった、ちゃんと受け止めてればあんな事起きずに済んだんだが」

あくまでもアレは事故で俺はそれ以上の事は気にしていない風を装うと、いのは目に見えて落ち込んでしまったので、俺は周囲に人が居ない事を確認して一步步近づいていく。

「そ、そう……あ、あれ？サスケ君そんなに近づいて……んうっ!？」

戸惑ういのを逃げられない様に体を廊下の壁に押し付けながら、俺は本日二度目となるいのの唇に自らの唇を押し付けた。

突然の出来事に混乱気味のいのを大人しくさせる為、俺はこの5年の間にヒナタとの修業で培った舌遣いと柔拳をコピーする為に会得した技術を使い、いのの啞内を蹂躪しつつ服の上から胸の先端部分をチャクラを込めた集約した指で刺激を与える。

「んんっ!!ぶあっ!!さ、サスケく、ひゃうっ!!ま、待つ、むぐっ!!」

待たない。ここまでしたならもう引き返す事はしたくない。俺は生まれて初めて絶頂して足元がおぼつかなくなっただけの抱きかかえ、再び空き教室の中に戻った。

「ナルトお!!今度という今度は絶対許さないわよ!!乙女の純情を踏みにじった報い!!その命で償いなさい!!」

「ま、待ってこれってばよサクラちゃん!!はうっ!!さ、先に便所に行かせてくれってばよお!!」

サスケがいのと教室で何かし始めたのと同時刻、体術が苦手であると評価された筈の春野サクラがその体型からは想像出来ない腕力を行使し、何故か腹を抑えて青い顔をしたうずまきナルトを追いかけ回している姿が目撃されるのであった。

いのとなすケ

「ん？そろそろ戻らないと間に合わないか。いの、続きはまた今度で構わないよな？」

教室に備え付けられている時計に目を向けると、集合時間まであと数十分前にまで迫っていた。

俺は背中から抱きかかえてその体を揺らしているのにそう告げるが、まだ終わらせて欲しくないのか弄る事を止めた俺の腕を掴むと、いのは自らの胸に俺の手を押し当てて先程まで与えていた刺激を再開させて欲しいと懇願してくる。

「や、やあ……なすケ君。も、もつと……もつと私の事お……」

「そうは言っても集合に遅れる訳にはいかないだろ？」

と言いつつも、押し付けられた事でよりハッキリと伝わってくる胸の柔らかさと突起の固さ。

それに抱きかかえている事で下腹部に伝わってくる温かさと感触の誘惑に抗えず、再び指先にチャクラを集中すると、これが最後だと念を押してその固くなった先端部分を指先で摘まんで体を揺らすのを激しくする。

「仕方ないな。じゃあもう一回いのが達したらそれで本当にお終いだ。」

「あんっ!!だ、駄目っサスケくっ!!そ、そんな激しくしたらす、すぐにいい!!」

胸の先端部分や脚の付け根付近から臍までの下腹部。写輪眼を使って見切ったいの弱い所を重点的に刺激を与えると数分足らずで達してしまい、流石にこれでは俺が消化不良という事で結局は集合まで残り数分になるまで空き教室での秘め事を続けてしまおうのだった。

その後、いのにこの事は二人だけの秘密する事を約束させて説明会場の教室に戻ると、遅刻はギリギリで免れたものの、二人一緒に教室に戻って来た事が気になったのか、何やら機嫌の悪いサクラがいのに激しく追及をし始めた。

「いの!!どうしてサスケ君と一緒に戻って来たのよ!?! 一体何をしていたか教えなさい!!」

「さ、さあね。それより聞いたわよ。アンタ、ナルトに騙されてキスしそうになっただって?」

「ぐっ!!折角忘れようとしてる私の黒歴史を……ああ思い出したらまたムカついて来たあ!!」

そのサクラの叫び声と他の女子からの軽蔑の視線で居心地が悪いのか、何故か服を着

替えているナルトは元氣なく縮こまって項垂れていた。

「やれやれ……ん？どうしたヒナタ？何か機嫌悪いみたいだけど」

「……サスケ君。どうしていのちゃんにも……その、あんな事を？」

いつの間にか隣に座ってきたヒナタにそう訊ねると、何やら齒切れ悪くいこのとの關係を訊ねてきた。

どうやら機嫌の悪い理由は先程のいのとの秘め事が原因の様で、ヒナタは自分を放つておいていのを構っていた俺に対してヤキモチを焼いている様であった。

「なんだヤキモチ焼いてるのか。心配しなくてもヒナタの事を蔑ろにしたりしないから許してくれ」

「でも……いのちゃん私とは違って可愛くて優秀だから……んっ」

機嫌を直して貰おうと隣に座るヒナタの太ももに手を伸ばし、その付け根部分を撫で回すとヒナタは自らの指を口に咥えて俺から与えられる刺激で発しそうになる喘ぎ声を顔を赤くして必死に耐えようとする。

「でも、ヒナタがそれを知ってるって事はさては白眼を使って覗いてたな？こつちの感触といい随分とムツツリに成長しちゃったみたいだな」

「そん、なっ……ふうんっ……さ、サスケ君……はう……こ、こんな所……誰かに……見られたら」

「それもそうだな。じゃ、この続きはまたいつもの場所で……」

そう言つてヒナタの太ももから手を放すと同時に教室の扉が開かれ、イルカ先生と数名の上忍らしき人物たちが教室に入つて来た。

「……何時までも騒いで無いで静かにしろ。これから皆がお世話になる上忍の先生方を紹介するぞ。その後はそれぞれの担当上忍の指示に従う様に。まずは第〇〇班……」

イルカ先生による簡素的な紹介が終わると、各班はそれぞれの上忍に連れられて教室を後にした。

もつとも、原作通り遅刻しているカカシが担当する第七班はまだ教室に残っているのだが、俺にとつては別の班の事なのでこれからどうなるかはもう知る由は無い。

「それじゃあ、改めて自己紹介するわね。私の名前は夕日紅、上忍に昇格したのはつい最近の事だから新人の下忍を預かるのは今回が初めてだけど、だからって甘やかすつもりは全然無いから覚悟しなさい。何か質問が有るなら答えられる範囲でなら答えてあげるわよ」

そう、今の俺はもう第八班の人間であり原作とは違う流れを進もうとしているのだ。

一度は違う班になった事を悩んだりしたが、そもそもヒナタに手を出した時点でもう原作からは外れてしまっているし、俺がイタチに復讐する気が無い以上は今後もつきな原作とのズレが発生する筈である。

(だからナルト……お前は俺が手伝わなくてもマダラやカグヤを倒せるくらい強くなつてくれよ)

原作主人公のナルトに今後起きる厄介事を全て押し付けてくれる様に、自分を転生させた神様か仙人にそう願っていると、紅先生の自己紹介は終わった様で今度は俺達が自己紹介する番が回ってきた。

「ではそつちのから順番にお願いね」

「はい。私の名前は春野サクラです。好きな物は……きやああく!! 将来の夢は……うふふふ。嫌いな物は……当然うずまきナルトです!!」

名前と嫌いな物しか伝わらない自己紹介をするサクラに呆れた様子の紅であったが、この歳頃はそんな物かと思つたのか続いて俺に自己紹介する様に促した。

「うちはなすけ。好きな物や嫌いな物は特に無し。将来の夢はうちは一族を復興させる事」

「……本当にそれだけ? もつとこう……いえ、何でもないわ。次の子お願い」

紅は俺がイタチへの復讐を口にしなかつた事が気になった様だが、この場でそれを聞くのは賢明ではないと判断したのかそれ以上は何も言つてこなかつた。

「ひ、日向ヒナタです。す、好きな物は甘い物と修行で、嫌いな物は……と、特にありません。そ、それから将来の夢は……」

そう言つて俺の方をチラツツと見て、まだそれを宣言するのは恥ずかしいのかそのまま黙り込んでしまった。

「じゃあ全員自己紹介も済んだ事だし、これから最初の演習について説明するわよ」

そう言つて紅は懐から二つの鈴を取り出すと、原作でカカシ先生が説明していたのと同じ内容の演習内容を俺達に向かつて説明し始めた。

するとサクラもヒナタもアカデミーに戻されると聞いた事で強張つた表情をするが、俺は一つ疑問に思つた事を紅に尋ねる事にした。

「紅先生、一つ聞いても良いですか？ 鈴を取れなかつた人はアカデミーに戻るつて話ですけど」

「そうよ。一応言つておくけど、鈴が二つあると言つても誰も奪う事が出来なければアカデミー全員アカデミーに戻る事になるわよ」

「いや、俺が気になったのはそこじゃなくて。先生さつき卒業生27名中下忍と認めら

れるのは9人の脱落率66パーセントの難関だつて言つてたけど、その割に俺はアカデミーで下忍に成れずに戻りした奴を全然見かけた事無いんですけど」

俺のその質問にヒナタもサクラもそう言えばそうだと思ひ始めたのか、紅にどういふことなのか説明して欲しいと訴え始める。

「そ、それは……あ、アカデミーには戻り専用のクラスが用意されてて、普通の生徒とは関われないうちに徹底しているからよ。それにアカデミーに戻らずそのまま忍者を諦める生徒も少なくないみたいだし……と、兎に角明日は指定された演習場に遅れず集合する事!!」

そう言つて紅は去つてしまい、残された俺達も今日はこのまま解散しようと思つたが、折角なので二人にこれから明日の演習に備えて修業でもしないか誘う事にした。

「え!? さ、サスケ君と一緒にデート!? ……じゃなかった修業!? するする!! 絶対やる!!」

「わ、私も……合格できなくてアカデミーに戻るの嫌だから……そ、それに教室の続きを……」

「決まりだな。修業場所は俺が良く使つてる神社で構わないよな?」

同じ班になつて良かったと喜んでるサクラに教室での続きを期待しているヒナタ。

勿論修業もちゃんとするつもりだが、それ以外の事も当然するつもり俺は二人を連

れて南賀ノ神社へと足を進めるのだった。

「なあキバ、俺達の担当の先生っていつ来るんだってばよ？」

「俺が知る訳ねえだろ。それよりナルト、お前なんか臭いぞ？まさか屁でもしやがったのか？」

キバとしてはいつもの軽口のもりだったが、それを聞いたナルトは尻に手を当てる
と顔を引きつらせて後退りする。

「い、いやあく、実はそうなんだってばよ。悪い悪い……ちゃんとシャワー浴びたのにまだ臭うのかってばよ？」

教室の隅で自らの手の臭いを嗅ぐナルトを訝しむキバと赤丸だったが、何かを察した
シノに制されてそれ以上詮索せず、未だやって来ないカカシを待ち続ける第七班のメン
バーであった。

打倒紅

里の空が暗くなり各家から漏れる灯りが目立ち始めたそんな中、春野家では未だ帰つて来ない娘を心配して母親である春野メブキが苛立ちを募らせていた。

「遅いわねえ……こんな時間まで一体何をしてるのかしら？」

「まあまあ、あの子ももう一人前の下忍として認められたんだから何時までも子供扱いしなくていいんじゃないか？」

そんな妻を落ち着かせようとする父親の春野キザシであったが、その表情からは内心は不安で一杯である事は誰の目に見ても明らかであった。

「はあ……まあ、あの憧れのうちは一族の子と同じ班らしいから、それで帰りが遅くなつてるのかもしれないわね」

夕食の買い物をついでにした同期の奥様達との立ち話で得た情報をぼつりと呟くメブキであったが、それは初耳だったのかキザシは飲んでいたお茶を嘔き出して咳込みみだした。

「ゴホッ!!ゴホッ!!いい、いかにぞ!!サクラはまだ子供じゃないか!!お、男と一緒にいて帰りが遅くなるなんて言語道断だぞ!!」

「あら？さつきあの子を子供扱いするなって言ったのは誰だったかしら？それに……何を想像してるかは聞きませんが、あの子の歳を考えて想像してるんでしょうね？」

これだから父親はと溜息交じりに呆れるメブキであったが、今回に限ってはキザシのその想像が正しい事になっているとはこの時はまだ知る由も無かった。

「あっ!!あんっ!!ああああっ!!さ、サスケくううんっ!!」

既に馴染みとなった南賀ノ神社の本堂の中で、俺は四つん這いになったヒナタの背後から覆い被さる様に抱きつき、俺が育てたと言っても過言ではないその胸を荒々しく揉みしだきながらお互いの体を激しく揺らしていた。

「はうっ!!くうんっ!!さ、サスケ君っお、お願いだからそ、そろそろ私にいい!!」

「まだまだ。ここで終わったら折角見学してるサクラに申し訳ないだろ」

視線を隣に向けると、そこには写輪眼による金縛りによる金縛りの取れなくなつたサクラが俺の影分身に羽交い締めにはされる様に抱き着かれてその体を弄ばれていた。

数時間前、明日の紅との演習に備えた修業を終えた後に、俺はサクラにいのやヒナタとの関係を打ち明けてサクラとも同様の関係を持ちたいと迫った。

だが、返ってきた答えは意外な事にNOであった為、仕方なくサクラを逃げられない様に拘束して考えを改めるまで俺とヒナタの行為を見せつけていたのだが、それでも頑なに意思を変えようとしないので、仕方なく影分身を作り出してサクラの相手をさせる事にしたのだった。

しかし、やはり相手が俺の影分身とはいえ、ヒナタやいのと比べるとやや小さめの胸を撫で回され、髪の色と同じく綺麗なピンク色をした先端部分を摘ままれながら喘がされるサクラ姿を見ると、僅かにだが嫉妬を思えてしまう。

「はあっ、やうっ!! さ、サスケ君も、もうやめえ……ど、どうしてこんな事お」

「どうしてと言われても、さっき言った様にサクラが一夫多妻を承諾してくれないからだよ」

「だ、だって……あふっ!! い、一夫多妻なんて……み、認めてくれる訳が……ひゃんっ!!」

まあ、普通はそんな事を言われても直ぐに納得する事は出来たりしないだろう。

しかし、うちは一族を復興させる為にはどうしても一夫多妻……個人的にはナルトのあの術を思い出すのであまり使いたくない表現だがハーレムを築く必要があるのだ。

「まあでも、どうしても嫌だって言うなら……サクラとの関係はここまでだな」

そう言って影分身を消して更に金縛りの術を解くと、自由になったサクラは俺の言った事がどういう意味なのか不安な顔をして訊ねてくる

「こ、こまでつて……さ、サスケ君。どういう事なの？」

「そのままの意味だ。もうサクラには頼まないし期待しない。誰か他に協力してくれる人を探すからもう帰っても良いぞ」

これで本当に帰ってしまったら困るのは俺なのだが、押して駄目なら引いてみると言うのは正しかったようでサクラは目に涙を浮かべて縋り付いてきた。

「や、やだっ!!お、お願いサスケ君!!わ、私の事捨てないでえっ!!」

「だったら……どうすればいいか分かるよな?ヒナタ、済まないけど一旦離れるぞ」

そう言いながら俺は密着していたヒナタから離れて仰向けに横たわると、サクラは何をすればいいか察した様でゆっくりと俺の上に跨り、そのピンクの長い髪を揺らしながら喘ぎ声を上げ始めた。

「んんっ……あっ!!ああああっ!!サスケ君っ!!サスケ君が私に!!」

拙いながらも必死に体を動かすサクラに手を伸ばし、影分身を使つて得た経験を活かしながら時に激しく、時に優しく緩急を付けながらサクラの体に大人の刺激を与える。

「さ、サスケ君……サクラちゃんばかりじゃなくて……わ、私も……」

「あんっ!! やんっ!! だ、駄目え!! も、もう少しだけ私にいい!!」

その後、途中で何度か交代したり二人同時にするなどして時間が過ぎていき、俺達それぞれの家に帰りついたのは日付が変わったのとほぼ同時刻であった。

翌日……正確には今日の朝になる訳だが、俺はトラップの仕込みをする為に指定された演習場に少し早めに来ていたのだが、そこにはなんと既に紅の姿があった。

「あら、早いわねサスケ。他の子はまだ来てないからそこで待ってて頂戴」

「紅先生? こんな時間にどうしたんですか? 集合時間までまだ一時間以上あったんじゃない?」

「そうね……その答えは貴方ならもう分かっている筈じゃないかしら?」

「どうやら紅は昨日のうちに場所と時間を教えた事で、俺達が事前にトラップを仕掛けるであろう事を予測していたらしい。俺は予定していた作戦の一つが潰されてしまい

少し動揺してしまつたが、それを紅に悟られるのも癪なので平静を装いつつヒナタとサクラが来るまでの時間潰しを兼ねて紅と雑談をする事にした。

「そう言えば、紅先生は木の葉一の幻術使いだつて噂を聞きましたけど本当なんですか？」

「ええ。自惚れかもしれないけど、今の木の葉に私以上の幻術使いはいないと思つてゐるわ」

「じゃ、時間潰しも兼ねて俺の写輪眼の幻術解いてみますか？」

冗談のつもりで写輪眼を発動させて紅の方を向いたとたん、一瞬のうちに組み伏せられて苦無を首元に押し付けられてしまい思わず咳込んでしまう。

「ゴホツ!!ゴホツ!!いい、いきなり何をっ!!」

「それはこつちの台詞よ。いい?今回はこれで済ませてあげるけど、次に同じ様な事したら今度は冗談じゃ済まない事になるわ。良く覚えておきなさい」

どうやら俺は紅の事を少し嘗めていたのかもしれない。原作ではイタチに幻術を返されて圧倒されていたという印象しかなかったが、紅もれつきとした上忍であり、今の俺の実力では一対一ではとても勝負にならない相手だという事を改めて認識させられた。

「さ、もうそろそろあの二人も来る頃でしょ。演習ではもう少しましな動きをしないとアカデミーに逆戻りする事になるわよ」

「……分かりました。ところで、演習でも写輪眼を紅先生に使ったら駄目なんですか？」
「それくらい私に聞かなくても自分で判断出来るでしょう？演習の時は例外よ。言い過ぎかもしれないけど殺す気がかかって来ないと、私から鈴を取る事なんて出来っこないわよ」

殺す気なんてとんでもない。今回組み伏せられてハッキリと背中に感じた紅の胸のふくらみ。

ヒナタ達とは違い成長しきったそれは、大人の色気の塊と言っても過言ではない非常に魅力的なオーラを放っており、俺は紅の後ろ姿を眺めながら新たな目標決心する。

(何としても……絶対アスマから紅を寝取ってあの体を蹂躪してみせる!!)

NARUTOのコラで有名な『俺の子だ』を必ず言ってみせると心に決め、俺は次の作戦に備えて用意してきた忍具や兵糧丸の数を確認するのだった。

「ね、寝過ごしたあ!!お母さん!!どうして起こしてくれなかったのよっ!!」

「散々起こそうとしたわよ。それでも起きなかつたのはサクラの責任でしょ。修業するのは構わないけど、その所為で演習に遅れたら本末転倒じやない?」

「まあまあ母さん。サクラ、修業の成果を發揮して必ず試験に合格するんだぞ」

昨夜は色々心配したが遅刻すると大慌てする娘の姿を見て、やはりまだまだ子供だと安心するキザシとメブキであった。

紅の誤算

鬱蒼と木々が生い茂る演習場の森の中で、紅は乱れた呼吸を整えつつ周囲の気配を探っていた。

「はあはあ……驚いたわ。まさかアカデミーを卒業したてのあの子達がここまでやれるとは思ってもみなかったわ」

下忍選抜の為のサバイバル演習も気付けばもうタイムリミットの時間まで残り僅かとなっており、紅は鈴を取られてはいないものの、何処に隠れていても直ぐに自分を見つけて出して奇襲を仕掛けてくるサスケ達により徐々に体力を消耗していった。

「恐らく日向ヒナタの白眼で私の事を見つけ出してのね。それから……」

その瞬間紅に向かつて四方から手裏剣が投げつけられるが、疲労しているとはいえず、恐である紅に躲せない攻撃では無く、逆に手裏剣を投げてきた相手に向かつてカウンターとして自身の持つ苦無を投げつけた。

しかし、その苦無は相手に当たる事は無かった様で、茂みから現れた無傷の相手に紅は自らの立場を忘れ険しい顔つきをして睨み付けた。

「まさか、貴方が影分身の術を使えるとは予想外だったわ。でも……その術のリスクを

知ってるの？そんなに乱用してチャクラが尽きても私は責任とらないわよ」

「その心配なら大丈夫ですよ。ちゃんと準備はしてきましたから」

紅を中心にして前後左右から姿を現したのはうちはサスケであり、四方から自分に向けられる写輪眼の赤い視線に、紅の内には僅かではあるが恐怖に似た感情が湧き起こっていた。

だが、それよりも上忍としてのプライドの方が圧倒的に勝っている紅は、臆することなく上忍としての威厳を見せつけようと素早く印を結んで術を発動させる。

「さ、そんな事よりもう時間も無いですから……そろそろその鈴渡して貰いますよ」
「そう簡単に渡せる訳ないでしょ。それに……もう終わってるわよ」

すると4人のサスケは何かにつけられた様に動きを止めてしまい、紅は苦無を構えて一人のサスケに近寄っていく。

「こ、これはまた幻術か!? 今度はなんて術だ!?!」

「これは魔幻・樹縛殺よ。どうせこの中に本体は居ないでしょ？なら遠慮する必要ないわね」

大樹が絡み付いて縛られる幻像を見せられて動けなくなつた影分身のサスケを、一人ずつ確実に消していき、最後の一人を消そうとした紅に背後から再び手裏剣が投げつけられた。

「くっ、やっぱりのタイミングを狙って来たわね。今度は本体は居るんでしようね!」
「いいや、今回も影分身だけです。さ、紅先生またお相手をお願いしますよ」
演習を始めてもう何度目になるか忘れてしまったやり取りを交わし、紅は再び影分身のサスケ達との戦いを繰り広げるのであった。

「ヒナタ、紅先生はどう? 流石にもうそろそろ限界でしょ?」

「ど、どうかな? あ、またサスケ君の影分身がやられちゃった」

紅と影分身が戦っている場所から100m程離れた草むらで、俺はヒナタとサクラと共に気配を察知されない様に注意しながら潜伏していた。

「嘘っ? もう2時間近くこの影分身消耗作戦してるのに? 兵糧丸も残り少ないし、このままじゃ紅先生より先にサスケ君が……」

「くっ……まさか影分身の経験値還元の特メリットがこんなにきつかったとはな」

心配そうな視線を向けて来るサクラに心配いらなと言いたい所だが、正直言つてそんな事を言う余裕が無いほど本体である俺には影分身からの戦闘経験値と精神的疲労

が蓄積されていた。

しかし、それでも俺は倒れる訳にはいかない。紅の体を蹂躪するまでは倒れてなるものかと氣力を振り絞り、影分身の俺達が写輪眼で見切った紅の攻撃パターンや体捌きを頭の中で反芻する。

「ヒナタ、サクラ……そろそろ勝負を仕掛けるぞ。作戦は頭に入ってるな?」

俺のその言葉に不安そうな顔を浮かべるサクラとヒナタだったが、その不安を和らげる為に二人を抱き寄せて一人ずつ唇を奪っていく。

「んう……さ、サスケ君。絶対一緒に下忍になろうね」

「あむっ……ね、ねえサスケ君。もし試験に合格したら今夜も……良いかな?」

「ああ。じゃ……行くか。」

「はあはあはあ……お、襲ってこないわね。まさかチャクラが尽きてしまった……訳じゃないみたいね。ようやく全員で挑んで来る気になったって事かしら?」

肩で息をしている紅の前に俺とサクラとヒナタは並び立つと、ヒナタは柔拳の構えをし、サクラは苦無を手に構え、俺は風魔手裏剣を手に持つと一斉に紅に向かって飛び掛かった。

「私を消耗させてから全員で鈴を奪う作戦みたいだけど、そんな簡単に奪われるほど私は甘くないわよ!!」

ヒナタの手を躲し、サクラの苦無を弾き飛ばして俺に詰め寄って来る紅に向かって風魔手裏剣を投げつけると紅はそれを屈んで躲そうとする。

だが、その影にはもう一枚の風魔手裏剣が潜んでおり、紅は躲しきれないと判断しせめて急所は守ろうと腕を十字に組んだ。

「今だ!!やれ!!」

「封印術・一糸灯陣!!」

俺の叫びに反応して風魔手裏剣に変化していた影分身が封印術が発動し、紅は驚愕した表情をしたままその場から動けなくなった。

「くっ!!まさか影分身を変化させてたなんて。それよりも……今の連携はもしかして昨日から練習してたの?」

「はい。さ、もう時間切れ間際ですからその鈴を渡して……」

紅の腰にぶら下がった鈴に手を伸ばそうとした所、体に木の枝が絡みつき身動きが取れなくなってしまう。何とか視線をスクラとヒナタに向けると、状況は俺と同じ様で二人とも太い樹に縛られている姿が目に入った。

「残念ね。影分身を使えるのは貴方だけじゃないのよ」

背後から聞こえてきた声の主は苦無を首元に押し付けられると、目の前で動きを封じられていた紅が煙と共に姿を消してしまった。

「く、紅先生……何時から影分身を？それに俺の計算だともうチャクラが……」

「私が兵糧丸を使って回復しないなんて随分と都合の良い計算ね。それに、何時影分身を使ったか教えるなんて、手品を相手にばらす様なものでしょ？」

「どうやら紅は俺達の消耗作戦を理解した上でそれをに嵌められた風を装っていたらしい。」

悔しそうな表情をする俺に気を良くしたのか首に押し付けていた苦無を離すと今だ幻術にかかっている俺達に向かって語りかけようとする。

「3人とも良く聞きなさい。最後の詰めが甘かったものの、作戦を考えてそれを実行するチームワークは中々のものだったわ。鈴は取れていないけど、この下忍選抜試験の真

の目的から言えば十分に合格を……」

「封印術・二重一糸灯陣!!」

紅の説明を遮る様に発動された封印術は見事に成功し、何が起きたか紅が理解する間もなく腰元にぶら下がった二つの鈴はサクラとヒナタの手に収まり、それと同時に演習終了を告げる時計のベルが演習場に鳴り響くのだった。

「ど、どういうことなの!?! 一体何時から私が影分身とすり替わってたって気付いてたの!?! それにさっきまで一緒に戦ってた筈のサクラとヒナタがどうして!?!」

「手品のタネをばらす事を忍者はしないんじゃないんじやなかったですか? ま、それで納得してくれるとは思ってないのであえて説明しますけどね」

俺達の立てた作戦とはまず影分身をヒナタとサクラに変化させて、恰も消耗させた紅を狙って俺達三人で戦っている様に見せかけ、俺が捕まって紅が勝利を確信して油断した所を見計らい本物のヒナタ達が紅の動きを止め鈴を奪うという物であった。

とは言え、俺が立てた当初の作戦は影手裏剣の所までであり、紅がチャクラを回復していたり影分身を使う事を想定していなかったのだが、作戦を伝えたサクラがその可能性を指摘してくれたお陰で、こうして見事に紅を捕らえる事に成功したのだと伝えた。

「……悔しいけど完敗ね。で、次の質問だけど……どうして私をこんな風に拘束してるのかしら？」

そう言つて鋭い目付きで俺を睨みつける紅であつたが、両手を動かさない様に頭上で縛られて膝立ちをしている今の状況では気圧されるどころか、寧ろその艶めかしい大人の色気を強調するだけであつた。

「その答えは簡単ですよ。紅先生……今度はちゃんと俺の写輪眼と勝負してくれよな」
ヒナタとサクラの封印術に加えて写輪眼による幻術を喰らつた紅は目を虚ろにさせて項垂れる。

「それじゃ、木の葉一の幻術使い対写輪眼対決を始めさせて貰いますよ」
俺は紅が自力で幻術を解くのを待つ間、その豊満な乳房をひたすら揉みしだき続けるのだった。

「あれ？もしかして私達このまま封印術続けてないと駄目なの？」

「だ、大丈夫だよサクラちゃん。私達の分の兵糧丸サスケ君用意してくれてるから」

そういう問題じゃないとツツコミたいサクラであつたが、目の前で自分の物とは比べるのもおこがましい紅の乳房がサスケに揉みくちやにされているのを見て、ここを頑張れば今夜は自分もと気合を入れ直して封印術を続けるのであつた。

「でも……本当に大きいわね。私ももう少し成長したらアレくらいに……」

（サクラちゃん……多分だけど、大人になってもあまり胸大きくなるか……）

写輪眼対紅

(こ、こ)は……何処? 私は一体……)

周囲には物一つない暗く狭い空間の中で紅はどうして自分がこんな所に居るのか分からずにいた。

(確か……私は、演習場の森の中で……担当するあの子達を……)

何故かハッキリとしない頭を押さえながら紅は自分が今まで何をしていたか思い出そうとする。

しかし、背後から突如現れた二本の腕により紅は思索を中断する事を余儀なくされた。

『へっへっへ、よう姉ちゃん。こんな所で何してるんだよ』

(う、嘘!? この私がかんな簡単に背後を!? え? か、体が……体が動かない!?)

突然現れた男に抵抗しようと腕に力を入れても指一本動かせず、紅は男のなすがままにその豊満な乳房を揉みしだかれてしまう。

『エロい身体しやがって……まるで男に弄ばれる為に生まれてきた様な女だな』

紅が抵抗出来ない事をいい事に男は紅の上着を剥ぎ取り、鎖帷子を切り裂いて乳房を

露わにする。

(そ、そうか!!これは幻術!!だったら……)

紅は目を閉じ、幻術を解く為に自らのチャクラの流れを止めようとする。しかし、男はそうはさせぬとばかりに再び紅の乳房に手を伸ばして綺麗な桜色をした先端を摘んだ。

(あうっ!!う、嘘……今、確かに乳首を摘まれた感覚が……)

もしこれが本当に幻術であるならばここまでリアルな感覚を感じる訳がない。

幻術のエキスパートであるが故に生じてしまった疑問であったが、それは致命的といっても良い隙を生み出してしまった瞬間でもあった。

『幻術だと思ったか?残念ながらここは現実だぞ。良く思い出してみろよ。忘れたのか?お前は俺達に捕まって尋問されてる真っ最中なんだよ』

すると紅の目の前にもう一人。顔は面を被っているので分からないがそれ以外は何一つ身につけていないので、否が応でも男と認識出来てしまう相手が現れ、背後で胸を揉んでくる相手と同様に紅の体を蹂躪する。

(い、嫌っ!!くうっ!!こ、これは……この感覚は確かに……はあんっ!!)

紅は目の前の面の男から与えられた感覚が恋人……と言うにはまだ心許無い相手である猿飛アスマと一度だけ、酒に酔った勢いで行なった行為と同様の感覚であった事に

戦慄を覚えた。

唯一違う所と言えば下半身に伝わってくるその大きさの違いであるが、それを補って尚アスマとは比べ物にならない快楽を与えられた紅は、自分が木の葉隠れの上忍である事を忘れて一人の只の女に戻ってしまいそうになった。

(う、嘘よっ!!わ、私がこんなっ……んう!!これは幻術?それとも現実なの?)

二人目の男が急に現れた状況からいつて幻術に掛かつてる事は間違いない。だが紅は二人の……いや、何時の間にか更に増えている男達から与えられる快楽に抗う事が出来ず、いつしか幻術を解こうとする事よりもその快楽に流されてしまわない様に耐え忍ぶ事を選んでしまうのだった。

「うあつあつあんっ!!や、やめっ!!んぐっ!!んう……ふぐっ……むうっ!!」

「ほらほら紅先生。どうしたんですか?早く幻術を解かないと何時までもこのままです

よ」

演習場の森の中で、俺は最後の気力を振り絞って発動させた影分身の術を使い、紅が見ている幻と同じシチュエーション通りの事を現実でも行っていた。

紅が幻術の中で感じていた感覚は現実でも実際に与えられている物であり、俺は現実で起きている事が幻術とリンクされれば紅といえど混乱して幻術を認識出来ないのではないかと考えた。

その結果は見事に成功であり、サクラ達の封印術のアシストが有るおかげとは言え現に紅は俺の掛けた幻術を解くことは出来ず、幻と現実の両方でその大人の色気に満ちた体を蹂躪されていた。

「ね、ねえサスケ君……流石にそろそろ限界かも……」

「わ、私も……もう術を……維持出来ない……」

その声に視線を向けると、やはり初歩的な基本封印術とはいえアカデミー卒業したての下忍には長時間維持し続けるのは困難らしく、サクラとヒナタは息を絶え絶えにしなから限界を伝えてきた。

「そうか、済まなかつたな。このお詫びは今夜たつぷりしてやるからもう一踏ん張り頑張れるか？」

その言葉に奮起したのか、もう限界と言った割りに更に封印術の力を強め、俺は影分身と共に紅の服装を元通りに整えると、最後の仕上げとばかりに虚ろになった紅の目

を見据えて写輪眼で幻術の上書きを行った。

『おらおら!!もつとしつかり動きやがれ!!』

『休んでる暇なんかねえぞ!!今度は俺の番だ、口をさっさと開けろ!!』

未だサスケの幻術に囚われ続ける紅は、自らの前後と啞内を蹂躪する男達の存在感に既に意思とは関係なく身体が勝手に快楽を求め、それに引きずられる様に徐々に精神も征服されつつあった。

しかし、それでもあと一步踏み止まっていられるのは上忍としての矜持と猿飛アスマへの思いであった。

(悔しいけど……この幻術に私は諍えない……でも、せめて心だけは……)

『なんだ紅もう諦めたのか?やっぱりお前に上忍なんて務まる訳無かったって事だな』

その声に驚嘆する紅の目に映ったのは今まで被っていた面を外し、その代わりに煙草をくわえて自らの身体を蹂躪する猿飛アスマの顔であった。

(あ、アスマ!?!ど、どうしてっ、ぐう!!こ、これは……さつきとは違って全然……)

面の男が素顔を見せた途端、今まで紅に与えられていた快樂とは一転して苦痛が全身を襲い、何より激しい嫌悪感が紅の頭に掛け回った。

『ん?どうした紅。さつきまであんなに喘いでたのに俺の顔見た途端にこれか?』

するとアスマは激しく体を揺さぶり始めるが与えられるのは苦痛のみであり、紅は先程までの快樂を与えてくれない目の前の男に次第に苛立ちと不快感を増していった。

(な、なんて強引なの!!独り善がりに動くだけで私の事を全然っ!!)

『紅、お前の価値は俺を満足させる事だけなんだよ。分かったらさつきと……』

その瞬間アスマの首が斬り落とされ、あつけにとられる紅を一人の男が優しく抱きあげた。

(だ、誰?見た目から言って私より年下の筈なのに凄く安心出来る……)

顔は暗くて良く見えないが紅を抱くその手から伝わる温もりと、何よりその瞳に心を奪われた紅は自らその男に跨りアスマから与えられた不快感を取り払って貰おうと激しくその裸体を上下させるのだった。

「……はっ!!こ、ここは……私は一体何を……」

「目が覚めましたか紅先生? 幻術勝負は俺の勝ちって事で良いですか?」

ようやく幻術から解放された紅にそう宣言すると、暫く呆けていた様子であったが先程までの光景を思い出したのか、俺が目の前に居るのも忘れて自らの服の乱れを確認し始めた。

(やっぱり……と言う事は、私は幻術の中でも現実でもこの身体を……)

「どうしましたか紅先生? サクラとヒナタだったら疲れたのかあそこで寝て……」

すると俺が言い終わるのも待たず、紅は鬼気迫る顔をして俺を押し倒して馬乗りになると、その手に持った苦無を俺に向けて怒気を含んだ声で俺に詰め寄ってきた。

「な、何するんですか紅先生。みつともないですよ。いくら自慢の幻術で負けたからってこんな八つ当たりじみた事しちゃ」

「黙りなさい!! あ、貴方よくも私にあんな事っ!!」

怒りに満ちた紅の顔を見て俺は最後の刷り込みが失敗したのかと内心死ぬほど焦ったが、それを表情に出してしまえば確実にこの場で殺されてしまうと思えば何かなんだか

分からない風を装う事にした。

「あ、あんな事？ 一体どんな事なんですか？」

「惚けても無駄よ!! 服は元通りにした様だけど、この身体に残った感覚は間違いないわ!! アナタ、私を幻術に掛けてそれで……」

そこまで言った所で紅は押し黙ってしまい、訝しんだ俺は何とか逃げ出そうと体を動かすとそれに反応して紅も体をビクつかせて微かに喘ぎ声を上げる。

(これは……そうか。身体が覚えてるなら確かにこの状況は紅にとつて……)

どうせこのままでは紅に殺されてしまう。それなら一か八かの可能性に賭けようと思ひ、馬乗りになつてゐる事で丁度紅の下半身が触れている俺の部分を再び固くさせ、その感触に驚いた表情をした紅の乳房を下から鷲掴みにする。

「あああつ!! あ、貴方この状況で何をっ!! ひやうっ!!」

「何って言われましても紅先生から言いましたよね? 私にあんな事してつて。正直言つてもう限界だったんですけど先生が答えを知りたいようですし、今度は意識がはつきりした現実で何をしてたか教えてあげますよ」

そう言いながら俺は先程は幻術に影響が有るかもしれないと思ひ封印していた柔拳の技術を使い、チャクラを五指に集めた状態で紅の胸を攻め立てた。

「や、やめなさつ!! ひあつ!? な、何よこれっ!? 凄く、気持ちいい」

思わず発してしまったその言葉を聞き逃さず、俺は紅が幻術世界の俺にしてきた事をする様になるまで紅の調教を続けるのだった。

「うくん……サスケくん、そんな所触つちや駄目え〜」

「サスケ君……私、影分身と一緒にサスケ君一人の方が……」

紅が上忍の意地でサスケより先に参らない様に激しく体を揺らしていた頃、すっかり暗くなった森の中でサクラとヒナタはそれぞれの夢の中でサスケを相手にして身悶えていた。

「あ、あの子達もまだまだね。あんつ、忍者が熟睡して隙だけけ……はう!!」

「く、紅先生も人の事言えない様にしてあげますよ。」

（い、何時になったら終わるんだ？流石上忍、凄い体力だ）

サスケと紅の勝負の結果は限界を超えに超えたサスケの失神で幕を閉じ、紅は辛くも幻術勝負の負けを取り戻したのであった。

第八班と第十班

アカデミーの卒業生達がそれぞれの担当上忍に課せられた下忍選抜演習から数日が経過し、サスケ達合格を言い渡された新人下忍達は日々任務に明け暮れていた。

そんなある日。同じく合格班の一つである猿飛アスマ率いる第十班は、木の葉の里に店を構える焼き肉屋で任務終了後の恒例となった焼肉打ち上げを行っていた。

「はあああああ………」

「おい、折角打ち上げの最中だったのでのいのもアスマ先生も揃って溜息ばかり吐きやがって、何か悩み事でもあるのかよ」

一心不乱に食事をするチョウジとは対照的に、物思いに耽り溜息ばかりして一向に箸を手につけないアスマといのに対してシカマルはいい加減鬱陶しくなり、何を悩んでるのか尋ねる事にした。

「そりゃあ溜息だつて出るわよ。ねえシカマル、今日まで私達が何の任務やったか覚えてる？」

「突然なんだよ。今日が迷子のペット犬探しで昨日が公園のゴミ拾いと遊具のペンキ塗り。一昨日が隣町までお使いで………」

「でしょ? どうして忍者がお使いやゴミ拾いやペット探しをしなきゃいけないのよ。私があかデミーで教わった忍術は老中のガキンチョを喜ばせる為のものじゃないっての。はあくこれがせめてサスケ君と一緒に将来の為の予行演習になるのに」

するといのはあかデミー卒業以降顔を会わせる機会が激減したサスケの事を思い、妄想の世界に入り込んでしまったのか頬に手を当てて身悶え始めた。

その光景に若干引いてしまうシカマルであったが、二人のやり取りを聞いていたチョウジが自分もいのと同意見だと言って会話に入り込んでくる。

「僕もそう思うなあ。正直言ってもうちよつと忍者っぽい任務やつてみたいよね」

「そうか? ランクが上がればそれだけ危険度が上がって面倒な事になるわけだろ。新米でペーパーの俺らは今くらいの任務がベターだと思うぞ」

任務のレベルに不満を持つ二人とは違い、口癖になる程に面倒臭い事が嫌なシカマルは楽を出来る現状に満足している様であり、そんなシカマルに妄想から覚めたいのは、チョウジに喰い尽されて焦げしか残っていない網を箸で突きながら再び深く溜息を吐いた。

「シカマルってホントにやる気と向上心がないわね。そんなんじゃ一生女の子にモテないわよ」

「けつ女なんかにもモテても面倒臭いだけだろうが。で? アスマ先生は一体何を悩んでる

んだよ」

「ん？ああスマン……。なあお前ら、これは俺じゃなくて俺の友人の話なんだが……。今までそれなりに仲が良くて将来を約束してもおかしくない間柄の異性が急に素っ気無い態度になったら……。ど、どう思う？」

誰が聞いてもアスマ本人の恋愛相談だと分かる口ぶりに、シカマルは心配して損したとばかりにそっぽを向いてしまい、チョウジは色気より食い気とばかりに更に肉を追加してアスマの話を真面目に取り合おうとはしなかった。

しかし、十班唯一の女であり色恋事に人一倍興味の有るいのは悩みに答える振りをしてアスマの恋愛事情の詳細を根掘り葉掘り聞き出していた。

「ふくん、成程ねえ。アスマ先生、多分その女性には先生……。じゃなかった。お友達の人以外に新しい男が出来たんじゃないかしら？」

「な、何っ!?そ、そんな事絶対にありえん!!く、紅に限ってそんな事は絶対に……」

他に男が出来たと聞いたアスマは思わず今まで濁っていた女性の名前を口にしてしまい、友人の話と言う設定を忘れる程に狼狽えていのの発言を否定する。

「おいしいの、お前いい加減な事言つてアスマ先生を揶揄うんじゃねえよ。ちゃんとした根拠もないのにそんな事言つたら紅先生にも迷惑だろうが」

「根拠ならあるわよ。ズバリ私の女の勤って根拠がね」

自信満々にそう答えるのに呆れるシカマルは、これ以上面倒な事にならない様にアスマに対してフオローをし始めた。

「つたく、それじゃあ根拠が無いのと同然じゃねえか。なあアスマ先生、親父が言つてたけど確か紅先生つてまだ上忍になつて日が浅いんだろ？大方初めての担当上忍としての仕事忙しいとかそんなんじやねえのか？」

「そ、そうか？そうだよな。ふう、俺とした事がこんな事で取り乱しちまうとは……だが、もしも本当にそうだったとしたら相手は誰だ？ガイ……は100%ありえないとしてやはり力カシシ辺りが有力候補になるか？」

シカマルによる冷静で常識的な意見により、とりあえずは冷静さを取り戻したアスマであったが、一度生まれた疑惑を完全に払拭する事は出来ない様で、店員に所持金を遙かに超えた額を記載された伝票を渡されるまでの間、紅の浮気相手が誰なのか悩み続けるのだった。

「ああつ!!だ、駄目よサスケえ!!も、もう私限界だからあ!!」

「じゃ、今夜も俺の勝ちつて事ですな紅先生。これでまた俺の勝ち星が増えましたね」

四つん這いになった紅の腰を掴んで激しく体を前後させ、俺は恒例となった紅宅での任務終了後の反省会を兼ねた打ち上げを行なっていた。

数日前の演習場では影分身の使い過ぎによる疲労で敗北を喫してしまった紅との勝負であったが、怪我の功名というべきかその分俺にはかなりの経験値が蓄積された様で、今では写輪眼や柔拳技術を使うまでも無く紅を喘がせるまで技術が向上していた。

「い、いいっ!!わ、私の負けで良いから早く、あつ、やんっ!!いくううんっ!!」

昼間の上忍としての凛々しい姿は見る影も無く、一人の女として快樂を求める紅にトドメとばかりに強く体を押し込むと、流星に刺激が強過ぎたのか悲鳴にも似た嬌声を上げながら体を痙攣させ、紅は俺から与えられた熱を下半身で感じながら気を失ってしまった。

「ふう、これで全員一通り終わったか。ヒナタ、サクラ俺は風呂に入るけどお前らはどうする?」

すっかり精力剤代わりとなった兵糧丸をかじりながら紅より先にグロッキー状態となっていた二人にそう訊ねるが、サクラもヒナタも意識は取り戻したもののまだ起き上

がるだけの気力は無いらしく、弱弱しく遠慮の返事を返すのが精一杯の様だった。

「さ、先に行つてて……わ、私まだ腰が……」

「わ、私も……サスケ君激し過ぎだよお……」

汗やその他の体液に塗れた体でそう答える二人の姿に俺は再び硬さと熱さを取り戻したモノを押し込みそうになるが、これ以上は流石に明日の任務に支障をきたしかねないと思ひグツと堪え、後ろ髪を引かれつつ浴槽へと足を進めた。

「あく、良い湯だなあ……。そう言えば時期的にそろそろあれが始まる頃じゃないか？」

一人湯船に浸かっている俺の頭にふと過つたのは、NARUTO最初の事件である波の国への護衛任務の事であった。

波の国編はナルトが己の忍道を見つけた大事な任務で有る為、是非ともナルト達第七班には波の国へ行つて欲しいと願わずにはいられなかつた。

「でもなあ、班構成といい既に原作とは状況が違つてる訳だからもしもつて事もあり得るんだよな。もし俺達が波の国に行く事になつたらどうするかなあ」

紅の性格上任務内容を偽っていたと知れば俺達の安全を優先させて木の葉に引き返す筈だし、何より桃地再不斬と戦う事になつた場合紅には悪いが実力的に勝てる保証は限りなく低く、タズナには悪いが任務を中断するしかないだろう。

「それに、確か波の国編は女キャラ殆ど出て無かった筈だから個人的に行く意味も無いからなあ。確かタズナの娘のツナミって未亡人と他には……」

「さ、サスケ君……私も一緒に入っても大丈夫かな?」

その時、ようやく動ける様になったのか浴室のガラス戸の向こう側に立った人物が声をかけてきた為、俺は考察と言う名の独り言を中断して声の主であるサクラを浴室に招き入れる。

「ああいいぞ。ほら、そのままじゃ風邪引くから早くこつちに来いよ」

「う、うん。お、お邪魔します。はあ……良い気持ちい」

いつもの様に俺に背を預ける様にもたれかかってくるサクラを抱きとめると、今まで波の国の事を考えていた所為か原作でナルトが言ったある言葉を思い出してしまった。

（そう言えば白ってナルト的にはサクラより可愛いつて言ってたよな。でもまあ、いくら可愛いつて言っても男の白よりサクラの方が……）

「んあつ!! さ、サスケ君つ、そんないきなりつ、あむつ……んんう……」

やはり我慢するのは体に良くない。先程まで入っていたお陰が前準備無しでもすんなりと侵入出来たサクラの中に熱く硬くなった俺のモノを押し込んでいき、抗議の声とは裏腹に恍惚とした表情をしたサクラの唇を舌で抉じ開けて差し込み絡ませながら激しく湯船を波立たせてサクラの身体を蹂躪するのだった。

サスケが紅の家で第八班のくノ一達と勤しんでいた頃、木の葉の依頼受付所に波の国から来たと言う一人の老人から仕事の依頼が舞い込んで来た。

「では、Cランクの護衛任務とDランクの橋造りの手伝いの二つのご依頼をする訳ですね？」

「う、うむ。超名人の儂の足手纏いにならないくらい超優秀な忍者を頼むぞ」

何処か様子のおかしい老人と受付担当者は感じたが、低ランクとはいえ一度に二つの仕事を依頼してくれるのだから機嫌を損ねない様にと深くは追及せず依頼書に詳細を書き込んでいく。

（ふう……何とか怪しまれずに済んだか。Bランクの依頼をするよりCとD二つの依頼をする方が安く上がるからな。）

波の国から来た依頼人のタズナは結果的に偽りの依頼をする事に良心が痛むものの、これも波の国を救う為だと思い受付所を後にするのだった。

波の国へ

翌日、紅達と共に今日の任務を受ける為に三代目の部屋を訪れると、そこには猿飛アスマ率いる第十班のメンバーと、波の国の橋職人であるタズナの姿がそこにあった。

まさかナルト達第七班ではなく第十班が波の国へ行く事になったのかと思ったが、三代目の説明によるとなんでもタズナは原作通りの護衛任務に加えて、更に橋造りを手伝う人手の依頼もしてきたらしく、その為今回の任務には2組の班が必要となるので俺達第八班に橋作りの手伝い、第十班にはタズナの護衛をする様にと指示してきた。

「ふんっ、こんな超ガキどもが役に立つのか？お前等しっかり儂の超護衛と超手伝いをしろよ」

任務のレベルを偽ってる事を棚に上げて妙に偉そうな態度をとるタズナを尻目に、俺は想定外の事態となり少々混乱気味の頭の中を整理しながら、周囲に悟られない様に今後起きうるであろう事態にこのメンバーで対処出来るか思索し始める。

差し当たり一番の問題点は再不斬と戦鬪になった際に、カカシではなくアスマと紅で相手になるのかという点だが、いくら紅とアスマの二人掛かりとはいえ恐らく再不斬の

方が若干分があるだろうというのが俺の予想であった。

「うふふふ。まさかサスケ君と一緒に任務が出来るなんて夢みたい。ねえサスケ君、もし盗賊とかギャングが襲ってきたら私の事守ってくれる？」

「ちよつといの。そんなにサスケ君にベタベタくっ付かないでよね。大体、依頼人の護衛をするのはアンタ達第十班の仕事でしょ」

これから待ち受ける事件を知る由もないサクラといのに左右から抱き着かれ、俺は例え勝算が低いとはいえサクラにいの、それにヒナタと紅を死なせる訳にはいかないと腹を括り、自分のアドバンテージであるNARUTOの知識とこれまで培った経験をフル活用して波の国の任務に挑む覚悟を決めるのであった。

木の葉の里を出発して数時間歩いた頃、そろそろ最初の襲撃がある筈だと周囲を警戒していると、前方に大きな水溜りが出来ているのを発見した。

いよいよよかと思ひ襲撃に備えていると、俺の後ろを歩いていたシカマルもその水溜り

の異常性に気が付いた様で、顔をこわばらせながらもチャクラを練り始めていた。

「ま、まさか一緒に波の国まで行く事になるとはな。ところで紅、最近その……調子はどうだ？」

「どうだと言われても悪くないとしか言いようがないわ。そんな事より……」

紅に素っ気無くあしらわれて落ち込むアスマだったが流石は上忍といふべきか状況をすぐさま察し、その後原作通り襲つて来た二人の霧隠れの抜け忍は、紅との演習やその後の修業で実力がそれなりに向上した俺とそれをフォローしたシカマルの影真似の術の連携で返り討ちにあい、タズナはアスマと紅にこの二人組について問い詰められる事となった。

「タズナさん、一体どういう事なのか説明して頂けますか？ 確か依頼の内容はギャングや盗賊といった只の武装集団からの護衛だった筈ですよね？」

「しかし、今襲つて来たこの二人は霧隠れの抜け忍。タズナさん、私達はあなたが忍者に狙われているなんて話は聞いていません」

「ぐ、ううう。じ、実はな……」

紅とアスマに厳しく追及されタズナは護衛の依頼に偽りが有る事を白状すると、いの達はCランクの護衛任務だった筈が実はBランク相当の内容だったと知り、動揺を隠せ

ない様で狼狽えだし始めるのだった。

「じゃ、じゃあこのまま波の国に行ったらまたこんな奴らと戦わなきゃいけないの!？」

「そ、そんな!!先生、この任務は僕らにはまだ早いよ!!また次の忍者が襲ってくる前に早く木の葉に戻ろうよ!!」

「い、異議無し!!サスケ君との初任務がこれで終わりなのはちよつと残念だけど、それも命あつての物種よ!!」

このまま任務を続けていればまた忍者との戦闘が有ると知り、サクラ、チョウジ、いのの3人は直ぐにでも任務を辞めて木の葉に戻ろうと言い出した。

原作ではここでナルトが任務を続行を主張する事になるのだが、今この場でそんな事を言い出す様な者は見当たらない為、俺はタズナや波の国の人間には悪いがこれで波の国編も終了かと心の中で安堵していた。

「そうね。アナタ達には今回の任務は荷が重いわ。アスマもそう思うでしょ?」

予想通り紅も引き返す事に賛成しアスマにも同意を求めるが、当のアスマは俺とシカマルに振り返りにされて木に縛られている二人の忍者を一瞥すると、啞えていた煙草を吸いながら思いもよらない事を言い出した。

「んー……いや、俺はこのまま任務を続行しても良いんじゃないかと思うんだが？」

「なっ、何を言ってるの!?! まだこの子達には忍者の敵と戦うなんて早過ぎるわ!!」

「それでもないと思うぞ? 現にこの二人を捕まえたのはサスケとシカマルなんだし、それにこっちは俺とお前の二人の上忍が控えてるんだ。襲つて来た奴等のレベルからしてガトーが雇つてる忍者つてのは大した事なさそうだから、コイツ等に経験を積ませるには丁度良いだろ」

アスマのその判断に紅も反論しようとするが、その前にタズナがいきなり土下座をして泣き落としをし始めた。

「す、スマン!! 依頼を偽つてた事は超素直に謝る!! だ、だが儂がこのまま橋を完成出来ずに殺されてしまつては、残された娘や孫を始めとした波の国の人間が全てガトーに……た、頼む!!」

「ほら、タズナさんがこんなに必死になつてお願いしてるのに放つておく訳にはいかないだろ? 心配すんな、こう見えても俺は元守護忍十二士のメンバーだった男だぞ。何があつても俺がお前らを守るから大丈夫だ」

何故かこの任務を続ける事を主張するアスマと必死に懇願するタズナの二人に押し

切られ、結局俺達は任務を続行する事になってしまい、波の国へと向かう小舟の上で俺はどうしてアスマがこの任務に拘るのか気になり、事情を知っていきそうなシカマルといのに理由を尋ねる事にした。

「なあ、お前の所のアスマ先生だけど、どうしてあんなにこの任務を続けたがつてるんだ？」

「う〜ん……実はね、大きな声じゃ言えないんだけどアスマ先生と紅先生って付き合ってるんだって。でも、最近上手くいって無いみたいだから今回の合同任務を利用して紅先生との関係を修復したいんじゃないかしら？」

「こっちとしては傍迷惑で面倒臭え話だけだな。あくあ、多分次襲撃があるとしたら今度は上忍クラスが襲って来るに違いねえぞ。クソめんどくせえ」

上忍であるアスマがそんな理由で危険度の高くなつた任務を続けるのか疑問に思う所だが、そうこうしているうちに濃霧の中からタズナが建設中の橋がその姿を現した。

この任務にナルトは同行していないので完成後の橋の名前はどのようなのだろうか？ そんなどうでもいい事が頭をよぎつたその時、橋の上に視線を向けると一瞬人影が見えた気がした為、まさか今ここで襲って来るのかと思ひ急いでヒナタに白眼でその人影の正体を探らせる。

「どうだヒナタ、俺も一瞬見ただけだからハッキリと確証がある訳じゃないんだが」
「えつと……いい、居た。サスケ君の言つた通り誰か居る。で、でもこの人女の子みたいだけだ」

「おいおい、女の子だから敵じゃないとはならないだろうが。それでそいつの特徴は？」
ヒナタから得た情報を元に推察すると相手は恐らく白である事に間違いはない。白が単独でいる事を確認した俺は紅の許可を得て影分身を偵察に向かわせる事にした。

白眼の透視能力で得た情報が真実かどうか確認する為に……。

作りかけの橋の上で、白は先程霧の中で目撃した小舟の事について考えていた。

鬼兄弟の襲撃が失敗した事でガトーに雇われた忍者の一人、桃地再不斬は今度は自ら出向いてタズナを含めた木の葉の護衛を仕留めようとしていた。

「恐らく今のが木の葉で雇われた護衛の忍者達。急いで再不斬さんに伝えないと」

白が霧隠れの追い忍だった頃の証である仮面を付け再不斬の元に戻ろうとすると、丁

度その時橋の向こう側から誰かがこちらに歩いて来るのが目に入った。

「あくクソ、全然前が見えないな。ん？そこに誰か居るのか？」

一瞬警戒した白であつたが霧の中から現れたのは一人の少年であり、その立ち振る舞いから危険度は低いと判断した白は目の前の少年に軽く会釈をするとその横をすり抜けて歩き去ろうとする。

「ところで……こんな所で霧隠れの追い忍が何をやってたんだ？」

すれ違おうとした瞬間にそう言われた白は反射的に少年を顔に視線を向けるが、それが白にとって致命的なミスとなつてしまった。

「なっ!?!こ、これは金縛り？そ、それにその眼はっ!?!」

「教えてやろうか？これが写輪眼だ。なあお前、お前もタズナつて橋職人の命を狙つてるガトーに雇われた忍者だろ？」

あまりにも稚拙な失態をしてしまい己に怒りを覚える白であつたが、それより今はこの状況を打開しようと自らに掛けられた金縛りの幻術を解こうとする。

だがそれよりも早く白は少年に覆い被さる様に押し倒されてしまい、その赤い眼に見据えられる。

「成程……ヒナタに聞いた時は信じられなかつたけど、どうやら本当だつたらしいな」

「くっ、僕を殺すつもりなら早くしたら？」

どうやら僕はここまでらしい。心の中で再不斬に詫びる白だったがその少年、サスケのとつた行動は服の上から白の身体を弄る事であった。

「ひっ!? な、何をするんだ!?! ぼ、僕はっ!!」

「女……だろ? 俺も最初信じられなかつたけど、ここに有るべき物が無いみたいだし信じるしかないよな」

足の付け根に手を差し込まれて何かを確認する様に指を激しく、だが時に繊細に優しく緩急自在に動かされ、白は今まで感じた事のない激しい衝撃が己の肉体に襲つて来るのを耐えるので精一杯になっていた。

「や、やめっ。こ、これ以上僕を辱める様な真似をつ、うんっ!!」

服の中に直接手を差し込まれその小ぶりの胸を直接揉みしだかれると、白は再不斬の道具となる為に捨て去った筈のある感情が胸の奥から湧いてくるのであった。

「さてと、それじゃあ仕上げといくとするか?」

「い、嫌だっ。ぼ、僕は再不斬さんにい!!」

濃く深い霧が立ち込める橋の上で、白は捨て去った筈であった女である自分をサスケの影分身に思い出させられるのであった。

サスケと白（性別は女性化）

霧が立ち込める造り掛けの橋の上で、影分身のサスケは写輪眼の幻術で自由を奪った白を組み伏せてその身体を蹂躪し続けていた。

原作では男だった筈の白は何故かその容姿通りの性別となっており、サスケは小ぶりだが確実に女である事の証である白の胸を揉みしだきながら激しく体を動かす。

「うっ、はあっ、くうん!!も、もう止めっ!!」

「大分女らしい声を出す様になつてきたな。でも、まだ俺の頭の中にあるお前のイメージを完全に払拭出来た訳じゃないからもう少し付き合つて貰うぜ」

当然白もこの現状を打開しようと何度も幻術を解いて反抗しようとするが、持ち前の写輪眼に木の葉一の幻術使いである紅の指導を受けているサスケの幻術は白と見えどそう簡単に解ける物では無く、更に絶え間なく与えられる肉体への責めに翻弄され、次第に抵抗する意思が薄れて与えられる責めを耐え忍ぶ事に集中しだした。

そんな白の心情を察したサスケは突如全ての責めを止めて白の顔を見据えた。

「ハアハア……な、なんで?ど、どうして急に……」

突然動きを止めた事に困惑する白であったが、それでも密着されている下腹部から感じる異物感が無くなる訳ではなく、寧ろ動作が止まった事でサスケの一部の存在をよりハッキリと意識してしまい狼狽する。

「止めて欲しいって言ったから止めたんだぞ？それともやつぱり続けて欲しいのか？」
「っ!!ち、違っ!!だ、誰がそんな事っ、やああああつ!!」

サスケのその挑発交じりの言葉に反論しようとした白であったが、不意打ち気味に動きを再開させたサスケの激しい攻めを受けると、言葉での抵抗とは裏腹により女らしくなった嬌声をあげながらサスケの動きに合わせる様に体を動かし始めた。

幻術で自由を奪われている筈の己の体が無意識のうちに艶めかしく腰を動かしている事にまだ気が付かないでいる白は、より一層激しさを増した攻めを受け続けるうちに今まで経験したことの無い強烈な感覚に全身を支配されそうになる。

だが、その瞬間を見計らう様にして再びサスケは体の動きを止め、白が冷静さを取り戻しかけるとまた動きだすといった行動を繰り返した。

「やつ、あんつ、あああ!!こ、今度こそっ!!……ど、どうしてえ」

何度も絶妙なタイミングで責めを中断される白は仰向けになった己の身体を組み伏

せているサスケの顔を恨めしそうな目で見つめるが、当のサスケは剥き出しになった白の胸に手を添えると、自己主張している先端を避けてゆつくりと撫で回しながら白に對し最後の追い込みをかけた。始めた。

「どうして？その口ぶりだと止めて欲しいってよりは続けて欲しいって風に解釈できるんだが？」

「そ、そんな事つ、ひゃんつ!!だ、駄目え、む、胸……そんな風にされたらあ」

硬くなった胸の先端を甘噛みするサスケを白は口では否定しているものの、その顔は嫌悪感とは真逆の恍惚とした表情を浮かべており、既に自由に動かせるその腕はサスケ押し退ける訳でもなく強く抱きしめる。

「そんな顔で言われても説得力は0だぞ。何だったら鏡で自分の顔でも見てみるか？」
「ち、違う!!僕はつ、んぐつ!!むうううっ!!んうううう……」

反論しようと開いた口を塞がれた白は己の舌に絡み付いてくるサスケの舌に口内を蹂躪されると、今まで蓄積された物が全て解放された様に全身を激しく痙攣させた。

「ふう、そーいやまだ名乗って無かったな。俺はうちはサスケだ。お前は？」

「はあはあはあ……ぼ、ぼくは………白です」

サスケが唇を離すとそこにはもう霧隠れの鬼人が作り上げた道具としての白の姿は

無く、一人の女としてサスケを求める白の姿がそこにあるのだった。

「はあはあ俺とここまでやり合えるとは、流石は守護忍十二士の猿飛アスマといった所か」

「ふうふうふう……そ、そういうお前もな。霧隠れの鬼人の名は伊達じゃなかったって訳だ」

波の国に上陸した俺達を待っていたのは霧隠れの鬼人桃地再不斬の襲撃だった。

俺の当初の予想ではアスマと紅の二人掛かりでも再不斬有利ではないかと想定していたがで、アスマは紅と俺達にタズナの護衛を任せると単身再不斬と戦闘を始めた。

再不斬が霧隠れの術を発動させようとすると、すかさずアスマは風遁を使い攻撃すると同時に霧を吹き飛ばして再不斬が無音殺人術に繋がられない様に妨害する。

そしてチャクラ刀を手に接近戦を挑むアスマを再不斬は首切り包丁で迎え撃つと
いったパターンを幾度も繰り返してほぼ互角の勝負を繰り広げていた。

俺は自分の読みが良い方に外れた事に安堵し、写輪眼を使って二人の戦いを今後の修
業に活かそうと脳裏に焼き付けていたが、一瞬の隙を突かれたアスマは水牢の術に囚わ
れてしまった。

「あ、アスマ先生!!」

「はあはあはあ、そこで大人しくしてな。おいガキ共、そのジジイをこっちに渡せ」

アスマとの戦いで消耗したとはいえ、それでもまだ俺では到底敵いそうにない空気を
感じさせてこちらに近寄ってくる再不斬だったが、紅が俺達を守ろうと再不斬の前に立
つとほぼ同時に再不斬は突然飛んで来た千本に首や頭部を貫かれた。

「がっ!!こ、これは!?!は、白……なにをしやが……」

再不斬は千本が飛んで来た方角を睨みつけながら膝をつき、そのまま地面に横たわり
動かなくなった。

突然の出来事にこの場に居る全員が茫然とする中、水牢の術から解放されたアスマは
再不斬に駆け寄り身体を調べ始める。

「な、何これ？ねえシカマル、一体何が起きたってうちの？」

「俺が知るかよ。ただ、一つだけ言える事はあの口包帯野郎を何処かの誰かが仕留め
たって事だろ」

「何処かの誰かって……え？じゃあ僕達を助けてくれたって事？」

絶体絶命の窮地を脱したこの場の全員が千本が飛んで来たであろう方角に視線を向けるがそこには当然の事ながら人の姿は無く、アスマは念の為と言つて再不斬にトドメを刺すと懐から煙草を取り出し一服した。

「ま、いずれにせよあの桃地再不斬を相手に全員無事で済んで本当に良かったな」

「そうね。誰かのお陰で任務を続けた結果戦う羽目になった相手だけど、その尻拭いはちゃんとしてくれたみたいだからそこだけは評価してあげないとね」

「うぐつ、兎に角長居は無用だ。再不斬の死体を処理したらすぐに此処を離れるぞ。この首切り包丁は……一応戦利品として持つて行くとするか」

紅からの辛辣な台詞に落ち込みながらも再不斬の死体を処理するアスマを尻目に、俺は影分身から得た情報で知っている千本の投擲者に感謝して、タズナの家へを向かう為その場を後にした。

サスケ達が戦場となった湖を立ち去って数分後、そこに現れたのは白と偵察役のサスケの影分身であった。

「再不斬さんごめんなさい。ぼ、僕は……あん!!」

再不斬の死にシヨックを受けている白を影分身のサスケは背後から抱きしめ、胸を弄りながら白の耳元で囁き始めた。

「再不斬が死んだのはお前の責任じゃないだろ。白はちゃんと仮死状態にしたんだからその後の事はお前の与り知らない事じゃないか」

「で、でも僕がつ、あつ駄目、サスケくんっ」

口では嫌がりながらも振り解こうとしない白は再不斬の事を忘れるかの様に激しくサスケを求め続けるのだった。

波の国活動記録

俺達が波の国に訪れて早くも二週間が経過した。

再不斬の死後もタズナの命を狙うガトーは新たな刺客を次々に送り込んで来たが、それらは全て再不斬とは比較にならない格下の抜け忍やギャングばかりであった。

当然その程度の連中では再不斬以上の脅威になる訳も無く、アスマと紅の指揮の元各班の手頃な実戦経験の相手として撃退し、タズナの橋造りは順調に進んでいた。

そして俺は波の国滞在中にも一族復興の為の準備を順調に進めており、白という想定外の人物に加えて新たに一族復興の為の協力者を得る事に成功した。

「あんつ、駄目よサスケ君。こんな姿イナリに見られたら、はあん」

その相手とは依頼人タズナの娘でありイナリの母でもあるツナミである。

本来であれば、白が女だった事も有り忍者とは無縁の家系であるツナミに手を出す必要性は無いのだろうが、一族を復興させるには一人でも多くの協力者が必要だと考え直した末、結局関係を持つ事にしたのだ。

「イナリだったら紅達が護衛して買物に行ってるから問題ないさ。ほら、もつと激しくするぞ」

「やつ、そんな激しくつ!! あつ、やんつ!! あああああつ!!」

四つん這いになり髪を振り乱して喘ぐツナミに未亡人の色気を感じながら強く密着させた腰を震わせると、ツナミはイナリに見られるかもしれないという心配を完全に忘れさったのか、大きく嬌声を上げてそのまま力なく床の上に崩れ伏す。

「はあはあはあ……あんつ。ま、まだ続けるの?」

「当たり前だろ。何の為に本体の俺が護衛してると思ってるんだ?」

息を乱しながらも期待に満ちた目をするツナミを仰向けにし、俺は剥き出しにした二つの双丘を鷲掴みにして再び下半身を押し当てて復興作業を再開する。

（今頃影分身はそれぞれのノルマをこなしてる頃か。そろそろ兵糧丸でチャクラ補充しておくか）

橋が完成してしまえば木の葉に帰還しなければいけないので、俺は残された滞在時間を最大限に活用すべく当初の予定より大幅に消費している兵糧丸をまた一つ口に含むのだった。

本体のサスケがツナミとの復興作業に勤しんでいる頃、影分身サスケの一人は原作では第七班として木登りの修業をしていた筈の森で別の修業を行っていた。

その修業とはサスケが持つていない性質変化の修業であり、修業を始めて2週間で経過してようやく二つの性質の基礎を身に着ける事に成功してた。

「チャクラを薄く鋭く研ぐ様に……今度こそ!!」

サスケの掌に集められたチャクラを木に押し当て一度に放出すると、風の性質に変化したチャクラにより木には鋭利な刃物で斬り付けられた様な斜めの切れ込みが入り、そのまま滑りながら崩れ倒れた。

「これで取り敢えずは風の性質変化は会得したと言っても支障はないかな?」

「そうだね。でも、まだ実戦で使うには練度不足だと思うよ」

倒れた木に腰かけて修業のコーチ役の白に採点を求めると、白はサスケが相手だからといって過剰に持ち上げる様な評価はせず、再不斬のパートナーとして培ってきた経験から得た指摘を返して来る。

「だろ。やっぱり一度に二つの変化覚えようとするのは無謀だったか」

「二週間でここまで形になってるなら十分の成果だよ。さ、次は水の性質変化の特訓だ

よ」

そう言いながら修業場所の水場へ向かおうとする白だったが、その背後をサスケが羽交い締めにする様に抱き着いた。

「きやつ!? さ、サスケ君何をつ、んあつ」

「なあ白、今日は今までの修業の成果を複合的におさらいするってのはどうだ?」

背後から服越しに胸を揉みしだくサスケの腕を掴む白だったが、突然胸元が涼しくなり視線を下へ向ける

「ちよ、どうして僕の服が切れてつ、あふつ」

「まずは風の性質変化のおさらいだ。上手い具合に服だけ切れてるだろ」

風の性質変化修業の初歩は掌に挟んだ木の葉をチャクラだけで切る。

一歩間違えば白の肌を傷つけてしまう行為では有ったが、それが却って白の被虐心を刺激したのか服を台無しにされたにも関わらず恍惚した表情でサスケの指の動きに翻弄される。

「次は水の性質変化のおさらいをするぞ」

「やつ、む、胸がぬるぬるしてえ、やんつ、胸の先を弄つちや、あん」

水に変化したチャクラが潤滑液の様になり、ヌメリ気を帯びた胸の突起をこねくり回すサスケに、白はもうコレが名目上は修業だという事を忘れて喘ぎ始める。

「お？白のココからも水の性質変化したチャクラが溢れ出してぞ」

「あああつ!!そ、それは違つ、んんっ!!」

少々言い回しが親父臭いと感じたサスケはそれを指摘される前に白と自らの下半身を密着させて激しく前後させた。

その後サスケの影分身は本体からチャクラを再分配された事を良い事に白とのおさらい修業を続け、その日の内に水遁と風遁のCランク忍術を使えるまでの成果を上げるのであつた。

一方此処は建設中の橋の工事現場。

そこでは第十班のチョウジとシカマルが橋造りの手伝いをさせられていた。

「おくいチョウジ、まだ資材を運んでくれだつてよ」

「またあ？僕もう疲れちゃつたよ」

面倒臭いと言いながらも渋々仕事をするシカマルと、倍化の術が重宝するのか今回の任務では意外な活躍しているチョウジは、この場に居ない同班のくノ一と担当上忍に對して愚痴を言い始める。

「ねえシカマルうー、先生といのは仕事もしないで一体何をやってるんだろ」

「知らねえよ。アスマは極秘任務とか言つてどっか行つちまつたし、いのはどうせサボつてんだろ」

「サスケがあそこに居るのにな？そんなに力仕事が嫌だったのかな？」

チヨウジの発言にそう言われてみればとシカマルは視線を向けると、そこには黙々と橋の資材を運んでいるサスケの姿が有った。

「おーい何をしとるんじや。こっちは超待つとるんじやぞ」

「へいへい今行きますよ。ほらチヨウジ行くぞ」

「お腹空いてるのにな。忍法倍化の術」

文句も言いつつも雇用主のタズナの指示の元チヨウジはその肉体を数倍に膨らませて資材運搬を始めた。

（倍化の術の印は大体読めたな。影真似の術はシカマルがあまり使わないから今回は難しそうだ）

タズナの指示を受けて仕事をする二人を観察するサスケの影分身の内の一人は、自分も他の相手が良かったなと思いつつも両者がそれぞれ一族の秘伝忍術を使用する瞬間を写輪眼を使い観察するのだった。

「あつちの俺は秘伝忍術コピーに手間取ってるみたいだな。俺はいいのが協力的で助かるぜ」

「あんつ、サスケ君の為なら当然よ。ね、そろそろ誰かに心転身の術試してみない？」

橋から目と鼻の先の木陰の中で、もう一人の影分身サスケはいいのに一族秘伝の忍術、心転身の術を手取足取り教えて貰っていた。

「誰かにね。じゃあ俺が乗り移った誰かと今やってる事の続きでもするか？」

「ぜ、絶対に嫌つ。いくら中身がサスケ君でもそれだけは、んむう」

冗談で言つたつもりだったが思った以上に拒否感が強かつたので、サスケは対面で抱き合つていきたいのの唇を塞いで術を教えて貰う報酬代わりの行為の動きを激しくさせる。

「冗談に決まってるだろ。本気で俺以外の奴にいのを抱かせると思つたのか？」

「あつ、あつ、あふうん。駄目つ、声が周りに聞こえちゃう。んぐつ」

影分身というサスケだが本人では無いという事実は隠しつつ、サスケはいいのへの報酬を満足するまで出し続けるのであつた。

「ただいま。あれ？サスケ君ツナミさんはどうしたの」

「ああ、少し疲れ過ぎたって眠ってるぜ」

「ツナミさんは普通の人なんだからあまり無茶させちゃ駄目よ。それから例の件はアスマが張り切って頑張ってるみたいよ」

タズナ宅に帰って来た紅達を迎えると、俺は話の邪魔になりそうないなりに幻術を掛けて眠らせるとお使いついでに紅達に頼んでおいた事の報告を受ける。

「でも大丈夫かなアスマ先生。いくら何でも一人でガトーカンパニーに乗り込んでガトーが今までやってきた悪事の証拠を集めるって無茶だと思うけど」

心配そうな顔をするヒナタとは対照的に、紅とサクラは平気な顔をしてツナミに代わって食事の用意をしながら話を続けた。

「平気よ。だってアスマ先生って元守護忍何とかだったんでしょ？」

「そうね。本人が任せろって言ってたんだから任せて大丈夫でしょ」

紅達に頼んだ事とは今回の騒動の黒幕であるガトーへの対策である。

ガトーの性格上例え橋が完成したとしても波の国に対する乗っ取り行為を止めるとは到底思えない。

原作では再不斬が殺してくれたお陰でカンパニーは崩壊したが今回はそれは期待出来ない。

そこで俺は白から得たガトーに関する情報を紅経由でアスマに渡し、更にはアスマが自らの意思でガトーカンパニーに乗り込むよう誘導する事を紅達に頼んだのだ。

「そんなことより、上忍の私やアスマをいのように使う悪い子はどんなお仕置きしたら反省するのかしらね？」

そう言いながら紅は俺の前に跪くと、妖艶という表現があまりにも似合う仕草で俺の衣服をずらすと、そのまま大きく口を開けて頭部を前後に動かし始めた。

「あく先生ズルイ。昨日は散々サスケ君にお願料とか言つて沢山して貰つてたのに」
「んふ、それはそれ、これはこれよ。忍者ならこのくらい強かにならなきゃね」

紅の挑発的な言い回しに触発されたのかサクラとヒナタも左右から抱き着き身体を摺り寄せて来る。

(こりゃあ木の葉に戻る前に猫バアの所に寄らなきゃ駄目だな)

三人のくノ一に囲まれて本日何度目になるか分からない兵糧丸を補充すると、俺は一族復興の為に決めた己の忍道の険しさを改めて痛感するのだった。

「死ぬガトー!! お前をやれば今度こそ紅は俺を見直すんだ!!」

「ま、待て!! 金ならいくらでもつ!! ギャー!!」

紅がサスケにお仕置きという名の行為をしていた頃、波の国乗っ取りを企んだガトーはアスマの手により暗殺され、これまで明るみに出なかつた企業の悪事や小国の乗っ取りの証拠も全て押収されたガトーカンパニーは崩壊した。

尚、カンパニーの資産が一部持ち逃げされた形跡も見つかったが、その犯人が木の葉の下忍と男装の氷遁使いと気付く事は無く、雇われた抜け忍の仕業と思われるとアスマは後の報告書に記載するのだった。

木の葉へ帰還の寄り道道中

ガトーカンパニーが崩壊したという情報はあつと言う間に波の国の住人全てに知れ渡った。

更にアスマはガトーの保有していた資産の一部を波の国大名の許可を得た後、今まで搾取されていた波の国の住民に分配した事で一躍時の人となり、英雄と称される事となった。

そしてガトーの死により手の平を返した様に島民達が橋造りに協力したことで、予定より早くタズナの橋が完成を迎えた。

「アスマ大橋か……ま、それだけの活躍はしてくれたから当然かな」

ナルトの名など一文字も見当たらない橋の名を見て、俺は今だ住人に感謝と別れを惜しむ声に囲まれるアスマに視線を向ける。

「おじさん、本当に帰っちゃうの？」

「アンタはガトーを倒してこの国を救ってくれた英雄だ」

「アスマさん、本当に何度感謝の言葉を言えば良いか」

あの調子でもう一時間近く出発の予定が遅れてしまい、紅達は勿論の事他の第十班の

面々も呆れた様子でアスマを見つめていた。

「先生、いい加減に出発しないとまた一泊する事になるぜ」

「そうよそうよ。早く木の葉に戻ってガトーの事報告しなきゃいけないでしょ」

「分かつてるって。じゃあ皆さん、お元気で」

完成された橋に一步踏み出したアスマの表情はとても晴れやかな物だった。

しかしその顔は紅から発せられた一言で一瞬で曇ってしまう。

「ねえアスマ、私達はこれから寄る所が有るから先に木の葉に帰っててね」

「なっ!? そりやないだろ。俺だつて付き合うぜ」

「アナタは里への報告が最優先でしょ。火影様には忍具の買い足しで遅れるって伝えておいてね」

それから暫く食い下がるアスマだったが、同行を断固拒否する紅にガツクリと肩を落とし、第十班のメンバーに慰められながら再不斬との死闘の末手にした戦利品である首切り包丁を担いで木の葉へと歩みを進めるのだった。

「あの男のお陰で波の国が本当に生まれ変わる事が出来そうじゃ」

「そうね……ねえイナリ、弟と妹だったらどっちの方が嬉しい?」

「な、何それ!? あの煙草オヤジまさか!!」

アスマ達が去った後にタズナ一家はとある誤解をする事になるのだが、その誤解が解けるのはいつかつナミが真実を話した時だろう。

空区と呼ばれる廃墟群。

ここにはうちは一族が代々忍具の取り引きをしている猫バアと呼ばれる人物が住んでおり、俺は第七班のメンバーと、どきくさに紛れて一緒に付いて来たイノと共に廃墟の中を歩いていていた。

「なんか陰気臭い所ね。本当にここに忍具屋なんて有るの?」

「陰気臭くて悪かったニヤ。サスケ、久しぶりだニヤ」

サクラの悪態に反応したのか猫バアまでの案内役の忍猫デンカとヒナが現れる。

「久しぶり。ほら、マタタビボトルとここに来る前に見つけたオマケの生のマタタビの実だ」

「相変わらずの上物だニヤ。猫バアの所まで案内するからついて来るニヤ」

通行料となるマタタビボトルを受け取った忍猫達は俺達を猫バアの元へと案内し、俺は波の国で大量消費した兵糧丸の補充と、その他忍具類を用意して貰う。

「ありがとう猫バア。おつりは取っておいて良いから」

「随分と羽振りが良いのサスケ。下忍の稼ぎで良くこんな大金貯めたね」

「ちよつと臨時収入が有ってね。それよりタマキはどうしたんだ？」

タマキとは猫バアの孫娘の事だが今は姿が見えない為何処にいるのか尋ねると、俺が訪ねてきたと知って店の奥へと駆けて行つたらしい。

俺は店内を物色するサクラ達を残してタマキが居るであろう店の奥へ向かった。

「えーと、この服はちよつと派手すぎるかな？どうしよう早く決めないとサスケ君が帰っちゃう」

猫バアの店の奥の居住スペースではタマキがクローゼットの中から衣服を取り出しあーでもないこーでもないどと悩み続けていた。

「何をしているんだタマキ？猫バアの店で服も売る気になったのか？」

「きやんつ!!さ、サスケ君っ、駄目だよ。今こんな格好なのに」

下着姿で悩んでいたタマキの背後から不意に抱き着くと、タマキは驚きと恥ずかしさから俺の腕から逃れようと足掻いた。

「この前来た時はもつと恥ずかしい格好してただろ？何だったら今から同じ姿にしてやろうか？」

下着の上からタマキの胸の先端を摘まんて耳元に息を吹きかけ舐め回すと、タマキは形だけの抵抗を止めて俺の指と舌の動きに翻弄される。

「あつ、アツ、ああアん。さ、サスケ君つ、も、もうらめらつてえ」

「本当に止めて良いのか？こっちは準備出来てるって言ってるぜ」

片腕を下半身を覆っている下着の方へと移動させ、タマキの身体を三ヶ所同時に攻め立てると、波の国で経験を積み更に高まった俺の技術によりタマキは止めどなく続く刺激に耐え切れず、店内に漏れない様に塞いだ俺の口内に嬌声を発した後気を失ってしまった。

「随分お楽しみだったみたいだニヤ。マタタビの匂いよりも濃い臭いがするニヤ」

「猫バアには黙っててくれよ。この間はそれで商品汚して買い取りになったんだから」

タマキとの復興作業を終えて店内に戻った俺は、店の奥で何をしていたか察している紅達を連れ立って木の葉に戻ろうとするが、大事な用件を思い出し猫バアに頼みごとをする。

「なあ猫バア、ちよつとお願いとつか頼みたい事が有るんだけど」

「なんじゃ？まさかこのババにまで手を出す気じゃないだろうね？」

その台詞を聞いたサクラ達は引きつった表情をしていたが、俺は猫バアの冗談を取え
て無視して背後隠れている人物に声をかける。

「実はさ、この店で雇って欲しい人が居るんだよ。白、猫バアに挨拶してくれ」

「初めまして。白と言います。真面目に働きますので雇ってくださいませんか？」

突然現れた白にサクラ達は勿論の事、紅ですら驚きを隠せずにいた。

「もしかしてこの子が波の国で協力してくれた子？」

「ああ、なあ頼むよ猫バア」

本音を言えば白も木の葉へ連れて帰ってやりたい。

しかしもし白の正体がダンゾウなどに知られた場合、今の俺では流石にどうする事も
出来ない。

そこで定期的に会いに来る事と時期を見計らって必ず迎えに来ると白を説得して、ま
ずは猫バアの元に身を置いて貰う事を了承して貰ったのだ。

「さっきのお釣りが妙に多かったのはこの為でもあったのかい。先に言っておくけど給
料は安いから後で文句は言うんじゃないよ」

「はい、ありがとうございます。サスケ君なるべく早く迎えに来てね」

どうやら猫バアは白を預かってくれるみたいだ。

俺は感謝の言葉と共にガトーの元から失敬した金の入った巻物を白に渡して一時の

別れを惜しんだ。

「いや、それにしても白さんって美人だったわよね。サクラなんか足元にも及ばないって感じじゃない？」

「アンタも人の事言えないでしょイノブタ。ハッキリ言って白さんとアンタじゃ月とスツポン以上の開きが有ったわよ」

原作ではあの容姿で男だったという事実を知ったらこの二人はどういう反応をするのかと思いつつ、俺はこれから先もこんな予想外の事態が起きてしまうのかと、不安と期待が半々に混ざり合った感情で紅達と共に木の葉への帰路についた。

「おや、今日は馴染みのお客さんが続く日だね」

「……武器と葉、それから他に欲しい物はコレに書いて有る」

サスケ達が猫バアの店を訪れたその日の深夜、一人の男が赤い雲の刺繍がされた衣服

を纏い現れた。

その男こそうちは一族をサスケを残して滅ぼし、現在暁と呼ばれる組織に身を置いて
いるうちはイタチであつた。

「誰が訪ねて来たのか聞かないのかい。昔は良く二人でここに来てたのにねえ」

猫バアの言葉にイタチは特に反応を見せる事は無く、用意された品物を手にすると代
金を払つて立ち去ろうとする。

「そうそう、言い忘れていたがサスケは随分と女にモテる様になつてたね。まさか私ま
で口説こうとするとは年甲斐も無く心を揺さぶられてしまつたよ」

その台詞にピクリと肩を震わせ、イタチは立ち去ろうとした足を止めて猫バアに目を
向けた。

「……猫バア、俺につまらない冗談を言うとはどういうつもりだ？」

「おや？ やつぱりまだサスケの事が気になるんだね。嘘か本当か知りたいなら本人に直
接問い質せば良いじゃないか」

写輪眼対策なのか目を瞑つてそう応える猫バアにそれ以上何も言わず、イタチは物陰
からこちらを観察する人物を一瞥すると足早にその場を後にする。

イタチが去つた事を確認した白は自分の気配を一瞬で察したイタチの実力に驚きを
隠せずにはいた。

「あの人がサスケ君のお兄さんですか？」

「まあね。でも、サスケにはイタチがここに来た事は秘密にするんだよ」

「お買ひ物は済みましたか？私も何か買ひに行けば良かったですかね？」

廃墟の外で待つていたイタチの相棒である暁のメンバー干柿鬼鮫は、戻つてきたイタチが僅かに動揺している事に気付いて中で何か有つたのかと思ひ遠回しに尋ねる。

「あそこにはお前が欲しい品は揃つていないさ。余計な詮索は止める事だ」

「フッフッフ、それは失礼しました。では行きましようか」

イタチが何に動揺したのか興味有つた鬼鮫だが、付き合ひの長さから本当に詮索されたくない内容だと察してそれ以上は踏み込まずに愛刀鮫肌を担いで歩き出した。

（サスケ……お前は俺に復讐するつもりは無いのか？）

猫バアに聞かされたサスケの現状を思案するイタチの表情は弟を心配する兄の顔であつた。

中忍試験編その1

波の国の任務を終えて木の葉に戻った俺達第八班には、再びDランクやCランクの依頼をこなしながら修業をする日々が戻って来た。

尚、ガトーの一件で里の人間のアスマに対する評価は急上昇し、流石三代目の息子だの次期火影の座に一步近くなったのだという話が里のあちこちで囁かれる様になった。

もともとアスマ本人は紅からの評価を得る事が一番重要なのだろうが、当然の事ながら紅は我関せずという態度で俺達の任務や修業の指導に勤しんでおり、少々不憫に思えてくるが今更紅をアスマに渡すつもりは無いので忍者らしく耐え忍んで貰うだけである。

そして6月の下旬に差し掛かったある日。いつも通り修業を続けていた俺達の頭上の空を一羽の鷹が飛んで行くのが見えた。

「あく疲れたってばよ。オツちゃん、味噌チャーシュー大盛りだってばよ」

「お前は相変わらずのラーメン馬鹿だな。チャーシュー一枚寄越せよ」

木の葉の里で営業するラーメンの屋台一楽で、ナルト達第七班のメンバーは任務完了の打ち上げも兼ねた食事をしていた。

「へへくん、誰がやるかってばよ。そう言えばさ、カカシ先生は何処に行っただってばよ。」

ナルトはラーメンを奢らせようとしたのに突然急用が出来たと言って消えてしまったカカシの事を思い出して両隣に座るキバとシノに尋ねた。

「お前本当に人の話聞いてないな。先生は任務の報告書出しに行くって言ってただろ」

「そう、しかし俺はそれだけでは無いと思っている。何故なら先生はその直前に……アレは」

相変わらず回りくどい言い回しをするシノがふと視線を向けた先には見慣れない二人組が歩いていった。

「なんだアイツら？ 里の人間じゃねえな」

「恐らくアレは砂隠れの忍者だ。何故なら額当てを見ればすぐ分かる」

額当てという分かり易い身元証明をシノが指さすと、二人組が砂隠れの忍者だと聞いたナルトはアカデミー生時代から変わっていない猪突猛進を發揮して砂隠れの二人に突っかって行く。

「おいお前等!! どうして砂隠れの奴が木の葉に居るんだってよ!!」
「ああん? 何なんじゃんお前?」

黒い装束に包帯に巻かれた等身大の物を担いだ男は突然現れたナルトを訝しむと、金髪を四つ束に纏めた特徴的な髪型をした女はナルトの言動と振る舞いを見て見下した様にナルトを鼻で笑った。

「見たところ木の葉の忍者みたいね。しかも間違はなく下忍確定の」

「へッ、木の葉の下忍がこんな奴ばっかりなら今度の中忍選抜試験は楽勝じゃん」
「ちゅ、中忍選抜試験? 何だつてばよそれ?」

ナルトの質問に答える事も無く二人の砂隠れの忍者は、お前には一生関係ない話だと言いつつ残してその場を後にし、残された第七班の面々は二人をぶっ飛ばしてやると暴れるナルトを取り押さえるのに苦労するのであった。

「えっ、先生急用ですか? じゃあ今日の先生の家での反省会は?」

「残念だけど今日は中止ね。まったく、下らない招集理由だったら許さないわよ」

紅が招集の連絡を受けた所為で恒例の反省会は急遽中止となり、ならば3人だけでも言っていたサクラとヒナタもそれぞれに用事が出来てしまい実家に帰ってしまう。

「久々に一人だけで過ごす事になるか……ん？ そう言えば時期的に中忍選抜試験が始まるのか」

中忍選抜試験とはその名の通り下忍の中から中忍に相応しい物を選別する試験であり、木の葉の里だけでは無く同盟国の忍者も合同で行われる為、今頃各里から木の葉の里に試験を受けに多くの下忍が訪れている筈だ。

「一番の問題は大蛇丸だな。もし呪印なんて刻まれたら一族復興どころじゃなくなるぞ」

テマリやテンテンなど中忍試験で関係を深める事が出来る相手を取るか、大蛇丸対策として中忍試験を受けずに試験の期間中は紅達と共に木の葉を離れるべきか。

ある意味今後の俺の人生を決定付けるであろう選択に悩みながら歩いていると、俺の目の前に木の葉の忍者では無い3人組が立ち塞がった。

「うちはサスケ君……ですわね？」

一人は顔の大半を包帯で包み、右腕に忍具を装着した男。

「ちよつと俺達に付き合ってくれよ」

もう一人は死の文字が縦に三つ並んで書かれている服を着ている男。

「素直に言う事聞いた方が身の為よ」

最後の一人はかかとまで届く黒い長髪の女であり、それぞれ音符を記した額当てをしていた。

このタイミングで俺に接触して来た音忍三人組に驚きつつも、それを顔に出さない様に平常心を保ちながら三人の背後に向かつて指を差す。

「人違いだな。サスケだったらあつちに居るのが本物だぞ」

「つまらない真似は止めた方が良いですよ。僕達はこう見えて残忍な性格ですから」

そう言いながら右腕を俺に向けようとする音忍トス・キヌタよりも早く印を結び、俺は波の国で再不斬からコピーし白との性質変化の修業で使用可能になった術を発動させる。

「ぶ、分身の術!?!いや、この鼓動音は実際にそこにもう一人居る!?!」

「水分身の術だ。水の無い所だからこの人数が限界だけだな」

そうやって俺は敢えて影分身の術では無く練度の低い水分身を3人分作り出すと、ドス達が戸惑っている隙を突いて四方に散開し逃走するのだった。

サスケが去った方向を右往左往し、音忍の一人ザク・アブミは苛立ちを隠せず大声を発した。

「クソツ!!おいドス、どれが本物のサスケだ!?あの野郎絶対ぶつ殺してやる!!」

「多分あつちに逃げた奴だけど……まあ深追いする必要はないよ」

激怒するザクとは対照的に3人のリーダー格であるドスは冷静に一連の流れから得た情報を元にサスケへの評価を改めて採点し直した。

「うちは一族は火遁が得意だと聞いてたけど水遁も使えるんだね。しかもあの逃げ足の速さは相当スピードに自信が有りそうだよ」

どうやら3人がサスケに接触した目的は情報収集の意味も有ったらしく、ドスとザクは次にサスケに会う時は自分達に課せられた任務の果たす時だと話ながら笑みを浮かべていた。

（フッフ、思ってたよりも優秀そうで安心したわ。サスケ君……やつぱりアナタの体は魅力的よ）

そしてドスとザク、当然この場に居ないサスケも気付く事無く、異様に長い舌で舌舐めずりをする人物がその場に存在したのであった。

中忍試験編その2

中忍試験が開催される前日。木の葉の里に数ヶ所存在している演習場の一つで3人の下忍が修業をしながら会話をしていた。

「オイオイオイ聞いたかよ。今度の中忍試験、5年ぶりにルーキーが出るって話」

「まさかあ、上忍の意地の張り合いかなんかでしょ」

「いや、その内の二つはあの力カシの部隊と最近話題のアスマの部隊だって話だぜ」

緑の全身タイツを着たおかつば頭の男とチャイナ服に身を包んだ女の会話を聞いていた日向一族特有の眼をした男、日向ネジは僅かに表情を緩めて口を開いた。

「面白いなそれ……だがリー、お前のその喋り方は違和感しか感じないぞ」

「そうですか？今度の中忍試験デビューの為に少し喋り方をイメチェンしてみたのですが」

普段とは違う喋り方を否定されたロック・リーはすぐさまいつもの口調に戻し、うんうんとネジに同意し頷いていたテンテンは手に持っていた苦無をぶら下げていた藁人形に投げつける。

「ま、いずれにせよ可哀想な話よね。その子達イジメられちゃうんじゃない？」

「そうだな。精々自分達の実力不足を悔やんで貰うか」

余程自信が有るのか余裕の態度を崩さない3人だったが、その二班と同じく試験に出る事になっている紅の部隊に対して、ほぼノーマークの状態であった事を後々後悔する事になるのだった。

中忍試験当日、俺は悩んだ末試験を受ける事にした。

最悪大蛇丸に遭遇した場合に備えてサクラとヒナタを連れて逃走する為の手段も何とか形になり、俺達は最初の試験会場となる忍者アカデミーへと訪れた。

「えくと、試験会場はアカデミーの301の教室よね。あれ？あそこで何か揉めてない？」

「本当だ。あ、あそこに居るのはもしかして」

ヒナタの視線の先には第三班の面々とその他複数の試験志願者達が試験役をしている中忍と言いつ争っており、俺はネジの姿を見つけて萎縮するヒナタを気遣い、ネジ達はこちらに気付く前にさっさと本当の会場である三階の教室へと移動する。

「でも、どうしてあの人達2階で騒いでたのかしら？あの程度の幻術普通引つかからな
くじつよ」

「その程度に騙されるなら試験を受ける資格すら無しって事だろ……何か用か？」

試験前に面倒事を起こしたく無かったから接触する事を避けたのに、試験会場の教室
に入る直前の俺達に一人の男が絡んで来た。

「アナタがうちはサスケ君ですね。突然ですが僕と勝負して頂けませんか？」

「本当に突然だな。今から試験なのにそんな事する意味有るのか？」

俺に勝負を挑んで来た男は2階で試験官の中忍と揉めていたリーであり、サクラは近
寄り辛い見た目に加えて慇懃無礼な振る舞いをするリーに忌避感を露わにする。

「何よアンタ。サスケ君に喧嘩売って何が目的なの」

「ぼ、僕は喧嘩を売っているのでは有りません。ただ、木の葉のエリート一族であるサス
ケ君に自分の実力が何処まで通じるか試してみたいだけです」

サクラの批判に顔が赤くして弁解をするリーを尻目に、俺はこのまま相手をせず教室
に入ろうとするが、リーの体術をコピーする機会はこの時しか無かったと考え直して、
勝負を受ける事にした。

「では……行きます!!」

「は、速い!!サスケ君気を付けて!!」

見た目とは裏腹にその動きの速さからリーが高い実力を有していると見抜いたヒナタが叫ぶが、俺はその警告が耳に届く前に印を結び終えて術を発動させる。

「水遁・霧隠れの術」

「むっ? 目くらましですか!？」

リーの蹴りが俺に当たる寸前に上体を逸らしながら霧を発生させると、俺は間髪入れず別の術の印を結んでリーの追撃に備えた。

「見つけました!! そこです!!」

「グッ!? なんて重い蹴りだ」

サスケの発生させた霧は一時的にリーの視界を遮ったが、まだ術の持続時間が再不斬レベルに達していない為に姿を捉えられてしまい、サスケは予想以上の速度に驚きつつも写輪眼の先読みを駆使してリーの攻撃をガードし続けた。

「どうしたんですか!?! 守ってばかりでは僕を倒せませんよ!!」

「う、嘘……サスケ君が反撃出来ないどころか防衛するだけで精一杯になってる」

ようやくリーの実力を把握したサクラに良い恰好を見せようと、リーは奥の手である

蓮華を使用する為サスケを上空に蹴り上げる。

「これでトドメです!!表蓮華!!」

「クソツ、動けない……俺の役目はここまでだな」

そう呟くと同時にサスケの姿が消えてしまい、リーは驚愕した表情でもぬけの殻となつた包帯と共に床面に降り立った。

「い、今のはまさか影分身ですか。そうか、最初の目くらましはこの為だったんですね」
自分が一杯食わされた事に気付いたリーは本物のサスケの姿を探すが、周囲を見回してもサスケを発見出来ないどころか誰一人見つからなかつた。

「一体何処に隠れてるんですか!!出て来て正々堂々勝負して下さい!!」

リー以外誰一人いないという事はつまり、先程まで観戦していたサクラとヒナタも居なくなつたという事にリーが気付くのは、担当上忍であるマイト・ガイが表蓮華の使用を咎めに来たのとほぼ同じタイミングであつた。

影分身が自力で術を解いた事でリーとの勝負が決した事を察した俺は、本人の代わり

にその場に残留していたサクラとヒナタに変化させていた影分身の術も解除する。

そして実際に勝負した経験値と客観的に写輪眼で観察した経験を蓄積させて、先に試験会場の教室前に戻らせておいたサクラ達と合流した。

「ねえサスケ君、リーって人と影分身の勝負はどうなったの？」

「ああ、取り敢えず俺の負けって所だな。体術だけならリーが俺より強いのは間違い無しだ」

予想以上だったリーの体術を影分身経由とはいえ体感した俺は、素直にリーの実力を評価しサクラ達に伝えるが、サクラはリーが俺より強いという事を中々認めながらもなかった。

「でも、なんか納得出来ないわ。あんな変な恰好の人がサスケ君より強いなんて」

「見た目が強さに比例する訳じゃないだろ。それに勝負は負けただけど目的は果たせたから十分だ」

もつともリーはまだ錘を外したり、八門遁甲を開く等切り札を隠してる事は知ってるが、今回の目的はあくまでもリーの基本的な体術をコピーする事なので特に支障は無いだろう。

「さてと、そろそろ中に入るか、つと？」

教室に入ろうと扉を開けると同時に中から一人のくノ一とぶつかりそうになる。

「あ、ゴメン。ねえ、ちょっと聞きたいんだけど、おかつば頭で全身緑タイツの人見なかった？」

そのくノ一とは先程勝負を仕掛けて来たリーの同じ班員のテンテンで、恐らく今だ教室に出来ないリーを探しに行くつもりなのだろう。

「ああ、ソイツだったらさつきあつちに居たぞ。案内しようか？」

「い、いいわよ別に。場所さえ教えてくれたら十分よ」

俺の申し出をテンテンは当然の様に断るが、正直言つて情報収集が目的だったとはいえリーに負けた鬱憤が溜まっていなかった訳では無かったので、俺はサクラ達に先で待つ様に伝えると、八つ当たりと復興の協力者確保目的半々でテンテンをアカデミーの空き教室に連れ込むのだった。

「遅れてしまい申し訳ありませんでした」

「やつと来たか。お前を迎えに行つたテンテンはどうした？」

サスケとテンテンが連れ立って数分後、リーは試験会場へとやって来た。

「テンテンですか？僕は出会っていませんよ」

「入れ違いになったのか。仕方ないな」

そう言いながらネジは今テンテンが何処に居るのか白眼で探し出そうとするが、丁度その時教室の扉が勢い良く開かれると同時に教室中に響き渡る大声を発する下忍が現れた。

「俺はうずまきナルトだあー!!お前等なんかにや負けないってばよ!!」

あまりにも型破りなナルトの登場に試験前で気が立っていた受験者達も一緒呆気に取られるが、すぐに宣戦布告されたと認識したのか一斉にナルトに向かって殺気を放つ。

「元気な人ですね。アレがガイ先生が永遠のライバルと言っているカカシ先生の班員ですか」

「うずまきナルトか。身の程知らずとは正にアイツの事だな」

リーとネジは教室の受験生全員を敵に回したと言っても過言では無いナルトの行動に、それぞれ違った印象を受けていた。

「お、お待たせ。まだ試験は始まって無いわよね?」

「遅いですよテンテン。一体何処に行ってたんですか」

騒がしくなった教室にいつの間にか戻って来ていたテンテンは息を乱しており、ネジはリーを探して校内を駆け回っていたのだと認識する。

「リー、テンテンはお前が遅れたから探しに行ったんだぞ」

「そ、そうでした。申し訳ありません。余計な手間を取らせてしまいました」

自分の発言が軽率だったと謝罪するリーにテンテンは気にしてないからと言って座席に向かうと、余程疲れたのかそのまま周囲の目も憚らず突っ伏してしまう。

その様子を見たネジは妙な違和感を感じてテンテンの元に向かおうとするが、ナルト達と音忍の一悶着とその後すぐに現れた試験官の森乃イビキ達が試験開始を告げた事で、今まで本当に探し回っていたのか確認を取る事が出来ずに第一試験を受ける事になるのだった。

「ではこれより中忍試験第一試験を始める。それぞれ指定の席に着いたら筆記試験の用紙を配る」

「ペ、ペーパーテストおー!？」

中忍試験編その3

遂に中忍選抜試験が開始された。

最初の試験は筆記試験だが当然只の学力テストでは無く、試験官の目を誤魔化してカンニングをして解答欄を埋めるという情報収集能力を試験するのが目的だ。

俺は写輪眼を使い正解を記入している奴の動きをコピーするというカンニング方法で試験開始後45分経過してから出題される10問目以外の解答欄を全て埋め終えると、テマリやキン・ツチなど後に行われる二次試験以降に関わるであろう人物を見定めていく。

そしてイビキの出題した10問目のテストも終了し、いよいよ中忍選抜試験の第二次試験が始まろうとしていた。

「ヒナタ、例の草隠れの忍者達は15番ゲートで間違いないんだな？」

「う、うん。だから私達12番ゲートとはそう遠くない位置に居るみたい」

申し訳無さそうにそう答えるヒナタだったが、こればかりはクジ運が悪かったと思うしかない。

第二次試験が始まる前、試験官であるみたらしアンコと草隠れの忍者に偽装している大蛇丸とのやり取りを確認した俺は、5日間の巻物争奪サバイバルよりも5日間どうやって大蛇丸から逃げ通すかに重点を置いていた。

「ねえサスケ君、あの草隠れの連中ってそんなにヤバイ連中なの？」

「ああ、特にあの舌の長い奴はハッキリ言ってお上忍が束になっても勝てない奴だな」

流石に相手が伝説の三忍の大蛇丸だとは明かす事は出来ないが、それでも大蛇丸の脅威はサクラ達に伝えておくべきなので危険な人物が下忍に化けて紛れ込んでいるとだけ二人に説明する。

「取り敢えずヒナタは白眼を使って奴らが近付いて来ないか見張ってくれ。他の受験者は俺とサクラで対処するから、兎に角草隠れの連中だけに注意してくれればそれでいい」

そして俺達の目の前のゲートが開かれ、第二次試験死の森でのサバイバル演習が開始された。

「はあはあはあ……大蛇丸、アナタは私が止めてみせる」

第二次試験が開始されて数時間が経過した頃、試験官のみたらしアンコは息も絶え絶えにし、このようにして死の森の中を歩いていった。

アンコは二次試験開始後に本物の草隠れの受験者の遺体発見の報告を受けると、それが大蛇丸の仕業であると判断して直ぐに死の森に入って大蛇丸を搜索した。

そしてサスケを探していた大蛇丸を発見して戦いを挑むも、アンコ一人では敵う相手の筈も無く返り討ちに遭い、取り逃がしてしまっていた。

「も、もし大蛇丸がうちはサスケに接触したら木の葉は……あ、アンタ達は」

大蛇丸の目的がうちはサスケだと知る事が出来たものの、首筋に刻まれた呪印の影響で体が思う様に動かせないアンコの前に一組の受験者達が現れた。

「おや？誰かと思えば試験官様じゃねえか。こんな所で何してんだ」

受験者達は大蛇丸の配下の音忍三人組であり、その中の一人ザクは満身創痍のアンコを見下す様にしてほくそ笑む。

「グッ!!アンタ達、大蛇丸に指示されて私を始末しに来たの?」

「は？何言ってるんだお前。大蛇丸様がどうしたってんだよ」

大蛇丸の名を聞いたザクは、どういう意味なのかアッコから詳しい話を聞き出そうとして髪の毛を掴んで頭を引き上げる。

「痛っ、どうやら私の勘違いだったみたいね。アンタ達ここに大蛇丸が居る事も知らなかったみたいだし。無駄な質問して損したわ」

「こ、このアマっ!!もう許さねえぞ!!」

アッコは自由の利かない体で精一杯の煽りをするが、それが却ってザクのプライドを傷つけ、ドスが制止するのも無視してアッコに自身の掌に空けられた穴を向ける。

しかしその時、何処からともなく飛来した苦無がザクの腕に突き刺ささり、その痛みからザクはアッコの髪を手放した。

「おい、大丈夫か?」

「あ、アンタは……うちはサスケ」

大蛇丸からの逃走を目的に加えたサバイバルをしていた俺達第八班の前に、音の忍者に襲われているみたらしアッコの姿が飛び込んで来た。

大蛇丸のリスクを考えれば素通りする事も選択肢としては有りだったかもしれないが、やはりそのまま放置する事も出来ず、俺は初対面では逃走一択だった音忍達の前に再び対面する事になった。

「ち、チクシヨウ!! うちハサスケえ!!」

「喚くなよ。それに今は巻物争奪中なんだから攻撃仕掛けても文句言われる筋合い無いぞ」

手の甲を貫いた苦無を無理矢理引き抜いたザクは俺に憎悪を込めた視線を向けて来た。

俺はサクラにアンコの介抱を任せ、ヒナタに引き続き大蛇丸の警戒を続けさせると、現時点ではこれ以上変化する見込みの無い三つ巴状態の写輪眼を発動させる。

「おいドス!! キン!! 今こそ大蛇丸様の命令通りうちはサスケを始末するぞ!!」

「君に命令されるのはシヤクだけど、ボクもそのつもりだったから付き合っただけよ」
「うちはサスケ、大蛇丸様の命により私達がお前を殺す」

自分達が大蛇丸に捨て駒にされてるとも知らない音忍三人組に対し、この後待ち受けている末路に少しだけ同情するが、そんな俺の心情を知る訳も無く音のくノ一キーン・ツチは鈴の付いた千本を投げつけて来た。

それらを全て回避していくと予想通り鈴の音を利用した幻術を仕掛けてきたので、俺

はすぐさま写輪眼で幻術返しをすると同時にキン・ツチに金縛りの術も掛けて身動きを取れなくした。

「なっ!?!ぐっ、動けない!?!それにどれが本物のうちはサスケなの!?!」

「バカだねキン・ツチは。あれだけ写輪眼の幻術には注意しろって言ったのに」

そう言いながらドスとザクは目を閉じると、第一次試験でカンニングをしていた様に音だけで俺との戦闘を続けようとする。

「さっきの苦無のお返しだ!!喰らえ斬空破!!」

苦無で潰されなかった方の掌からザクは得意忍術を放つが、両腕を使用した斬空極波ならともかく片腕だけなら俺が新たに使用可能になった性質変化の術で十分対応可能だ。

「風遁・烈風掌」

「な、何っ!?!コイツ風遁まで使えたのか!?!」

斬空破を相殺された事に動揺したザクの隙を突いて一気に間を詰めて当て身を喰らわせ昏倒させると、残されたザクは二人が短時間で倒されてしまった事に動揺する事無く俺と対峙する。

「まさか此処までやるとは思わなかったよ。でも、ボクの術は防ごうと思っても防げな

いよ」

そう言いながら右腕に仕込まれた相手の聴覚を攻撃する術を使おうとするドスだったが、それよりも先に俺の幻術が発動した事で自らの体が動かせない事に初めて動揺を露わにする。

「こ、これはまさか幻術？目を閉じていたのにどうして」

「お前の仲間のくノ一の鈴を利用して貰った。俺が視覚だけで幻術に嵌めると思い込んだのがお前の敗因だな」

先ほどキン・ツチが投げつけた千本の鈴を鳴らしながらドスの体を物理的に拘束したのち意識を断つと、俺は音忍3人組が保有する巻物を奪い取り、俺達が持つ天の巻物では無く地の巻物である事を確認する。

「コレで取り敢えず試験突破の条件は満たしたな。後は塔へ向かうだけか」

「な、成程ね。大蛇丸がアンタの体を欲しがると訊いたわ」

音忍達を撃退し終えた俺達はこの場にもう用はないとアンコを連れて塔に向かおうとするが、もし可能なら音忍を一人尋問の為に連れて行く事は出来ないかと尋ねられた。

「ちよ、ちよっと。これ以上サスケ君に負担掛けさせるつもりなんですか？」

「情報は重要な武器だって一次試験で学んだ筈でしょ。私だって自分が情けないお願いしてるって分かってるわよ」

俺は元からキン・ツチは情報を聞き出す為と言つて連れて行くつもりだったのだが、特別上忍としてのプライドを押し殺して俺に頼みこむアッコの姿に、その事を隠してアッコの要望を聞き入れた風を装うことにした。

「分かったよ。でも、さつき助けたのと今のとで貸し二つだからな」

そう言つてキン・ツチに幻術を掛けた俺達は塔に向かつて移動し、途中で合流する事になった暗部に護衛されながらゴールである塔へと辿り着くのであった。

サスケ達が塔へ辿り着いた丁度その頃、ドスとザクはようやく自らの拘束を解き終えて、自分達を完封したサスケに対して復讐を誓っていた。

「チクシヨウ!! うちにはサスケめ!! この借りは絶対に返してやる!!」

「無理よ。アナタ達は所詮サスケ君の囃ませ犬に過ぎないもの」

声を荒立てて興奮するザクに声を掛けたのはいつの間にかその場に現れた大蛇丸であつた。

「大蛇丸様!! 俺達が囃ませ犬つてどういう意味ですか!!」

「そのままの意味よ。でも安心しなさい、アナタ達にはこれから別の役割を与えてあげ

るわ」

「嘘ませ犬発言に憤りを隠せないザクとドスを一瞬で昏倒させると、その場である禁術の為の処置を二人に行い始めた。

「よろしいんですか大蛇丸様。彼らをこんなに早く使い捨てにしても」

「使い捨てなんかじゃ無いわ。この場合はリサイクルって表現が適切よ」

「心配を消して背後に現れた部下の薬師カブトに振り向く事無く処置を続ける大蛇丸だったが、ふと何かを思いついたのか、ドスの頭部に札の付いた苦無を刺しながら笑い始めた。

「ふふふ、良い事思い付いちやったわ。サスケ君には呪印の他にもう一つ、とっておきのプレゼントを上げてみようかしら」

「プレゼントですか？まさか大蛇丸様、あの細胞をサスケ君に移植するつもりでは？」

「動揺するカブトに背を向けたまま、大蛇丸は自分がやろうとしている事のリスクの高さと、もしそれが成功した場合の見返りを想像して笑い続けるのであった。」

中忍試験編。塔での幕間

俺達がアンコと共に暗部の忍者に護衛されながら死の森の塔に辿り着くと、そこには大蛇丸出現の知らせを受けたのか三代目火影が待つており、俺達の無事を確認すると安堵の表情を浮かべた。

「ほ、火影様。申し訳ありませんでした」

「謝らなくとも良い。それより今はお主の呪印を抑えるのが先じゃ」

大蛇丸を仕留められなかった事を謝罪するアンコを責める事なく、三代目は印を結んでアンコの呪印に手を触れて封邪法印を施し始めた。

原作で同じ封印を施すのにカカシが大掛かりな封印の術式を組んでいた事と比較すると、改めて三代目の技量に関心すると共に、今の俺ではまだ技術的に無理では有るが今後の為にと写輪眼で三代目の一挙一動を観察する。

「これで取り敢えずは大丈夫じゃ。さて、次はお前の問題じやのサスケ」

アンコの処置を終えた三代目は俺達に大蛇丸とは何者かを語り始め、アンコが大蛇丸本人から聞いた話を元に俺にどれだけの危険が迫っているのか語り始めた。

「火影様、こんな状況では中忍試験どころではありません。即刻試験を中止するべきでは？」

「儂もそう思っておつたんじゃが……実は既に二次試験を突破した組がおつての」

予想通りというべきか砂隠れの我愛羅達は俺達より早く塔に辿り着き、更には無傷で試験突破の最短記録を更新しており、他にも政治的な折り合いで今この場で試験を中止にする事は難しいとの事だ。

「それに大蛇丸も試験を途中で辞めるなど言つてたのであろう？ 奴の性格上試験を中止にすると何をしでかすか想像するのも恐ろしい」

「で、ではせめてうちはサスケは棄権させて暗部の監視下におくべきです」

試験の中止が難しいと分かると、アノコは妥協策として俺に試験を棄権させて暗部の監視下に隔離すべきと三代目に進言する。

俺は別に中忍に成る事に拘つてはいないのでそれでも構わないのだが、そうすると試験が終了後も暗部に監視されながら生活する事になるかもしれない。

もしそうなった場合は一族復興に大幅な支障が出てしまうので、大蛇丸のリスクを取るべきか自由を取るべきか究極の選択にしばし悩んでしまう。

「それも含めて結論は5日後の二次試験終了時に決定する。取り敢えずそれまではサスケは他の試験突破者とは隔離するしかあるまい。それで良いなサスケ」

「どうせ拒否権なんて無いなら素直に従うさ。それはそれとして、俺達は二次試験は突破したつてことで良いんだよな？」

巻物は二つ手にしたものの、暗部の護衛付きで塔に辿り着いたので試験の合否がどうなるのか確認を取ると、今回は例外中の例外事案として特別に合格とみなされる事になった。

「なら、5日後に俺が棄権つて事になつてもサクラとヒナタは次の試験に進めるんだな」「そういう事じゃな。ではサクラとヒナタを別室に連れて行つてくれるか」

俺の身を心配するサクラ達だったが、自分達ではどうする事も出来ないと理解している為、素直に三代目の指示に従い暗部の忍者に連れられて部屋を出て行き、俺は三代目に連れられて5日間の隔離生活を送る事となった。

他の受験者が死の森でのサバイバルを続けている中、俺は塔の地下に設けられている個室の内の一部屋で横になっていた。

風呂トイレ付きではあるが6畳程度の窓の無い部屋の中は思つてた以上に狭苦しく、更にこの部屋には万が一に備えて俺の護衛として二人の忍者が一緒なのだから余計に

狭く感じてしまう。

「やれやれ、これじゃあ隔離っていうよりは軟禁状態だよな」

「贅沢言うんじゃないの。死の森でサバイバルしてる受験者に比べたらココは天国よ」

護衛役の一人に任命されたアンコは部屋に用意されている非常食を食べながら、もう一人の護衛である暗部の忍者に声を掛けた。

「ねえ夕顔、アナタもこつちに来て座つたら？ ついでにその面も外しちゃいなさいよ」

「仕事の中なのでお構いなく。それと暗部の私を名前で呼ぶのは止めて下さい」

比較的くつろぎながら護衛をするアンコとは対照的に、暗部の面を被つたまま部屋の隅で立つて居るのは卯月夕顔という名の暗部のくノ一だ。

「本当にクソ真面目ね。この部屋は結界で外部と遮断されてるし、大蛇丸に居場所を特定されないようにカメラの監視もされてないんだから少しは羽を伸ばしたら？」

「相手があの伝説の三忍の大蛇丸なら少しの油断が命取りになります。それに、そう言ってるアンコさんも内心気を張り詰めてる風に見えますが？」

夕顔に内心を見透かされたのか、アンコはそれを誤魔化すように俺に話を振り始めた。

「そう言えば、アンタには借りが出来ちゃったのよね。後に伸ばすと利子が付きそうだから、今の内に返せる範囲で返させてくれないかしら」

「露骨に話を逸らすんだな。まあ返してくれるなら今すぐにでも……」

アンコへの借りは当然復興の協力を頼む事だが、今この場には夕顔も居るのでそれは難しそうだ。

（いや、待てよ。折角だから夕顔にも協力して貰えば良いのか）

夕顔の恋人である月光ハヤテには悪いが、後に死別する事になるのであれば特に支障は無いと都合の良い結論をだすと、俺は懐からキン・ツチから拝借した鈴付き千本を取り出す。

「じゃあ借りを返して貰うぞ。取り敢えずこの部屋で出来る事として俺の修業に付き合ってくれ」

「そんな事で良いならお安い御用よ。で、その鈴を使うって事は幻術系の修業なのかしら」

音忍との戦闘の際に目撃してる為か、少々警戒して俺に尋ねて来るアンコだったが、ふと部屋の中に今まで嗅いだ覚えのない匂いが漂っている事に気付いたようだ。

だが気付いた時にはもう遅く、アンコは目を虚ろにして意識を朦朧とさせていた。

「成程、密室なら効果は高そうだな。でも屋外だと匂いが拡散して効果は半減する可能性大っつ」

「う、うちはサスケ君!!アナタ今何をしたの!!」

猫バアの店で購入した幻術効果の有る香りを発する匂い袋の確認をする俺に、夕顔は面のお陰で幻術に掛かるまで匂いを嗅がずに済んだのか背中に背負った刀に手を掛けて俺に迫ってきた。

「何って、借りを返すって言うから忍具の実験台になって貰っただけなんだが？」

「ば、バカな事を言わない……で？体が、いつの間に私が金縛りの術に」

嗅覚幻術は回避したが鈴による聴覚幻術には見事に嵌ってしまった夕顔の面を外して横たわせると、俺は写輪眼で見据えながら二人のくノ一の触覚の支配を行い始める。

「くっ、あう、やつ、やめなさいっ」

「うあつ!?こ、これは?何をしてるのよっ!!」

夕顔と共に俺に体を弄られてる内に意識を覚醒させたアニコだったが、体の自由を奪われている事に気付いて俺に今すぐ止めるように罵倒し始めた。

当然そのくらいで止めるなら最初からこんな真似はしないので、その答えはこうだと言う代わりにチャクラを集めた指先で二人の乳首を摘まんて捏ね繰り回す。

「んああアアアアっ!!」

アニコと夕顔。サイズの違いは明白だが俺から与えられた刺激の衝撃は同じだったようで、二人は同時に嬌声をあげて体を痙攣させると、互いに顔を見合わせて狼狽する。「ほら、二人で見つめ合いたいならこうしてる」

俺は仰向けに横たわるアンコに覆い被さるように夕顔をうつ伏せにさせると、触覚支配の仕上げとばかりに重なった二人の下半身の間に俺を捻じ込ませた。

「くうっ、ゆ、夕顔おおおっ!!」

「あ、アンコさんっ!!アッ、アアっ、はあああん!!」

上の夕顔、下のアンコ、そして二人の間を不規則に入れ替えながら、俺は人間の五感の最後の一つ味覚を支配する為の液体を二つの口へと流し込むのだった。

二次試験が開始され三日目の夜を迎えた頃、ゴールの塔では三代目火影と本戦予選の監督官を任命された中忍、月光ハヤテが試験突破を果たした受験者達の資料に目を通していた。

「ふむ、今日で4チームが試験を突破しておるのか。最終日には何チーム残るのか楽しみじゃな」

予想以上に二次試験を突破したチームの多さに、三代目は大蛇丸の事を一瞬忘れて優秀な受験者が多数存在する今回の試験を純粋に楽しんでしまおう。

「ゴホツゴホツ……火影様、そろそろサスケ君の安否を確認する定時連絡の時間では？」

「おお、そうじゃったな。では通信機が使えるように結界を一時解くのじゃ」

三代目の指示を受け、試験官であるハヤテですら漏洩防止の為という理由で正確な場所を知らされていないサスケの部屋の結界が解放される。

「あーあーゴホツ、こちらは試験官の月光ハヤテです。お客様の様子を伺ってもよろしいですか？」

『ンツ、こちらは接客係。げ、現在VIPはとても上機嫌で、ンンウ』

お客様と言うのは盗聴された場合を想定してサスケの事を隠す為の暗号なのだが、通信機から聞こえて来る護衛の暗部の声が途切れ途切れになる事にハヤテは違和感を感じてしまう。

「どうしました接客係？通信が乱れています但し通信機の故障ですか？」

『も、問題ないわ。VIPの機嫌を損ねたくないから仕事に戻つ、るわ』

声の主が同じく護衛のアンコに替わったが声の途切れは変わっておらず、ハヤテは再度確認を取ろうとするがそれを最後に通信は途切れてしまい、再度部屋に結界が覆われてしまつて再度通信が不可能になってしまう。

「どうしたんじやハヤテ？何か気になる点でもあったのか？」

「ゴホツ、いえ別に。ただ、妙な胸騒ぎがする様な……ゴホツゴホツ」

大蛇丸攪乱の為に塔内の複数箇所で張り巡らされている結界を煩わしく思いながら、ハヤテは通信機から聞こえて来た恋人の声をもう一度聞きたいと思うのであった。

「VIPは上機嫌か。それは自分も同じじゃないのか夕顔」

「アンツ、酷い子ね。私とハヤテの関係を聞いておいてあんな通信させるなんて」

そう言いながらも体を弄る俺の手を払いのける事もせず、暗部の面を部屋の隅に投げ捨てている夕顔は素顔を晒して俺に唇を近づけて合わせてくる。

「アむう、んぐぐつ、ぷはつ。フフフ、酷いと言ったらこつちもよ。この味を知つちやつたらもう大好物だった甘い物だけじゃ満足出来なくなつちやたわ」

文句を言いつつも俺が与え続けた液体の味が気に入ってしまったアンコは俺の前に跪くと、妖艶な顔をして新しく好物になってしまった液体を早く飲ませて欲しいと頭を前後させる。

「アッコは少しがつつき過ぎるぞ。ほら、夕顔にも分けてやれよ」

二次試験終了まで残り二日。俺の処遇がどうなるかは分からないが、今この場で出来る事である一族復興作業をする為、この部屋で馴染みの光景となつた重なり合うアッコと夕顔に俺の下半身を押し付けるのだった。

中忍試験編その4

中忍選抜二次試験のサバイバル演習もいよいよ五日目の最終日を迎えた。

「いよいよ今日で軟禁生活も終わりか。俺の扱いはどうなるんだろうな」

この試験に突破した受験者は次の第三次試験に進む事になるのだが、俺は今現在大蛇丸に狙われている身という事も有り、このまま試験を続行するか棄権させるかを本曰言
い渡される事になっているのだ。

「私としては三代目が続行させる判断を下されたとしても棄権して欲しいわ」

大蛇丸の恐ろしさを身をもって知っているアンコは俺の身を案じてそう言うってくるが、俺も大蛇丸の執念深さは分かっているつもりなので、この場を逃げられたとしても決して諦める事などせず、後々も俺の体を手に入れるまで狙い続けるだろうと思つて
いた。

「アンコの気持ちは分かるけどな。でも、いつまでも逃げる訳にもいかないしな」

「アンツ、だ、駄目よサスケ。そろそろ結果を解く時間に、ンツ」

アンコの背後に回り込んで乳房を揉み解しながら、呪印に込められた大蛇丸の意思に向かつて絶対お前の思い通りにならないという意思を込めて、俺は呪印を刻まれたアン

この首筋を甘噛みをする。

「二人とも、間もなく結果が解けますのでそこまでにして下さい」

仕事モードに戻った夕顔に咎められたので最後までする事は無かったが、俺は今後も一族復興を続ける為にも何としても大蛇丸に打ち勝とうと決心を固め、五日ぶりに部屋の外へ出た俺はすぐさま三代目が待つ部屋へと連れて行かれる。

そして三代目から大蛇丸の行動が予測しやすくなるという観点から、俺はこのまま試験を続行させるという事に決まった事を告げられた。

その後、別室で待機していたサクラ達と合流すると俺達は試験を突破した他の受験者達と共に試験官である月光ハヤテから次の試験内容についての説明を受け始めた。

「ゴホゴホ、ではこれから二次試験を突破したこの6チームで第三次試験予選を執り行います。ここからは個人戦になりますので自分以外の全員が敵になると思ってください」
「試験の予選? どうしてそんなのやらなきやいけないんだ」

受験者の質問に淡々と追加説明をするハヤテは最後に予選を棄権する者はいないかと尋ねる。

ここまで来て今更そんな事をする奴はいないとこの場に居る大半の者が考えていたであろうが、大蛇丸の部下である薬師カブトは体調不良を理由にして棄権の意思を伝え

る為に挙手をした。

「そうですか。他に棄権する人はいない様ですので、この場に残った17名で1対1の実戦形式の個人戦を行います。」

「ちよつと待った。ここに残った人数は奇数だから1対1で戦うと一人余る事になるんじゃないのか？」

テマリの質問にハヤテは、これから順次ランダム選ばれる組み合わせ発表後に残った者はその時点で予選を突破する事になると告げ、俺はその一人に選ばれる事を少しだけ願った。

「では第一回戦の組み合わせを発表します。最初の一組は……うちはサスケと赤胴ヨロイですね」

「ま、そうラッキーが起きる訳ないか」

それでも原作通りの組み合わせになった事はある意味ラッキーなので、俺はヨロイと向き合いどこまで手の内を晒すか思案する。

「サスケくん!!頑張つてね!!」

「さ、サスケ君……怪我だけはしないでね」

（うう、私も応援したい。でもリー達の手前声出して応援する訳にもいかないし）

「アイツがうちはサスケか……結構男前じゃない」

サクラ達この場に居るくノ一の応援を背中に感じていると、この状況を気に入らないのかナルトは相手のヨロイを応援し始めた。

「クソオー!!そっちの頭巾サンングラス!!サスケなんてぶっ飛ばしちまえてばよ!!」

「そうだそうだ!!サスケのスカした顔を殴りとばしてやれ!!」

ナルトに便乗する形でキバもヨロイの応援をし始めるが、ナルトよりは周りの空気が読めるのかサクラ達が本気で殺気を向けている事を察して赤丸と共にナルトの側を離れて行った。

「チツ、耳障りなガキ共め。言われなくてももうちはサスケは俺の手で倒してやる」

ナルトがサクラ達に袋叩きに遭っているのもお構いなしにハヤテから試合開始の合図が告げられると、ヨロイは先手必勝とばかりに走り出して俺のチャクラを吸い取る為に手を伸ばして来る。

「決めた。やっぱりお前を倒すならコレじゃないとな」

ヨロイの手が俺の体に触れる寸前に顎を蹴り上げると、体ごと宙に浮いたヨロイをリーからコピーした影舞葉でその背後に追尾する。

「ま、まさかアレは僕のっ!?!」

リーの驚愕する顔を視界の端で確認しながら、俺は包帯で敵と自分を括り付け回転しながら落下する表蓮華とは違い、地面に落下しながら連続で打撃を与える体術、獅子連

弾をヨロイの肉体に叩き込んだ。

サスケがヨロイを数秒で沈めて予選を突破する中、リーはサスケの体術が自分の動きをコピーして更にアレンジを加えた技を繰り出した事に驚きと嫉妬を感じていた。

「サスケ君、あの時僕の体術をコピーしたんですね。そして蓮華を自分流に改良までするなんて」

「正直言つて俺も驚いた。だがリー、俺の見立てに鼻根が無ければ動きのキレとスピードは本気のお前の方がうちはサスケより上だろう」

中忍試験が始まる直前の勝負を受けたのはこの為だったのかとリーは悔しがるが、一緒に試合を観戦していたネジは一連の動作を冷静に分析しており、リーが錘を外して奥の手を使いさえすれば体術ではサスケに優るであろうと告げた。

「それでもシヨックな事に違いありません。サスケ君、この借りは必ず本戦で返させて貰います」

サスケとの再戦を熱望するリーを尻目に、ネジは次の試合の組み合わせを見てまだ自

分の出番では無い事を確認する。

「次の試合は油女シノと秋道チョウジのルーキー対決か。うちはサスケ同様、早めに試合を終わらせて欲しいものだ」

第二試合の結果はシノの秘伝忍術である奇壊蟲がチョウジのチャクラを喰い尽してしまい、チョウジは倍化の術を使う事すら出来ずに敗北してしまった。

続く第三試合は砂隠れのカンクロウの扱う傀儡が対戦相手の劍ミスミの全身の骨を砕いて勝利を決め、第四試合の山中いの対春野サクラの試合が始まるうとしていた。

「サクラ、悪い事言わないからアンタも棄権したら？」

「冗談じゃないわ。予選を勝ち残るのは私よ!!」

試合の序盤はサクラが幻術を駆使しているのを翻弄するが、単純な戦闘面で決め手が欠けているという弱点から一瞬の隙を突かれて逆転を許してしまい、最終的に両者ダブルノックアウトの勝者無しという結末を迎えてしまう。

その後テンテンに勝利したテマリとキバに勝利したナルトが本戦出場を決め、残るはネジ、ヒナタ、シカマル、リー、我愛羅の5名となり第七試合の組み合わせが電光掲示板に表示される。

「ヒナタ様、アナタでは俺には勝てない。無意味な真似は止めて直ぐに棄権するべきだ」

「そうかもしれない……だけど、私もいつまでも守られるだけなのは嫌だから」

互いに同じ柔拳の構えをして対峙する二人に試合開始の合図がされると、ヒナタは柔拳対決をするかと思えば一旦距離を取って印を結ぶと分身の術を発動させてネジを攪乱しようとする。

「なんの真似だ。俺がその程度の分身を見抜けないとも思ってるのか」

予想外のヒナタの行動に思わず形だけの敬語を止めたネジは分身に脇目も振らずヒナタに近付こうとするが、それに臆することなくヒナタは腰のホルダーから手裏剣を取り出してネジ目掛けて投げつけた。

「あくまでも距離を取って戦うつもりか。日向宗家の人間が柔拳を捨てるとはな」

「宗家なんて関係ない。私は自分が今まで身に付けた技や術で戦うだけ」

次々に飛来する手裏剣や苦無をネジは最小限の動きで交わしてヒナタを挑発するものの、それでもヒナタは接近戦を避けて一定の距離を保ちネジに近付こうとはしない。

「無意味な真似をいつまでも続けるとは、それでも宗家の人間ですかヒナタ様」

「ネジ兄さん、柔拳に……宗家に拘ってるのはアナタの方ではないの？」

ヒナタに逆に挑発されたネジは業を煮やして強引に詰め寄り、ヒナタの点穴を突く為
にチャクラを込めた二本貫手を突き出す。

しかし、それを待っていたのかヒナタは足に込めたチャクラを一気に放出してネジに体当たりして密着すると、間髪入れずに臍の下に掌を押し付けてチャクラを放とうとする。

(休止の点穴……ここっ!!)

「ガハッ!? く、クソッ!!」

決まれば一撃で相手動きを止めて戦闘不能にしてしまう休止の点穴に柔拳を叩き込んだヒナタだったが、正確な位置から僅かにズレてしまったのか、吐血はしたもののネジの体の動きを止める事は出来なかつた。

「そんなつ、なら今度こそ確実に」

「遅い!! 八卦六十四掌!!」

ヒナタが再度点穴を突くよりも一瞬早くネジはヒナタの全身64カ所の点穴を突く秘技、八卦六十四掌を繰り出すと、ヒナタはそのまま前のめりに倒れて動かなくなってしまう。

「はあはあはあ……少し甘く見過ぎていたか」

試合終了の宣言をされた後医療班に連れて行かれるヒナタを見つめていたネジは背後に殺気を感じて振り向くと、そこには赤い目をしてネジを見据えるサスケの姿があった。

(フー……危ない危ない。思わず飛び出しそうになつたぜ)

精神を落ち着かせる為に一旦写輪眼から通常の目に戻した俺は、次の試合が始まるまでの間これまでの試合で観察した各受験者の戦いぶりや使用した術を頭の中で反復する。

今のところコピーする候補としてはカンクロウが傀儡を操るのに使うチャクラ系とネジの八卦六十四掌であり、本来写輪眼では点穴の正確な位置は視えないのだが、俺は今までの経験でチャクラの流れや色の濃さでおおよそだが点穴の位置を判別する事が可能になっていた。

(それも白眼を持つヒナタが居たからこそ、細かい補正が出来て身に付けられた技術なんだよな)

俺がサスケになつて一番付き合いが長い事もあつてか、ヒナタは俺にとつて最も親しい間柄と言つても過言ではないだろう。

勿論サクラ達も優劣を付けられないくらい親しい関係だと言えるが、ネジに痛め付けられて倒れる姿を目にした際に、もし万が一ヒナタが目の前で死んだとしたら俺は万華

鏡写輪眼を開眼する事は間違い無いだろう。

そんな事を考えてる内に第八試合の組み合わせが発表され、ここまでの試合経過から予想通り我愛羅とリーが戦う事になり、俺は再度写輪眼を発動させた。

「ゴホッ、では第八試合のロック・リー君と我愛羅君の試合を始めます」

中忍選抜試験編。 本戦準備期間

ロック・リーと我愛羅の試合が始まったその頃、二人の忍者が木の葉の里を抜け疾走していた。

「まさかアナタも大蛇丸様の部下だったとは思わなかったわ。只のうだつの上がらない下忍じゃなかったのね」

一人は第二試験初日にサスケに敗北し、その後大蛇丸の情報を聞き出す為に捕らえられていた音隠れの忍者キン・ツチ。

そして彼女を暗部の監視から救い出して共に行動しているのは本戦予選を棄権した後、姿をくらませていた大蛇丸の側近と言える立場の薬師カブトであった。

「それにしても木の葉の暗部連中を一人で片づけるなんて凄いわね。私を助けてくれたのは大蛇丸様の命令なの？」

「そうでもないよ。それに僕が受けた命令は君の救出じゃないんだよね」

そう言い終えたカブトは突然キン・ツチに詰め寄り髪を掴んで引き倒し、そのまま地面に押し付けてメスを突きつけた。

「ガハッ!? な、何をするのよっ!!」

「決まってるだろ。任務に失敗して更には木の葉の連中に大蛇丸様の情報を漏らした無能者を始末する。それが僕が大蛇丸に命じられた任務だよ」

淡々とした口調でそう告げるカブトにキン・ツチは恐怖を感じ逃げようとするが、首元に突き付けられた冷たいメスの質感に逃げる事は不可能であると察してしまう。

「た、助けてっ、もう二度と失敗しないから！何でもするから見逃して!!」

「君はもう用無しなんだよ。次のチャンスは生まれ変わった後に期待だね」

問答は終わりとばかりに振り上げられたカブトの腕にもう駄目だとキン・ツチは目を閉じると、メスはキン・ツチの黒い髪を切り裂き深々と地面に突き刺さった。

「ヒい!!……えっ?」

「なんてね。実は君を始末する前にもう一度だけチャンスを与える様に仰せつかったんだよ」

状況が呑み込めず呆然とするキン・ツチに笑いかけながら、カブトは新しいメスを取り出して残りの髪を断裁していく。

「な、何がどうなってるのよ。それに私の髪を勝手に切るなんて」

「髪は女の命とでも言いたいのかい? だったらこの髪が君の身代わりになって死んでくれたと思わなきゃ」

ちよつと臭い台詞だったかなと苦笑するカブトは、散髪し終えたキン・ツチを立たせ

るとその姿を確認する。

「髪型はこんな感じかな。身長は君の方がやや高いけど、まあ誤差の範囲内だね」

「い、いい加減教えてくれたって良いでしょ？私をどうするつもりなのよ」

恐る恐る目的を尋ねるキン・ツチに、カブトは危険を冒してまで彼女を助けた本当の理由を説明しだした。

「いいかい？君は僕の整形手術を受けた後、今言った人物に成りきる為の訓練を受けて貰うよ」

今度こそ失敗は許されないと脅しをかけるカブトに、キン・ツチは先程の恐怖を思い出して首を縦に振る事しか出来なかった。

我愛羅の勝利で幕を閉じた第八試合の後、運良く予選を免れたシカマルを含めた俺達本戦出場者は三代目から中忍試験の本来の目的の説明を聞かされていた。

「一ヶ月後、この場に残った8名による中忍選抜第三次試験の本戦を執り行う。各々限

られた時間を有効に活用し、精進するなり休養するなりして貰いたい」

「それじゃこの箱の中に有る紙を取ってね。一人一枚ずつよ」

アンコが持つて来た箱の中からトーナメントの組み合わせを決める紙を取ると、そこには原作通りの流れなら4と書かれていた。紙には1の文字が記されていた。

(俺が1?すると相手は……やっぱりコイツか)

俺の最初の相手となる人物は2と書かれた紙を引いた日向ネジであり、そして俺に代わって我愛羅と戦う羽目になった相手はナルトであった。

「ゲゲツ!?俺の相手はゲジマユを倒した砂のアイツかつてばよ!」

「俺の相手はあの女かよ。メンドクセーな」

トーナメントの組み合わせに分かり易く態度に表すナルトとシカマルとは対照的に、俺と戦う事になったネジは冷静な態度を変える事無く俺に視線を向けて来た。

(まあ好都合か。ネジにはいずればヒナタの敵討ちしてやりたいと思つてたからな)

試合に私情を挟むべきではないのだが、先に私情を持ち込んだのはネジの方なので、俺は一ヶ月の間に何としてもネジの八卦六十四掌とリーの体術を完全にマスターしようとして決意する。

「では、これにて解散とする。みんな御苦労じゃった」

三代目の解散宣言で受験者達はそれぞれ本戦対策の為に我先に塔を出て行くが、俺は

事前に三代目に塔に残る様に指示を受けていたのでその場に残って次の指示を待った。

「さて、サスケには今の状況を踏まえて他の受験者とは別の指示をせねばならんな」

「前置きは良いから早く指示を出してくれよ。まさか本戦までの一ヶ月間またどこかで軟禁されるって言うんじゃないだろうな？」

俺の問いに三代目は心配無用と言って紅とアンコ、それに暗部の面を被っている夕顔に面を取る様に促し、本戦が始まるまでの間俺の護衛として24時間共に行動する様にと指示を出した。

「本当ならカカシやガイ、アスマ辺りにも護衛に就かせたかったのじやがな。彼らの担当する下忍が本戦に出場するのに別の班員のお主に付きつきりでは、それはそれで問題が有ると意見が出ての」

ならば他の忍者を護衛に充てれば良いのではという余計な問いかけはせず、俺は都合の良い護衛のメンバー構成に感謝して、修業を行う前に紅達と共にヒナタが入院している病院へ見舞いをする為に向かう事にした。

そして病院に辿り着くと辺りは騒然としており、何があつたのかアンコが看護師達に尋ねた所、俺が生け捕りにしていた音隠れのキン・ツチに逃走され、それを追跡していた暗部を含めた分隊が全滅してしまい生き残った重傷者が緊急搬送されたと聞かされ

る。

「クッ!!こんな被害が大きくなってるのに試験を中止に出来ないなんて!!」

苛立ちを隠せず病院の壁を殴りつけるアンコだったが、俺は何故大蛇丸がキン・ツチを態々助け出したのかと疑問を感じてしまう。

何か目的が有ったのか現段階では分かる筈も無く、死者や行方不明者の中には日向一族の忍者も含まれていると知り、ヒナタにそれを伝えるかどうか苦悩しながら病室の扉を開けるのだった。

「よし、取り敢えず手術は9割終わりだ。コレが君の新しい姿だよ」

大蛇丸のアジトでカブトの整形手術を受けているキン・ツチは、鏡に映る自分の顔がまるで変化の術を使用したかと思える程に違和感なく変わっている事に驚愕する。

「こ、コレが私……えっ？声まであの女と同じになってる」

「当然だよ。声帯も弄ったから自然と彼女と同じ声を出せるに決まってるさ」

唯一の違いはその眼だけだねと呟くカブトは、時計を見ながら手術を完成させる物が届くのを待った。

「待たせたわねカブト。さあ、コレを早く移植しちやいなさい」

「お、大蛇丸様っ!?こ、この度は私にチャンスを与えて頂き本当にありがとうございませう」

手術室に現れた大蛇丸に感謝の言葉を伝えるキン・ツチだったが、当の大蛇丸はそれを無視してカブトに手術を完了させる様に指示を出し、キン・ツチは再度麻酔を打たれ意識を失ってしまう。

「それにしても良く手に入りましたね。移植可能な白眼を手に入れるには宗家の人間がらしか無理でしたよね？」

「そうでもないわ。分家の白眼が呪印により封印されるのはソイツが死んでからなのよ」

「つまり、この白眼は生きたまま日向一族の分家の眼を取り出したんですか。相変わらず目的の為なら手段を択ばない方ですね」

容器から白眼を取り出してキン・ツチに移植するカブトは、何故本人を使うのでは無

くこんな回りくどい真似をするのかと大蛇丸に訊ねた。

「理由は特に無いわ。強いて言うなら、木の葉にて最強の日向一族の宗家を本気で怒らせたくなかったからかしら？」

冗談なのか本気なのか分からない大蛇丸の返答に、カブトはそれ以上深く追求する事を止めて白眼の移植手術を終えると、キン・ツチが目覚めるのを待ちながら別の内容の質問を大蛇丸にする。

「しかし、本当にサスケ君は騙されてくれますかね？もし失敗したら僕の苦労は水の泡ですよ」

「それはこの捨て駒の演技力次第ね。それにもし駄目だったら、その時は本物を使うだけよ」

含み笑いをする大蛇丸の姿に、カブトはキン・ツチを整形して利用する本当の理由は偽物を使って相手を騙す事が好きな大蛇丸の悪癖なのではないかと思っただが、それを大蛇丸に確認してしまうと気分を害してしまいそうなので自らの胸の内に留めるのみにする。

「ああ楽しみだわ。柱間細胞に呪印、それにあの眼を開眼したサスケ君を手に入れるその時が」

サスケに転生を果たした自分の姿を想像して舌舐めずりをする大蛇丸の姿を見て、カ

ブトは本当に厄介な人物に気に入られたとサスケに僅かだが同情するのであった。

中忍選抜試験編。準備期間折り返し

中忍選抜試験本戦まで残り二週間。

うずまきナルト、奈良シカマル、日向ネジ、油女シノ、我愛羅、カンクロウ、テマリ、そしてうちはサスケの八名はある者は修業に勤しみ、ある者は休養する等して本戦への備えをしていた。

「テンテン、もう一度全方位からの攻撃を頼む」

「分かったわ。行くわよ」

木の葉隠れの里にある演習場の一つでは日向ネジが柔拳の修業に勤しんでいた。

ネジの修行に協力しているテンテンが巻物を広げて多数の忍具を飛ばすと、ネジは独学の未会得した本来は日向宗家にも口伝される技の構えをする。

「八卦掌・回天!!」

全身からチャクラを放出して飛来する忍具を受け止め、更に体をコマのように円運動させて弾き返すこの技は、我愛羅が使用する砂の防御に比類する絶対防御と言える奥義であり、回転を止めたネジの体には僅かな掠り傷すら付いていなかった。

「流石ね。正に絶対防御の技だわ」

「恐らくうちはサスケは俺の柔拳を警戒して距離を取った戦いを仕掛けて来るだろう。奴の中距離系忍術を全て無効化し体術勝負に引きずり込んで日向こそ木の葉最強だと証明してやるさ」

そう言い終えるとネジは宗家に伝わるもう一つの奥義、八卦六十四掌の構えをすると目の前にイメージしているのであろう想像のサスケに向かって技を打ち込んだ。

（確かに並の忍術でネジの回天は破れそうも無いわね。後でサスケ君に報告しなくちゃ）

身近にスパイが潜んでいるとは夢にも思わず、ネジは己の手札や本戦での戦闘プランを晒し続けるのであった。

「ねえシカマル、そろそろ修業した方がいいんじゃないの？」

「なんだよチョウジ、お前までお袋みたいな事言いやがって」

修行に勤しむネジとは対照的に、準備期間が半分過ぎても休養と称して今日も公園のベンチでダラダラと寝て過ごしているのはシカマルだった。

「でもさ、シノもナルトもどこかで修業してるらしいよ。今頃シカマルの対戦相手も修

業してゐる筈だし、このままだと一回戦で敗退しちゃうかも」

「別に構わねえよ。大体俺が中忍なんて似合うと思うか？」

ま、女に負けるのはちよつと情けないけどなど言つて目を閉じて寝息を立てるシカマルに対し、チョウジは確かにあのテマリつてくノ一強そうだもんねと言いながら新しいポテチの袋を開けて食べ出すのであつた。

「はあ……木の葉崩しか。本当に音の忍者と組んだだけで成功するのか？」

本戦に備えた修業をしていたテマリは我愛羅とカンクロウと共に担当上忍のバキに呼び出され、中忍試験に乗じて計画された木の葉崩しの詳細を告げられたのだった。

「確かに我愛羅の中のバケモノの力は凄まじいが……ん？アイツは確か」

考え事をしながら木の葉の里を歩いていたテマリは、いつの間にか南賀ノ川下流の河原へと来ており、何故こんな場所に来たのかと踵を返そうとした矢先に川の上で佇む人影が目に入った。

そこに居たのはうちはサスケが中忍以上であろうくノ一と対峙しており、テマリが様

子を伺っている中二人の組手が始まった。

暫くその訓練を見ていたテマリだったが、サスケの動きが中忍試験本戦予選で見た人物の動きと同じ事に気付くと、その再現度の高さに驚嘆してしまう。

「あの動きは……我愛羅を追い詰めたロック・リーって奴の体術か。それに今度は日向一族の柔拳を完璧に模倣してる」

それぞれの体術の専門家が見ればまだまだ完全に模倣したとは言えないのだが、それでも剛拳と柔拳を組み合わせたサスケの体術は組手の相手をしている夕顔を追い詰め河原に組み伏せた。

「凄いわね。これでも暗部の中では体術に自信があつたのに」

「何言ってるんだ。夕顔が本気だったら俺の方が組み伏せられてたぜ」

「そう言いながらサスケは押し倒した夕顔の胸に手を伸ばして揉み始めた。」

「アツ、駄目よサスケ君。今はこんな事してる場合じゃないわ」

「修業中でも少しくらい息抜きは必要だろ」

窘めようとする夕顔の口を口で塞いだサスケは慣れた手つきで服を肌蹴させて下半身を密着する。

「なっ、なっ、何をやってるんだあの二人はっ」

突然目の前で始まった情事にテマリは顔を赤くし立ち去ろうとするが、先程までの組

手とは比較にならない程に翻弄される夕顔の姿に魅入られてしまい、一瞬サスケが一瞥したのも気付かず食い入るように二人の行為を見続けるのだった。

サスケと夕顔の情事が一段落して修業を再開し始めると、テマリも我に返ったのか逃げる様にその場を立ち去り、木の葉の里市街に戻る前に頭を冷やそうと森の中を歩いていった。

「まったく、私とした事があんな覗き魔みたいな真似をするなんて」

忍者である事を忘れて一人の女として乱れていた夕顔の表情を思い出してしまいうテマリだったが、茂みの奥から話し声が聞こえて来た事で瞬時に思考を忍者へと切り替えた。

「この声は確か二次試験の女試験官と……うちはサスケだと？」

河原で修業してる筈のサスケの声が何故聞こえるのかと疑問に思ったテマリは気配を消して話し声がする方向へ足を進めると、そこで見た光景に思わず息を呑んでしま

「あんっ、はあん、さっ、サスケえ、もう十分でしょお」

「いや、駄目だ。まだ俺の思い通りに動かせていないからもう少し続けるぞ」

テマリの視線の先ではアンコが自らの乳房を揉みだきながら喘いでおり、少し離れた場所に立つサスケが指を動かすとそれに合わせてアンコは自らの胸を揉むだけでは無く、太もものつけ根にも手を伸ばして指を前後に動かして更に喘ぎ声を発していた。

アンコの妖艶な姿に目を奪われたテマリはこれも状況確認の為だと自分に言い聞かせて観察を続けた。

少しでも気付かれない様にと四つん這いになって茂みの陰に隠れて覗くテマリは、いつしか自分も自らの手をアンコと同じ様に体の各所に押し当てて動かし始めた。

「アツ、アツ、アツ、お願いサスケえ、これ以上は我慢が出来ない」

「傀儡の術の練習台になるって言ったのはアンコだろ。ほら、こうしてやれば」

サスケの指の動きに合わせて乱れ喘ぐアンコの姿は、テマリが知る死の森の危ない試験官と同一人物とは思えない姿であり、一際大きな嬌声を発して崩れ落ちるアンコと同時にテマリも体を震わせた。

「おいおい、本体の俺が神社で待つてるってのにこんな所で気を失うよな」

「んぐっ!! やっ!! 待つ、今は駄目え!!」

体が思う様に動かず突つ伏してしまったアンコの背後から伸し掛かり腰を動かすサスケは、呼吸を乱して顔を赤くさせたテマリに見せつける様にしてその動きを激しくさせるのだった。

「はあはあはあ……おかしい。私はどうなってしまったんだ」

フラフラとした足取りで森の中を進むテマリは、いつしか南賀ノ神社の境内に足を踏み入れていた。

まるで何かに誘導されている様な感覚に陥っていたテマリだったが、火照った身体と生まれて初めての絶頂を体験した事で冷静な判断力は殆ど失われていた。

「そう言えばさつき神社で本体が何とかって言ってたけど」

ふらつきながら神社の本殿に進んだテマリは心の片隅で中を覗くなど警告を発している事を理解しつつも、飛んで火に入る夏の虫の如く本殿の中を覗き込んだ。

「知らせてくれて助かったぜ。この調子でネジの情報提供頼むぞ」

「アッ、アアアッ!!ま、任せてっ、アッ、はああ、アアアッ!!」

ネジの修業経過を報告しに来たテンテンの胸を揉みしだきながら、俺は幻術で誘導されたテマリには気付いていないフリを続けた。

自然に見せつける様にしてテンテンの乱れたチャイナ服の胸元を全開にし、ピンク色の自己主張をしている突起を指先で転がすと、それに合わせる様に神社の外からも小さく喘ぎ声が聞こえてきた。

「クッ!!ね、ねえサスケ君。これからも情報を持って来たらこうしてくれるのよね」
「ああ、報告してくれたらその都度この謝礼は弾ませて貰うからな」

壁に手を着いたテンテンの腰を掴んで下半身を前後させ、俺はそろそろ頃合いと判断して壁の向こう側で自らの体を弄っているであろうテマリに声を掛けた。

「いつまでそこで覗いてるつもりだ。俺に用が有るならサッサと出て来い」

テンテンに密着した下半身が震えると同時に、俺の影分身に拘束されて神社の中に足

を踏み入れたテマリは恐れよりも期待に満ちた表情を浮かべている様に見えた。

「お前、本当に才能無いのお」

「うるせえってばよこのエロ仙人!!お前の教え方が悪いんだってばよ!!」

テマリが南賀ノ神社に連れ込まれたのと粗々同時刻、ナルトは蝦蟇の口寄せの術に失敗してオタマジャクシをよびだしているのであった。

中忍選抜試験編。サスケの木の葉崩し対策

テマリをここまで誘導した目的、それは本戦で発生する木の葉崩しに関しての対策の一環だ。

木の葉崩しに関しては転生者である俺は既に知っている事ではあるが、それを三代目達に怪しまれず事前に説明し信じ込ませる為、テマリから情報を聞き出したという事にしたかったのだ。

「お前は砂隠れのテマリだったな。俺に一体何の用だ」

絶頂して気を失ってしまったテンテンを床に寝かせると、俺個人としては情報を聞き出す事以上に重要な目的であるうちは復興の協力者にするべく、影分身に拘束されたテマリに近付き服の上から胸を鷲掴みにする。

「それは、あうっ、止めろっ、手を放せえ」

テマリは先程まで自分で与えていたものとは比べ物にならない刺激に身を振らせて逃れようとするが、影分身の羽交い締めに加え写輪眼の金縛りを掛けた肉体では逃れられる筈も無く一方的に胸を揉まれ続けた。

そして服の上からでも分かる程に硬くなっている突起を指先で確認し、引っ掻く様に

弄りながら木の葉崩しに関する情報を聞き出そうとする。

「言いたくないなら無理矢理にでも聞き出すぞ。砂隠れが企んでる事も含めてな」

「どうしてその事を!?! ひぐつ!!」

幻術に加え肉体に与えられる快樂で思考力が鈍っているテマリは俺の鎌掛けにアツサリと口を滑らせ、態と強く摘まんだ突起の痛みに耐えかね悲鳴を上げてしまう。

「その様子だと本当に砂隠れが何かをやるうとしてそうだな。素直に教えてくれれば悪い様にはしないぜ」

「ば、バカな事を言うな。私は何も知らなつ、むぐつ!?!」

痛みで若干冷静さを取り戻したテマリに不意打ち気味に唇を奪うと、舌を捻じ込ませて啞内を蹂躪する。

それと同時に胸への攻めを再開させると、今度は先程までテンテンとしていた時の様に快樂を与える事を重視した荒々しさと繊細さを不規則に組み合わせた手つきで揉みしだく。

「んむつ、ぷあ、はう、あああああつ!!」

強烈な快樂を受けたテマリは一際大きく嬌声を発して力なく崩れ堕ち、俺は影分身を解除するとそのまま覆い被さり、服を剥ぎ取りながら露出した胸に舌を這わせ、足の付け根の奥を指でかき乱すなど全身隅々を攻め続けた。

「コレが最後通告だ。お前の知ってる事を全て吐くんだ」

「はあ、はあ、はあ……す、砂の忍者を、舐めるなあああああんっ!!」

全身隅々を実際に舐められたにも関わらず強情なテマリに下半身を密着させて前後運動を始めると、その刺激の強さにテマリは僅かに残った気丈さを削り取られる様に俺の動きに合わせて喘ぎ乱れだす。

「う、うくん……つてサスケ君、その女はまさか?」

「やつと起きたのか。でも丁度良かったぜ」

これまでの経験上もう一押しだと判断した俺は、失神から目覚めたテンテンにテマリの上に覆い被さる様に指示すると、重なった二人の間に下半身を押し込んだ。

「アアアッ!!こんな状態でまた顔を見合わせるなんて思わなかったわ」

「うアツ、ヒツ、そ、それはこっちの台詞だあ!!」

中忍試験本戦予選で対峙した二人が糸纏わぬ姿で重なり合い、互いの胸の突起を擦り合わせながら俺に蹂躪される光景は本戦予選の場にいた全ての人が想像もしなかった姿だろう。

もう暫く堪能したい所だが俺はテマリを完全に屈服させる為、交互に密着させていた下半身をテンテンのみに切り替え激しく密着と剥離を繰り返す。

「アツ、アツ、アツ、サスケ君っ、凄く激しい」

「うううっ……な、何故私には何もしないんだ」

俺が動きに合わせて目の前で喘ぐテンテンを見て、テマリが自分が蔑ろにされてると感じてるのは明らかだ。

「くく、その言い方だと自分にもして欲しいって求めてる風に聞こえるぜ」

「なっ!?!ち、違う!!私……私はアアアアアっ!!」

俺の問い掛けに動揺を隠せないテマリだったが、不意打ち気味に押し込みを再開させた数十分後にはテンテンと共に左右から俺の下半身に舌を這わせて一族復興の素を求めて来るのだった。

「全く、人の事を言えた義理じゃないけど自分の置かれた立場つてのを少しは自覚して欲しいわ」

「自覚してるさ。だからこそこうして俺なりのやり方で修業や準備してるんだぜ」

「アツ!!アアツ!!ま、また来るっ!!熱いのが流れ込んでくるうううっ!!」

本殿に戻つて来たアッコと夕顔は、一糸纏わぬ姿で俺に跨り身体を上下運動させるテマリの姿を確認すると、自分達もこの光景を作るのに一役買ったとはいえ胸中複雑と云った様子だ。

「どこがよって言いたい所だけど、実際に成果を得られてるのよね」

「影分身に技術的な修業を分担させて経験値を蓄積し、本体はスタミナや筋力トレーニング等の肉体的な修業に集中する。理屈は理解出来ませうけど方法が特殊過ぎですね」

倒れ伏したテンテンに毛布を掛け呆れ混じりに俺の修業法を評価する二人に対し、俺はテマリを上に乗せたまま起き上がりると深く密着したまま抱かかえて二人に歩み寄って行く。

「そんなに言うなら今日はこっちの修業に付き合ってくれなくても良いぞ。河原と森の中で影分身相手に修業してたし十分だろ？」

「そ、それとこれとは話が別つ、アーンツ」

「紅さんが里を離れてる今つ、私達はサスケ君のやる事に全て協力する責任が有ります」
テマリをチャクラの吸着と密着のみで支えつつ、空いた左右の手でアッコと夕顔の身体をコントロールすると、俺はもう一つの木の葉崩し対策の為に秘密裏に木の葉を離れている紅が目的を果たしている事を願った。

尚、テマリから聞き出した情報をアッコと夕顔に伝えるのが修業を終えた後になってしまったが、当日になんの事前情報もなく直面してしまうよりは手遅れになって無いだろうと、心の中で誰に対しても無く言い訳をするのだった。

サスケが木の葉で独自の修業に勤しんでいた頃、紅は木の葉の里を離れ火の国南西部に栄える大繁華街、短冊街を訪れていた。

「この街にあの方がいらっしやるのね。何としても見つけ出すわよ」

紅が短冊街にやって来た目的、それは大蛇丸や自来也と共に伝説の三忍と呼ばれるくノ一、綱手を探し出す事だった。

三代目からサスケの護衛を任されていた紅はこの状況で綱手捜索をする事に当初は難色を示した。

だが、この件を任せられるのは紅しか居ないと普段以上の熱烈な復興作業を交えた説得をサスケから受け、同じく護衛を任されたアンコ達にサスケの身の安全を託してこの街にやって来たのだ。

「噂によると数日前からこの街に滞在してるそうです。二手に分かれて聞き込みしますか？」

「そうね。白さんが手伝ってくれたお陰でここまで絞り込めたんだから何としても探し

出すわ」

紅の隣に立つのは波の国でサスケの協力者となり、現在空区の猫バアの元に身を寄せ
ている白であった。

白は中忍試験が始まる以前から綱手に関する情報集めをサスケに頼まれており、猫バ
アの店を訪れる客から得た情報を元に紅の綱手捜索に協力していたのだ。

「ところで僕は似顔絵でしか綱手さんの顔を知らないのですが、紅さんはご存知ですか
？」

「一応ね。でも綱手様は術で様々な年齢の姿になつてゐるそうだからまず先に探し出すの
は」

紅達が綱手探しを行おうとした矢先、短冊街に怒鳴り声が響き渡った。

「チクシヨウ!!あの女どこに行きやがった!!」

「博打の負けを踏み倒しやがって!!伝説のカモを何としても捕まえる!!」

人相の悪い男達が血相を変えて駆け回る姿を目撃した事で、紅と白は綱手がこの短冊
街に居ると確信を持つ。

だが、ツケを踏み倒したとの話を聞いた事で綱手がこの街を離れ行方をくらませる可
能性が高くなった事も認識していた。

「紅さん、急いで綱手さんを探し出さないと」

「分かつてるわ。年齢を変化させてる綱手様を見つけるには本人よりも……居たわ」
紅の視線の先には黒い着物を着て子豚を抱かかえた女の姿があった。

「あひい、だからあの時全額賭けるのは無謀ですって言ったんですよ」

「相変わらずシズネは博打の醍醐味を分かかってないね。博打はチマチマ小銭を賭けるより大金を賭けてこそ価値が有るんじゃないか」

背中に賭の文字を刺繍した羽織を羽織った金髪の女は付き人の女にそう主張するが、それで負けて全財産を失ったら元も子もないとの反論にバツが悪そうな顔をして、着物からはみ出しそうな豊満な胸を揺らしつつ踵を返す。

「ほら、済んだ事を何時までも気にしないで次の街に行くよ」

「はああく、久々にゆっくり滞在出来ると思ってたのに」

「相変わらず賭け事がお好きなんですな綱手様」

博打の負けを踏み倒す為その場を立ち去ろうとする二人だったが、それを呼び止める聞き覚えが有る声に足を止め振り返った。

「アンタは……夕日紅かい？こんな所で出会うなんて奇遇だね」

「お久しぶりです綱手様。それにシズネも何年ぶりの再会かしら？」

目的の人物に辿り着いた紅は偶然を装って会話を始めようとするが、伝説の三忍と表

される綱手はこの遭遇が偶然では無いと既に見抜いていた。

「前置きはいいいよ。どうせ三代目に私を探し出して木の葉に連れ戻せって命令でも受けたんだろ」

「やはり気付かれましたか。確かに私は綱手様を探しにこの街に来ました」

「やっぱりね。悪いけど私に戻る気はこれっぽちも無いからそう三代目に伝えな」

そう言つて去ろうとする綱手だったが、紅は話だけでも聞いて欲しいと会話を続けようとする。

「しつこいよ。それに私はこの街に長居出来ない理由が有るんだから邪魔するんじゃない」

「ではその理由が解決したら話だけでも聞いて頂けますね？」

紅の申し出に綱手は話だけならなと答えるが、それを聞いていたシズネは紅を手招くところの街だけで背負ってしまった借金の額をそつと耳打ちする。

「……そんなに？流石にそれは想定外の金額だわ」

「さあどうする。言つておくけど私が背負った借金の全額に比べたらまだまだ序の口だよ」

何故か偉そうに胸を張る綱手だったが、紅の隣に控えていた白から出て来た言葉に耳を疑つてしまう。

「分かりました。ではその借金は僕が支払います」

「はあ？どこのガキか知らないが大人の会話に口出しするんじゃないよ」

「見つけたぞ!! さあ、博打の負けを払って貰おうか!!」

いきり立つ博徒の集団に対し白は歩み寄ると、巻物からいくつかのトランクケースを取り出す。

そしてケースの中に敷き詰められた札束を確認させ、ケースと引き換えに綱手の背負った借金の借用書を受け取り懐にしまい込んだ。

「さあ、これでゆつくりとお話し出来ますよね」

「……紅、この子はどこの大富豪の御令嬢様だい？」

「その事も含めてまずは落ち着いて話が出来る場所に移動しませんか？」

白がサスケの協力者である以上の事を知らない紅は綱手の質問に曖昧な返答をする
と、綱手に今更逃げたりしない様にと釘を刺しつつ、白の勧めで短冊街で最も高級な宿
に向かって歩み出したのだった。

中忍選抜試験編。サスケと綱手

「そんな事言わずに戻って頂けませんか。今の木ノ葉には綱手様が必要なんです」
「本当にしつこいね。私はもう木の葉とは関係ないって言ってるだろ」

短冊街でも一二を争う高級旅館の一室で、紅は綱手に酒を注ぎながらこれまでの経緯を説明し木ノ葉への帰還を承諾して貰おうと説得を続けていた。

だが借金を肩代わりして貰う事を条件に話を聞くと約束した綱手だったが、だからと言つて木ノ葉に戻る約束をした覚えは無いと言ひ張り説得は難航してる様子だ。

「綱手様、そう仰らずに中忍試験の間だけでも戻られませんか？」

「お黙りシズネ。一度戻つたら最後、中忍試験が終つたとしても三代目と相談役が私に自由を与える訳ないだろ」

シズネの言葉にも耳を貸さない綱手はコップに残つた酒を一気に飲み干すが、その光景を黙つて見続けていた白が差し出した紙に目を向けるとそのまま固まつてしまう。

「ではこの借用書の金額を今すぐ耳を揃えて支払つて頂きますね」

「ゴホツゴホツ!!冗談じゃないよ!!どうして私がそんな金を払わなきゃいけないんだ!!」

「借金を肩代わりしたのは綱手様が木ノ葉に戻る気になったと思つたからです。ですが戻つてもりが無いと仰られる以上、木ノ葉とは無関係の方の借金を徴収するのは当然のことでは？」

借用書を片手に笑みを浮かべる白に対し、綱手はなんとかこの状況を打破するべく思考を巡らせるが酒で鈍つた頭では碌な考えは浮かばなかつた。

「とは言えこのままだと踏み倒して逃げられてしまいかねません。紅さん、何か綱手様も納得出来る妥協案は無いでしょうか？」

「そうですね……一応有るには有るんですけど」

紅の口から告げられた妥協案に綱手は本当にそれが三代目が指示した内容なのかと訝しんだが、シズネからも妥協案ぐらいいは受け入れて欲しいと懇願され渋々承諾する。

「しかし大蛇丸に狙われてるうちにはのガキを鍛えるのが妥協案とはね。私が鍛えるだけの価値が有るガキなのかい？」

「ええ、きつと綱手様も彼の優秀さに驚く筈ですよ」

それは会うのが楽しみだと笑う綱手に酒を注ぎ足す紅は白と目が合うと思わず笑みを浮かべてしまうが、その笑みの意味をシズネは妥協案を聞き入れて貰つたからだと思解するのだった。

『ンツ……アアア』

(この声は……シズネ?)

泥酔して寝入ってしまったいた綱手の耳に聞こえて来たのは付き人であるシズネの息苦しそうな声だった。

自分と同じように飲み過ぎてしまったのかと思いい様子を伺おうと顔を横に向けると、そこには薄暗い部屋の中で四つん這いになり見知らぬ男に激しく密着されるシズネの姿が目映った。

(なっ!?!シズネっ!!一体どうなってるんだい!!)

そう叫ぼうとした綱手だったが身体が硬直した様に硬くなり声も発する事が出来ない。

幻術に掛けられたと判断した綱手は己のチャクラを乱して解こうとするが、一向に体の自由は戻らず跪く事もままならない。

(クツ、これ程の幻術を使う相手に不覚を取るとは)

『アヒツ、らめっ、ンアアアアッ!!』

身長から推測すると二十代にもなっていないであろう男に蹂躪され続けるシズネは一際大きく嬌声を発すると力なく崩れ落ち、それに満足した男は綱手に近付くとその豊満な双丘に手を伸ばす。

(クソツ!!この私がこんな奴につ!!)

「綱手様?綱手様どうかさされましたか?」

自らの名を呼ぶ声に我に返った綱手の目に映ったのは心配そうな顔をして覗き込むシズネの姿だった。

「シズネ?お前、男に蹂躪されてたんじゃ」

「あひい!?つ、綱手様一体どんな夢を見てたんですか!!」

綱手の問い掛けに狼狽して動揺するシズネを放置し、綱手は手を頭に添えて己のチャクラの乱れを確認するが幻術を掛けられたにしてはチャクラが安定してるので、シズネの言った通り夢をみていたのだろうと結論付ける。

「やはり飲み過ぎたみたいだな……もう一度寝るか」

「ちよ、その前に質問に答えて下さい!!私がどんな目に遭う夢を見てたんですか!!」

この歳になって欲求不満なのかと追及される前に眠ってしまおうと綱手は布団を頭から被って目を閉じるが、この時もしズネを表情を確認していれば普段とは違う不自然さを認識出来ていたかもしれないかった。

『アンツ!!ひやうつ!!もつと深く!!もつと激しく!!』

(今度は紅だと?まさか本当に欲求不満なのか私は)

既に何度目なのか数える気にもならない夢の光景に、綱手はこれが本当に夢なのか疑い出す。

しかし目覚める度に同室で眠っていただけの紅とシズネに奇異の目で見られてしまい、苛立ちを誤魔化す為に寝酒と称して呷った酒の影響で既にチャクラの乱れを確認するのも億劫になっていた。

(チツ、どうせ私に手を出す前に醒めてしまおうんだ。無視して寝続ければその内見なくなるだろ)

紅の身体を蹂躪し終えた男が近付いて来るが綱手は相手にせず目を閉じてしまう。

だが、そんな綱手の考えを裏切るかの如く男は遂に綱手の身体にも手を出した。

浴衣を強引に引き裂きそこから現れる巨大な塊を驚掴みにした男は荒々しく揉みだし始めると、綱手はその刺激に夢では無く現実なのかと錯覚してしまう。

(くう、なんだこの感覚は、まるで本当に揉まれているみたいだ)

自由に動かせない肉体だが感覚だけは鋭敏な為、男から与えられる刺激に思わず酔いしれてしまいそうになる。

(ハッ、何を考えてるんだ私は。こんな夢は絶対にあり得ない。やはりこれは幻術だ)

あまりにも強烈な快楽をその身に受け逆に冷静さを取り戻した綱手だったが、だからと言つて事態が好転するかと言われれば話は別だった。

寧ろ幻術に気付いた綱手に手加減は無用と与えられる刺激は強さと激しさを増していき、遂に男は綱手の下半身に己の下半身を添えると一気に押し込んだ。

(カハッ!?!?!、これが本当に幻術か?ま、まるで本当に私の身体にコイツの身体がッ)

緩急も何も無い只々強引に己の欲望を発散するだけの男の動きに、綱手は自分が何も出来ない女だと教え込まれてる感覚に陥つてしまう。

(ウッ、グッ、この私を、綱手様を舐めるんじゃないよ!!)

決して相手に屈しない様に気丈に振る舞う綱手だったが、それを嘲る様に男の攻めは激しさを増していく。

(げ、幻術だ。これは只の幻術だから実際には何も起きて無い)

下腹部や肌に伝わる触感、肌と肌がぶつかり合う音、男に強引に注ぎ込まれた口の中に広がる味と鼻孔に伝わる匂いも全て偽りだと綱手は自分に言い聞かせる。

「残念だな。その答えだと50点つてところだ」

今まで臆げだった男の顔がハッキリと認識出来た綱手の目に真つ先に飛び込んで来たのは、赤い光を放つ写輪眼であった。

幻術から解放された事をまだ認識出来ない綱手だったが、このまま自由にするつもりは無い俺はこれは幻術では無く現実だと分からせるべく、これまで培った技術を駆使して綱手の肉体を隅々まで攻め立てる。

「ひうつ!!おっ、お前は、うちはサスケなのかっ?ど、どうしてこんなあ」

剥き出しとなつている綱手の胸を揉みながら万が一の反撃に備えていると、綱手は幻術から解放されたにも関わらず自慢の怪力を発揮する事無く成すがままに揉まれ続けた。

「俺が此処に居るのは事前に紅に綱手を発見したら口寄せする様に頼んでたからだ。綱手が上手くチャクラを練れないのはさつき飲んだ酒に薬を仕込んだから。その薬は綱手が泥酔してる時にシズネに提供させた。質問の答えはこれで十分か?」

正直これ程上手く事が進んでいる事に一番驚いてるのは俺自身だが、折角のチャンスを生かすも殺すも俺の技術に掛かっている為、手を緩める事無く綱手の肉体を蹂躪する。

「し、シズネにも手に出したのかつ!! 貴様は絶対に許さなアアアッ!!!」

怒りが頂点に達したであろう綱手だったが、それよりも強烈な刺激を俺に与えられた事で悲鳴の様な嬌声を発して身体を痙攣させる。

「どうした? 流石に部分倍化の術を使えるなんて想像してなかったか?」

「んごっ、ヒグツ、んぎいっ」

波の国の任務でチョウジからコピーした倍化の術に俺なりのアレンジを加えて会得するに至った部分倍化の術に、綱手は今まで以上の圧迫感が下腹部から脳天に伝わり、だらしなく口を開き呂律の回らない口で俺を罵倒する。

「ま、秋道一族程デカくはならないがその代わりに」

「おぐツ!?! お、大きさがっ、不規則に変化してえ」

不規則かつ流動する様に膨張と縮小を繰り返す部分倍化の術に加え、上忍クラスのものも耐えきる事が出来なかった俺本来の動きを受けた綱手は淫らに乱れた。

「なあ、俺の実力を評価するなら頼みを聞いてくれるか?」

俺の捌手に翻弄されているとはいえ、本来の実力は今の俺では到底太刀打ち出来ないのが綱手だ。

う そんな相手が中忍試験以降も俺の師匠になってくれれば一族復興は盤石となるだろう

「はうんっ!!ちよ、調子に乗るなクソガキいいいい!!」

トドメのつもりで放出した一族復興の素を注がれながらも綱手は屈しきらず、意識を失つてしまった。が、無論このまま休ませる程甘くは無く、見た目通りの意味で俺の手には余る胸を掴むと、その厚みと大きさに負けない様に指先にチャクラを込め揉みしだいた。

数日後、木ノ葉崩しを画策している砂の忍者は木ノ葉の里に綱手が戻って来たとの噂を耳にするのだが、風影から中止命令が下されない為、予定通り計画を進めるのであった。

中忍選抜試験編。本戦開始

綱手が木ノ葉に戻つて来た知らせはすぐさま里中の人間に知れ渡つた。

アニコが砂隠れの忍者から聞き出したという木ノ葉崩しの情報の報告を受け、その計画を逆手に取り音と砂を迎え撃つ準備を進めていた木ノ葉の忍者達は皆綱手の帰還を歓迎した。

「いよいよ明日ですね。綱手様は今日もうちはサスケの修業に付き添つておられるのですか？」

「うむ。サスケが大蛇丸に狙われているのならば、自分が近くに居た方が対処しやすいと言ひ出した時は願つてもない申し出と思つたのじゃが……」

三代目は綱手が木の葉に帰属する為に掲示した幾つかの条件を改めて考察し始めた。

条件の中に借金の肩代わりが含まれていたのは綱手らしいと思う一方、大蛇丸に対抗する為との理由で禁術も書き記された忍術の巻物の貸し出し許可等、非常時で無ければ三代目の一存では決められない内容も少なく無かつた。

しかしそれも全ては大蛇丸の野望を喰ひ止める為と三代目は結論付けるが、綱手が木の葉に戻つた本当の理由を知る者はサスケとその協力者のみである。

「まさかあの綱手が自分の意思で木ノ葉に戻つて来るとはのお」

「ええ、お陰で大蛇丸に対抗するには心強い限りです」

一方同時刻。ナルトの修業に付き合っていた自来也は、ナルトが口寄せの術修業の際に九尾の力を僅かだが解放して操つた事を担当上忍であるカカシに伝えていた。

「やはり自来也様にナルトを預けたのは正解でした。今後もナルトの事をよろしく願います」

「おいおい、儂は綱手と違つて木ノ葉に居座るつもりはないぞ。中忍試験が無事終ればまた小説のネタ探しに取材の旅に出るつもりだし」

それはつまり木ノ葉崩しを阻止する為に力を貸すという意味かと敢えて問わず、カカシは自来也に改めて感謝の言葉を述べる。

「それにしても綱手がうちの小僧と四六時中一緒とはの。何か間違いが起きたら一大事だとは思わんか？」

「いや、それは流石に飛躍した妄想では無いでしょうか」

愛読書がイチヤイチャシリーズなだけあつて自来也の言う間違いを直ぐに理解したカカシだったが、年齢差以上に噂で伝え聞いた綱手の性格からそれはあり得ないだろう

と否定する。

「うむ、次のイチヤイチャシリーズのネタに使えるかと思つたがやはり無理が有るか」
「ま、小説としてなら面白いストーリーになるかもしれないよ」

事実は小説より奇なり。作者と読者の違いは有るが、小説に関わる二人がその言葉の意味を実感するのはまだ先の話であつた。

同じ三忍と言つても多彩な術を使用する大蛇丸や自来也とは違い、綱手の最大の売りは医療忍術とそれを応用したチャクラコントロールで発揮される怪力を活かした体術だ。

しかし中忍試験本戦までに残された時間は短く、修業を始める前に綱手は技術以上に知識が物を言う医療忍術を完全に会得するのは影分身を総動員したとしても難しく、中途半端な結果になってしまう可能性も覚悟しろと俺に告げた。

「だから私は医療忍術よりも体術とチャクラコントロールに重点を置いた修業をお前に課したんだが……色々と予想を裏切る奴だなお前は」

複雑な表情で呟く綱手を尻目に、俺は修業の総仕上げとしてチャクラを必要な箇所に集中させる。

それと同時に左手の白、右手の紅、そして下半身と密着していたシズネは嬌声を発しながら身体を揺すりだした。

「「あひい、ひあつ、ンハアアアアアッ!!」」

医療忍術の基本である掌にチャクラを集中させて傷ついた部位の治療を促進する術、掌仙術を応用してシズネ達の身体を活性化させて肉体の感度も鋭敏化させる。

そしてある意味では医療忍術以上に繊細なチャクラコントロールにより、俺は自らの体を殆ど動かす事無く指先と下半身の先に集めたチャクラの形態変化でシズネ達を思うがままに支配した。

「アッ、アッ、アッ!! 駄目ッ、指だけでまた僕う!!」

「わ、私もっ、はあああん!!」

綱手の付き人という名目で在住許可を得た白と紅がほぼ同時に達して意識を失い、手持ち無沙汰になった両腕を使い俺はシズネの身体を四つん這いから仰向けにして覆い被さると、両手を胸に添えて胸と下半身の三点からチャクラを乱回転するように形態変化させて掻き乱す。

「アヒッ、ひいッ!! らめえ、アヒいい!!」

一族復興の為に培った技術が思わぬ形で医療忍術習得の役に立った事に感謝しつつ、俺はシズネの唇を塞いで絶頂で発した嬌声を飲み込む様に舌を絡めた。

「この短期間で基本とはいえ医療忍術を会得し、更にチャクラコントロールと僅かな体の動きでシズネ達を自由自在に翻弄するのは大した奴だと褒めてやる。だがその技術も戦闘に活かさなければ試験では宝の持ち腐れだぞ」

それに毒物や薬物の知識もまだまだ未熟等と不機嫌そうに呟いている綱手の真意を見透かすと、俺は失神したシズネから離れ綱手に近付き胸を鷲掴みにする。

「なら試してみるか？ 昼間の体術修業の時みたいに本気で殴りかかっても良いんだぞ」
「あうっ、バカ、止めろっ、はうん!!」

俺の不意打ちに拳を振りかざす綱手だったが、攻撃よりも回避に重点を置いた綱手の体術修業により先読み能力が更に向上した俺は拳を避けて逆に掴まえると、昼間の再現をする様に綱手を押し倒して雷遁に性質変化させたチャクラを手に集中させて胸を揉みながら既に固くなっていた突起を指で弾く。

「ヒョウッ!!ま、またその術を使う気かあ」

「今も修業中だから当然だろ。師匠なら雷遁の性質変化の精度も評価してくれよ」

俺が雷遁の性質変化を習得した目的はうちはサスケの代名詞とも言える忍術、千鳥を会得する為だ。

原作とは違いカカシでは無く紅が俺の担当上忍である為、中忍試験中に習得するのは半分諦めていた術だったが、綱手が三代目から貸し出しを許可された巻物の中に千鳥の印も記されていた。

となれば決め手としてこの上ないこの術を覚えないうという選択肢は無く、本命の術と同時進行で影分身に習得させていたのだ。

「ほら、反撃しないのか？ 身体が麻痺して動けないなら勝手に動くぞ」

正直言つて医療忍術も覚えながら更に千鳥と本命の術のを習得出来るかは賭けだった。

だが結果は影分身に修業分担させたとは言え、その賭けに俺は勝った。

千鳥修業の際に副次的に会得した乱身衝モドキを使い、身体が満足に動かせないどころか電氣的刺激で触覚も鋭敏となった綱手の巨大な双丘を全て露わにして揉み解す。

「アツ、んっ、くう、ああああ」

本当の年齢が五十代である事を忘れてしまう程に雌の顔をした綱手に対し、俺は部分倍化させた下半身を胸に挟ませると、更に口を開けて啞える様に指示をする。

「んぶっ!!ぶはっ、はあはあ、このクソガキめえ」

「そのクソガキに伝説の三忍綱手様が屈服して従順な師匠になって戻って来た。まあ信じてと言われても信じる奴はいないだろうけどな」

俺の挑発じみた台詞に睨み付ける綱手だったが、雷遁を流し込んでいないにも関わらず身体を痙攣させ、自らの手で胸を寄せて動かし俺の下半身に刺激を与えている姿は従順以外の何者でもない。

「ンツ、従順なのは師匠じゃなくて弟子と相場は決まってるんだよ。私の弟子なら弟子らしく振る舞いな」

あくまでも自分の方が上だと振る舞いたい綱手に上下関係を分からせるべく、俺は綱手の頭を掴んで前後に動かしながら腰を震わせる。

「さうで、明日に備えて修業の総仕上げだ。最後まで付き合えよ」

「師匠に命令するなんて、本当に弟子として最低な奴だよおおお!!」

口元から溢れさせた液体を拭い取り舐める綱手を四つん這いにさせ、俺は押し掛かる様にして背後から攻め立て綱手との修業の総仕上げに勤しんだ。

「はあ……明日は本戦だって言うのにその自覚が有るのかしら?」

「その台詞さつきまで同じ事してた私達には言えないと思いますけど」

その後アッコと夕顔も混じえた嬌声は南賀ノ神社から途絶える事無く鳴り続き、一寝入りした俺が目覚めると時刻は本戦第一試合の開始時間十分前であった。

中忍試験本戦第一試合。その開始時刻を過ぎてもサスケは姿を見せなかった。

「サスケはまだ会場に姿を見せぬか……残念じやが失格にするしかありませんな」

「火影殿、それは止めた方がよろしいのではありませんか」

規定により失格処分にしようとする三代目火影に風影は試合順を変更してでも待つべきだと告げた。

「ハツキリ申し上げますが、この場に集まった忍頭や大名は私も含めこの試合を楽しみにした者ばかりでしょう。うちはと日向、木ノ葉の名門一族の天才同士の戦いが失格処分で見られないとなつてはこの中忍試験の価値は皆無に等しい」

風影の言い分に三代目火影は反論しようとするが、会場の野次がサスケの失格よりも試合の開始を望む声ばかりなのを聞き例外的に順序変更の指示をし始めた。

（うふふ、折角サスケ君の本当の実力が分かるチャンスだもの。失格なんかで潰されたら勿体無いわ）

木ノ葉崩しに砂隠れを巻き込む為風影を殺害し化けている大蛇丸は、自らの転生の器にする予定のサスケがどれだけ実力を上げているか楽しみを隠しきれないのか、三代目

火影に気付かれぬ様に顔布の下で舌嘗めずりをする。

（風影め、木ノ葉崩しは必ず阻止させて貰うぞ）

流星に大蛇丸が風影に成り代わってるとは予想もしていない三代目火影だったが、風影がいつ行動を起こしてもすぐに対応する為警戒心を強めた。

「はい、はい、分かりました。では第二試合を前倒ししてうちはサスケと日向ネジの試合は最後に……」

（うちはサスケめ……試合に遅れるとはお粗末な奴だ）

試験官の不知火ゲンマに試合順変更が伝えられ、ゲンマは観客達に説明しようとする。

しかしその時、会場の人間が待ちわびていた人物が到着する。

「うちはサスケだ……まだ失格にはなっていないよな？」

瞬身の術で一瞬内にその場に現れたサスケの姿に、会場の人間はまるで優勝者が決定したかのような歓声を上げるのだった。

（焦ったあ、シャワーを浴びたから匂いは大丈夫だよな？）

中忍選抜試験編。サスケ対ネジ

「キヤー!!サスケ君カッコイイ!!」

「サスケ君間に合ったんだ……良かった」

サスケの登場にサクラ達女性陣は沸き立つが、ナルト達男性陣はというと失格処分にもならず当り前の様に試合を始めようとするサスケに不快感を露わにする。

「ケツ、遅刻して来た癖に格好つけやがってよ」

「そうだそうだってばよ。どうせ昨夜腐った牛乳でも飲んでさつきまで下痢してたに決まってるってばよ」

ナルトの発言に殺気の籠った視線が集まったのを感じたキバ達はナルトから距離を取ると、サスケへの罵詈雑言が悲鳴に変わるのを聞こえないふりをして試合の予想を始めた。

「で、どっちが勝つと思うよ?俺はネジが勝つ方に賭けるぜ」

「僕はサスケに賭けようかな。何だかんだで同期で一番強いのはサスケだし」

「俺はネジだ。何故なら奴の柔拳はサスケの体術を凌いでいる」

「俺はメンドクセーからパス。て言うか俺は自分の試合だけで手一杯だったの」

試合を控えているシカマルは自分が戦う事になる砂の忍者テマリの方に視線を向けると、表情こそは変わって無いがサスケを見る目がいの達と同様の物である事に気がつき、結局コイツも女かと深く溜め息を吐いた。

騒がしい木の葉の下忍達とは対照的に砂隠れの下忍3人は異様なほど静かに佇んでいた。

「やつと前座の試合が始まりそうじゃん。精々木の葉の忍者同士で潰し合えばいいじゃん」

「カンクロウ……アンタちよつと黙ってな」

何故か姉であるテマリに殺気を籠った目で睨まれたカンクロウは後退りし、何か機嫌を損ねる事をしたのかと考え込むが心当たりが思い浮かばない。

（クツ、木ノ葉崩しの情報漏れがバレない様に事が起きるまで砂隠れの忍者らしく振る舞えって言われてたけど、私もアイツ等みたいにサスケを応援したい）

テマリが不機嫌でいる理由をカンクロウが知るのももう暫く先の事になるだろうが、そんなテマリとカンクロウのやり取りには一切興味が無い我愛羅は、品定めをする様にサスケとネジを睨み続けていた。

そして試合を観戦する為に会場を訪れていた日向一族の長、日向ヒザシは娘のハナビにネジの戦いをその目に焼き付けておく様に指示をする。

「いよいよ始まるか。ハナビ良く見ておけ、あのネジこそ日向の才の寵愛を受けた者だ」
「はい父上……あの人がうちはサスケさん」

だがハナビが注目しているのはネジでは無くサスケであり、その事に気付いたヒザシはハナビを叱咤しようとした。しかし、木ノ葉崩しが始まった際の警護配置として周囲には各国の大名が多く座っていたため、大名の目を気にして気付かなかったフリをし、ネジの戦いぶりを亡き弟に代わり目に焼き付けようと目を凝らした。

「やれやれ、どうなる事かと思っただけどようやく始まりそうだな」

「ああ、奴らがどのタイミングで始めるか分から無いから常に周囲に目を配らないとな」
お陰でネジの試合観戦に集中出来ないなど冗談を言うガイとそうだなと相槌を打つカカシだったが、神妙な顔で会場の客席を見回すアスマが気になり声を掛ける。

「ちよつとちよつと、いくら何でもそんな露骨に見回したら怪しまれちゃうでしょうが」
「そうだぞ。それともまさか大蛇丸を見つけたとか言い出すんじゃないだろうな」

「居ないんだ……紅も会場に来てる筈なのに、一体何処に居るんだ」

一ヶ月ぶりに会えると思つてたのにと呟くアスマに、カカシとガイは揃って溜息を吐

きつつも未だ現実を受け入れられないアスマを励ます様に肩を叩くのだった。

「随分と凝った演出の登場だったな。てつきり逃げ出したのかと思っただぞ」

「ただの寝坊だ。待たせて済まなかつたな」

ネジの挑発に俺は遅刻した事は事実なので正直に遅れた理由を告げたのだが、それ之余裕の冗談と捉えたのかネジは俺を睨み付けてくる。

「その余裕の態度も今の内だけだ。うちとは日向、木ノ葉においてどちらの一族が最強かこの試合で俺が証明してやろう」

「うちは一族はもう木ノ葉には俺しか居ないんだから、今更お前が証明しても意味ないだろ」

だから俺は一族復興の為に文字通り精を出している訳だが、俺の言葉を曲解したのかネジは機嫌を悪くして眼光を更に鋭くさせた。

「それは日向の分家に生まれた俺では貴様の相手は務まらんと言いたいのか。ならば思い知らせてやろう、貴様が俺に敗北するという運命をな」

「お前等お喋りはそこまでだ。そろそろ試合を始めるぞ」

試験官に促される形で会場の中心でネジと対峙すると、俺は自分が負ける訳がないと自信に満ちたネジとどう戦うか頭の中でいくつか思案する。

「それでは第一試合、日向ネジ対うちはサスケの試合。始め!!」

この後に待ち受けている木ノ葉崩しに備えて手札を必要以上に晒さず勝利しなければならぬのが難点だが、ある程度考えを纏め終わった所で試合開始の合図がされた。ネジは俺が遠距離系忍術を使う前に勝負を決めるつもりなのか一気に距離を詰めて来た。

「油断したな。貴様はもう八卦の領域内だ」

ネジは柔拳の奥義八卦六十四掌を繰り出す。綱手との修業で回避力が飛躍的に向上している俺はその全ての攻撃を躲し、逆にカウンター気味にネジの顎目掛けて拳を突き出し殴り飛ばした。

「ガハッ!?ば、バカな、俺の動きを見切ったと言うのか?」

「お前が倒れてる以上そうなるな。ギブアップするなら今の内だぞ」

この状況はネジにとって想定外の事態だったらしく、ネジは態勢を立て直す為に俺から離れ距離を取る。しかし、その隙に俺は印を結び2体の影分身を作り出す。

「あああつ!!サスケの奴、俺の影分身の術パクリやがったつてばよ!!」

客席からナルトの怒号が聞こえた来たが相手にするつもりは無いので無視すると、俺はネジを中心に影分身を含め三方から囲う様に位置取った。

「火遁・鳳仙火の術」

「無駄だ!!八卦掌・回天」

三方から迫る多数の火球をネジは全身のチャクラ穴からチャクラを大量放出しながら回転し全て掻き消してしまうと、ネジは落ち着きを取り戻したのかまた自信に満ちた表情になっていた。

「見たか、これぞ日向一族最強の絶対防御術。この回天の前には如何なる攻撃も無意味だ」

「どうだろうな。どんな術にも穴となる弱点はあるらしいぜ」

「なら試してみるがいい。お前はもう俺に触れる事すら出来ん」

回天の防御力を誇るネジの自信を折るべく、俺は影分身と共にネジに向かって殴り掛ける。

「無駄だと言ってるのが分からないのか!!」

俺の無策とも思える突撃に怒ったネジは再び回天を使い迎撃しようとするが、チャクラを込めた俺の拳がネジでは無く地面を殴りつけた事で発生した地割れに足を取られ、バランスを崩して蹠踉めき膝を付いてしまう。

「何っ!?グホッ!!」

その隙を突かれたネジは影分身に殴られ蹴り飛ばされ、そのまま地面を転がり倒れ伏したまま中々起き上がろうとしない。

「くッ、足場を破壊するとは盲点だった。だがそれでも回天そのものを破られた訳では無い」

「その格好で言われても負け惜しみにしか聞こえないぜ」

慢心してるつもりは無いが同じ一ヶ月の準備期間を与えられたとはいえ、俺は影分身に修業を分担させて単純計算でネジの1.2倍の修業を積んだのだ。

更に師匠となった綱手の指導を受け、上忍のアンコ達や白を相手に修業を重ねて来た今の俺が本気を出せば、いくらネジが天才とはいえ苦戦する事はまずあり得ないだろう。

「どうする?まだ続けるなら相手になってやるぞ」

「当然だ。今度こそ俺の柔拳で貴様を仕留める!!」

予想を大きく裏切る試合内容に、サスケとネジの試合を観戦している者達は驚きを隠せずいた。

「嘘だろ？サスケの奴、あのネジを圧倒してるぜ」

「俺の目に狂いが無ければ予選の時はネジの方が実力は上だった。それが僅か一ヶ月でこれ程までの差を付けてしまうとは」

キバとシノは限られた準備期間で実力を信じられない程高めたサスケに驚愕し、先程まで野次を飛ばしていたナルトは一言も発さず悔しそうに歯噛みをする。

「チクシヨウ、どうしてアイツはあんなに俺より先に行っちゃうんだってばよ」

「今更妬んだって仕方ないだろ。自分の実力の範囲内で適当に頑張るしかないんだよ」

「そうそう、サスケは僕達とは違って天才なんだから」

マイペースなシカマルとチョウジは悔しがるナルトを慰めるが、その慰めが却ってナルトのプライドを刺激してしまい焦りと苛立ちを生み出してしまう。

（クツソオ、こうなったら俺もあのゲジマユを倒した我愛羅をボコボコにして、サスケや皆をアツと言わせてやるってばよ）

そう心の中で誓ったナルトは離れた場所で試合を観戦している我愛羅を睨み付けるのだった。